

IGS Project Series 14

国際シンポジウム

哲学者と皇太子妃

冷戦期日本における自由と愛と民主主義

International Symposium

The Philosopher and the Princess

Freedom, Love, and Democracy in Cold War Japan

Institute for Gender Studies

Research Organization for the Promotion of Global Women's Leadership

Ochanomizu University

IGS Project Series 14

国際シンポジウム

哲学者と皇太子妃

冷戦期日本における自由と愛と民主主義

International Symposium

The Philosopher and the Princess

Freedom, Love and Democracy in Cold War Japan

【日本語版: Japanese】

国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」実施概要.....	2
基調講演 ジャン・バーズレイ	
ロマンスの追憶が映し出す現在:60 年後に振り返る 1959 年皇太子ご成婚.....	4
基調講演 ジュリア・C・ブロック	
日本におけるボーヴォワール:『第二の性』の反響をたどる.....	12
コメント 北村文 皇太子妃と哲学者、同時代の「日本人女性」.....	22
コメント ゲイ・ローリー.....	26
質疑応答.....	30
「IGS 通信」掲載開催報告.....	34
写真集 Photograph Collection.....	36

【英語版: English】

International Symposium “The Philosopher and the Princess” Outline.....	38
Keynote Speech Jan Bardsley	
Romance Revisited: The Royal Wedding of 1959 Viewed Sixty Years Later.....	40
Keynote Speech Julia C. Bullock	
Beauvoir in Japan: Tracing the Impact of <i>The Second Sex</i> on Japanese Women.....	49
Commentary Aya Kitamura “The Japanese Woman” behind the Princess and the Philosopher.....	62
Commentary Gaye Rowley.....	67
Question and Answer Session.....	71
Symposium Report.....	76

国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」実施概要



2019年5月19日(日)、お茶の水女子大学にて、国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃:冷戦期日本における自由と愛と民主主義」が開催された。冷戦初期の社会動態をジェンダー表象視点から分析するという企画は、ジャン・バーズレイお茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授が進めている先駆的な研究プロジェクトに基づくものである。

基調報告では、当時新しい生き方を模索した若い女性たちの姿が描き出され、それに応答してのコメントでは、女性の多様性に目を向けることの重要性やエンパワメントの必要性が指摘された。論点は、日本におけるフェミニズムやジェンダー概念の浸透などへも伸展し、21世紀現在の日本のジェンダー状況について考える上でも有用な多角的な議論が展開され、参加者にとって学ぶところの多いシンポジウムであった。

【日時】2019年5月19日(日)13:30～16:30

【会場】国際交流留学生プラザ2階 多目的ホール

【コーディネーター】ジャン・バーズレイ(IGS 特別招聘教授/ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)

【基調報告】

ジャン・バーズレイ「ロマンスの追憶が映し出す現在:60年後に振り返る1959年皇太子ご成婚」

ジュリア・C・ブロック(エモリー大学准教授)「日本におけるボーヴォワール:『第二の性』の反響をたどる」

【ディスカッサント】北村文(津田塾大学講師)、ゲイ・ローリー(早稲田大学教授)

【司会】大橋史恵(IGS 准教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語(日英同時通訳)

【参加者数】72名

【シンポジウム要旨】

1950～60年代の経済成長と、女性の教育機会の拡大、女性雑誌の隆盛、そして中流意識の浸透は、女性たちに新しい可能性をもたらした。彼女たちにとっての新しい選択肢とは何だったのか？女性たちが自由と自己探求、愛という「夢」を実現させるには、何が必要だったのか？本シンポジウムでは、フランス人フェミニスト哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃を取り上げ、この問いに迫る。自己表現、セクシュアリティ、社会との関わり方といった面では極端に異なる両者だが、いずれも、当時大きな社会的影響力を持っていた。また、冷戦という時代背景を踏まえることで、哲学者と皇太子妃に関する議論から、1950～60年代の国際情勢の渦中に日本が自らをどのように位置づけたのかを見出すことができる。

【登壇者紹介】(当日プログラムからの抜粋)



ジャン・バーズレイ

お茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授。『Women and Democracy in Cold War Japan』(ブルームスベリー学術出版、2014 年)をはじめ、著書多数。『The Bluestockings of Japan: New Women Essays and Fiction from Seitō, 1911-16』(ミシガン大学日本研究センター、2007 年)では、2011 年の平塚らいてふ賞(日本女子大学)を受賞。ローラ・ミラーとの共編で『Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan』(カリフォルニア大学出版、2011 年)、『Bad Girls of Japan』(ハルグレイブ社、2005 年、英語)を刊行。



ジュリア・C・ブロック

エモリー大学准教授(日本学)、ロシア・東アジア言語文化学部長。代表的著作に、文学作品のフェミニスト表象に関する『The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973』(ハワイ大学出版、2010 年)、戦後の男女共学化批判を分析する『Coeds Ruining the Nation: Women, Education, and Social Change in Postwar Japanese Media』(ミシガン大学出版、2019 年)、領域横断的な日本のフェミニズムについての共編著『Rethinking Japanese Feminisms』(ハワイ大学出版、2017)がある。



北村文

津田塾大学講師。専門分野は社会学、ジェンダー研究、日本学研究。東京、ホノルル、香港、シンガポールでエスノグラフィー調査を実施。代表的著作は、『日本女性はどこにいるのか：イメージとアイデンティティの政治』(勁草書房、2009 年)、日本の日英バイリンガリズムとジェンダーを分析した「English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan」(『Gender and Language』10(1)、2016 年)、「Gender, Representation and Identity: The Multifold Politics of Japanese Woman Imagery」(『Handbook of Gender in East Asia』所収、2020 年)、共編書『現代エスノグラフィー』(新曜社、2013 年)。



ゲイ・ローリー

早稲田大学教授。専門分野は日本文学。日本人女性の伝記著作、翻訳を数多く手がけている。代表的著書は、与謝野晶子の『源氏物語』への傾倒を中心に綴った伝記『Yosano Akiko and The Tale of Genji』(ミシガン大学日本研究センター、2000 年)、江戸初頭の宮廷での密通スキャンダル猪熊事件に巻き込まれた中院局の生涯をたどる著作『An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan』(コロンビア大学出版、2013 年)。柳沢吉保の側室、正親町町子による日記文学『松蔭日記』の翻訳書を近刊予定。



大橋史恵

お茶の水女子大学ジェンダー研究所／人間文化創成科学研究科准教授。主に中国、香港、日本における中国語話者コミュニティの再生産領域における移動とジェンダーの問題について研究をおこなってきた。2011 年に北京での長期的なフィールドワークの成果をまとめた『現代中国の移住家事労働者：農村-都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』(お茶の水書房)を出版し、同年、第31回山川菊栄記念婦人問題研究奨励金を受賞している。現在は、香港の移住家事労働者とローカルな家事労働者の労働関係や労働問題に注目している。また、東アジアのトランスナショナル／トランスローカルな女性運動にも関心がある。



基調講演

ロマンスの追憶が映し出す現在

60 年後に振り返る 1959 年皇太子ご成婚

ジャン・バーズレイ

ノースカロライナ大学チャペルヒル校

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

.....
お茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授。『Women and Democracy in Cold War Japan』(ブルームスベリー学術出版、2014 年)をはじめ著書多数。『The Bluestockings of Japan: New Women Essays and Fiction from Seitō, 1911-16』(ミシガン大学日本研究センター、2007 年)で、2011 年の平塚らいてふ賞(日本女子大学)を受賞。ローラ・ミラーとの共編で『Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan』(カリフォルニア大学出版、2011 年)、『Bad Girls of Japan』(パルグレイブ社、2005 年)刊行。

【要旨】 2019 年 4 月 10 日は、明仁皇太子と正田美智子さんの結婚式からちょうど 60 年の記念日であり、その翌月、二人は天皇・皇后位から退いた。本報告は、昭和ロマンスを追憶し、1959 年の「ご成婚」報道と、平民出身の「民間のプリンセス」に投影された希望を検証する。日本の女性誌の報道はこの「ご成婚」を、戦後の日本社会における新憲法の成果、開かれた皇室、ロマンチック・ラブの力の証として称賛した。信頼し合う夫婦であり献身的な親であり、かつ熱心に公務に取り組む美智子妃と明仁皇太子は、「マイホーム主義」と呼ばれる新しい核家族のイデオロギーを体現し、戦後の日本の家庭のモデルとなった。それから 60 年を経た 2019 年のメディア報道は、夫婦が添い遂げていることを称えつつ、ご成婚当時をノスタルジックに語っている。しかし、実のところ、そのノスタルジーからみえてくるのは過去ではなく現在なのだ。1950～60 年代の美智子妃のプリンセスとしての生き方の何を、改めて見出そうとしているのだろうか？

イントロダクション:「世紀のご成婚」を振り返る

本シンポジウム企画の起点となったのは、フランス人哲学者シモーヌ・ボーヴォワールについてのジュリア・ブロック先生の最新の研究です。ブロック先生が東京にいらして、その研究について話をしてくださることが決まった時には、とても嬉しく思いました。日本の女性文学、フェミニズム、そして最近では戦後の男女共学化の研究で知られるブロック先生には、日本におけるボーヴォワールの受容についての、さまざまな視点からの分析をお話しいたします。

私からは、ブロック先生のプレゼンテーションと「日本の女性たちはボーヴォワールに何を見たのか？」という設問について考える準備として、その対照的な事象である、1959 年のご成婚についてお話しします。

今から 60 年前の 1959 年 4 月 10 日、壮大なファンファーレとメディアの熱狂の中、民間出身の正田美智子さんと明仁皇太子の婚礼が執り行われました。この結婚は「世紀のご成婚」と呼ばれました。それから 10 年の間に、二人の間には三人の子どもが生まれ、その姿は理想の家族像となりました。皇太子妃は、主婦のモデルとなったのです。

主婦としての美智子妃のイメージの影響力を理解することは、なぜ、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが戦後日本でこれほどの共感と呼んだのか、どのようにボーヴォワールの考え方が別の選択肢として受け入

れられたのかを知る手掛かりとなります。

美智子妃の物語をボーヴォワールの視点で読めば「人はプリンセスに生まれるのではない、プリンセスになるのだ」ということができるでしょう。しかし、日本において民間出身の皇太子妃になるというのは何を意味していたのでしょうか？ 皇太子妃は、どのように、中流階級の主婦のロールモデルになったのでしょうか？ このご成婚は、どのように、冷戦初期の日本においてロマンチックな愛の力と民主主義と経済的繁栄を象徴するものになったのでしょうか？ 日本人々はプリンセス美智子の姿に何を見出したのでしょうか？

今年の4月、天皇皇后の引退により平成の世は終わりを告げ、メディアは再び二人の結婚と象徴的リーダーとしての公的な役割に焦点を当てました。美智子妃の人柄や業績を称賛する書籍や雑誌が、数多く刊行されています¹。こうした出版物のありようが、多くの日本人々にとっての天皇皇后の存在の意味を示しています。二人の幸せの瞬間をとらえたたくさんの美しい写真が、称賛と懐古の情を喚起します。

皇室のロマンスについて再考し、「プリンセスになる」とはどういうことかを考察するにあたり、これらの出版物で語られている二人の出会い、「愛による結婚」に対する熱狂、そして美智子妃の理想の主婦への変容についての物語を追ってみましょう。そして、より近年の二人のイメージから、皇室が目指している方向性について考察したいと思います。

プリンセスの時代

まずは、王室の女性たちについて、冷戦時代の世界的背景をみてみましょう。1950年代は「プリンセスの時代」でもありました。実在にせよ架空にせよ、プリンセスの物語は、戦争による荒廃を経験した世界中の人々を魅了しました。誰もが皆、「プリンセスになる」ことに夢中になりました。

英国のエリザベス女王とマーガレット王女姉妹、ハリウッドスター、グレース・ケリーのモナコ大公との結婚、ディズニーのアニメーション映画『シンデレラ』、オードリー・ヘップバーンが演ずる映画『ローマの休日』のアン王女。1953年のミス日本、伊東絹子らビューティ・クイーンたちも、水着姿のプリンセスになりました²。日本では、数多くの女性雑誌が、こうしたプリンセスたちの華やかな生活ぶりや恋愛、ファッションを紹介し、読者たちがプリンセスへの憧れと共感を抱くよう誘いました³。

ここに並んだプリンセスの姿に共通しているのは、若さと美しさとファッションです。また、彼女たちには、冷戦初期に文化面で果たした政治的役割もありました。プリンセスたちは、疑いの余地なく、共産主義者ではありません。ドレスとティアラをまとったプリンセスは、性差や私有財産や君主制を否定する共産主義とは無縁の存在です。プリンセスの姿は、階級制や伝統を想起させるため、民主主義からも少し距離を取っているように見え、そこがまた魅力となってもいたようです。今日の私たちの視点は、プリンセスのイメージから、異性愛規範と多産性、人種的特権性をよりはっきりと見て取ります。しかし、1950年代におけるプリンセスのイメージは、ほかの何よりも、ロマンチック・ラブの力を象徴していたのです。プリンセスとは、

¹ 近刊書の多くには、美智子妃の言葉が人生の教訓の形で引用されている。写真集には、エレガントなドレス姿がまとめられ、当時のファッションへのノスタルジアを感じさせる。刊行書の例は、朝日新聞出版編『美智子さまの時代』(2019年)、山下晋司監修『美智子さま：素敵なお言葉 61年の軌跡』(宝島社、2019年)

² Jan Bardsley, "Miss Japan on the Global Stage: The Journey of Itō Kinuko," in *Modern Girls on the Go: Gender, Mobility, and Labor in Japan*, eds., Alisa Freedman, Laura Miller, and Christine R. Yano (Palo Alto: Stanford University Press, 2013), pp. 169-192.

³ 本報告中の冷戦期のプリンセス、ビューティ・クイーン、主婦、1959年のご成婚報道については、Jan Bardsley, *Women and Democracy in Cold War Japan* (London: Bloomsbury, 2014). の研究成果に基づいている。

さっそうと現れる白馬の王子を待つ美しい女性で、王子は彼女をお城にとめない、二人は「それからずっと幸せ」に暮らすという物語の主人公です。おとぎ話はその「それからずっと幸せ」な暮らしがどのようなものなのかは語っていません。その点は、多くのフェミニスト批評家が指摘するところです⁴。

1950年代の日本には、結婚相手を探している理想の王子、明仁皇太子がいました。皇太子は、戦後の象徴天皇制の未来を担う存在です。メディアはそのお妃探しを追いかけ、候補者についての関心を煽りました。皇太子が正田美智子さんを選んだことには、皆が驚きました。富裕層の令嬢とはいえ、戦前の身分制度でいうところの「平民」の出身だったからです⁵。

テニスコートの恋

物語の中では、明仁皇太子と美智子さんの軽井沢のテニスコートでの出会いは偶然だったと語られています。今日では、そこに至るまでに様々なお膳立てがあったことが知られていますが、当時は、この時の「ひとめぼれ」の逸話に女性たちは魅了されました。

1959年の春、日本の女性雑誌は二人の婚約の話でもちきりでした。美智子さんのシンデレラのような変身の様子を綴る記事が次から次へと書かれます。カソリック系の学校で過ごした恵まれた少女時代から、魔法のようなテニスコートでの出会いの瞬間、明仁皇太子による求愛に至るまでのすべてが記事になりました。婚約成立までの水面下での交渉、婚礼準備期間の不安と気持ちの高まり、そして二人の新居のデザインについてまでも、のぞき見ることができました。二人と同じテニスウェアはどこで買えるか、ということもです⁶。

雑誌の記事に添えられた写真は、物語を語る上で重要な役割を果たしました。最も頻繁に使われたのは、二人がテニスコートにいる写真です。さて、テニスというのはどういう競技でしょうか？ テニスは、対等なプレーヤー同士がネットを挟んでプレイする競技です。そして、近代性や国際性を連想させるスポーツです。

ここに1958年に撮影された、テニスウェア姿の明仁皇太子と美智子さんが並んで座っている写真があります。この写真からはどういう印象を受けるでしょうか？

穏やかな微笑みとくつろいだ姿勢からは、二人の若い生命力、自然に備わった自信、そして親密さが感じられます。体を寄せて近づき、一緒にいることが心地良い。お互いに一緒にいることを「選んだ」のです。この写真の二人の姿のすべてに、一体感があり、自然です。しかし、このスナップショットの魅力には、根本的な矛盾が内在します。戦後社会に約束された民主主義とジェンダー平等が、皇室の家父長制と共にあるのです。矛盾はもうひとつあります。プライベートが公にされているという点です。皇室ファンは、皇室の人々が高みにいることを良しとする一方で、その公的な姿の背後にあるプライベートな生活について知りたいと切望するのです。

明仁皇太子から美智子さんへのプロポーズの言葉が最近話題になりました。「公的なことが最優先で

⁴ フェミニストたちによる創造的破壊アプローチの子ども向け書籍は、プリンセスのおとぎ話に新しいひねりを加えている。日本では社会学者上野千鶴子の翻訳で出版された、バベット・コール著『シンデレ王子の物語』、『シンデレラ姫物語』（松香堂出版、1995年）はその例。フェミニストの日本学研究者重松セツ著・A. Das 画の *Princess Ten Ten and the Dark Skies* (Guardian Princess Alliance, 2014) は、若い読者に地球環境の保護といじめの克服について教える書である。

⁵ 美智子の父、正田英三郎は、1959年当時アジア最大の製粉会社であった、日清製粉株式会社の社長。

⁶ ご成婚についての個別の雑誌記事については、Chapter 5, “Fashioning the People’s Princess” in Bardsley, *Women and Democracy*, 2014. 参照。

私的なことは後。場合によってはお助けできないかもしれない」という言葉が伝えられています。プロポーズを受け入れた美智子さんも、公務を一番に考えることを誓います。1959年の女性誌は、美智子さんが、真心と愛をもって、王子を孤独から「救い」、「普通の」家庭を持つチャンスを与えた、と語っています。メディアにより「民間からのお妃」として創り上げられた美智子さんのイメージは、同時に、皇室と一般の人々の距離を近づけました。このような語り口は、ロマンチック・ラブを支持する人々を「国民」としてまとめ上げる働きをしました⁷。

1959年のロマンチックなご成婚に沸いた日本社会ですが、恋愛結婚がお見合いと同じくらい一般的になるまでには、戦後約20年かかりました。バーバラ・サトウが指摘するように、当時の若い人たちにとって、どこでどうやったら結婚相手に巡り合えるのかは難問でした。デートの習慣はなく、若者が自ら結婚相手を探すことに、親たちは良い顔をしませんでした⁸。とはいえ、皇太子と皇太子妃の結婚は、若者にロマンチックな夢を与え、それに続けて、新しい家族の理想像を与えたのです。

米国メディアがみる皇室女性：雑誌『Time』の視点

米国雑誌『Time』の皇太子ご成婚特集も、1950年代の日本で「プリンセスになる」というのはどういうことかに関心を向けています⁹。『Time』は、民間からのお妃誕生は米国の功績だと書いています。そして、日本の女性たちは、新憲法によってもたらされた自由を満喫していると伝えています（この点については、ブロック先生の報告で説明があります）。さまざまな職業の女性の写真を掲載し、彼女たちの積極的な社会進出を称賛します。この女性たちは、アメリカの占領政策の成功の証なのです。『Time』が指摘するただひとつの難点は、女性と共に変わろうとしない、日本の男性たちの存在です。また、民間からのお妃誕生とその愛による結婚に反対を唱える右翼グループについては、日本の封建主義の残滓であると書いています。

同じ1959年、数か月後に『Time』はイギリスのエリザベス女王の特集を組みます¹⁰。ここでの焦点はイギリス連邦「コモンウェルス」の情勢にあり、英国内でのジェンダーの政治には全く触れていません。王室が模範的な家族モデルとなっている点は称賛しています。

こうした報じ方の差は、今なお存在する、米国メディアの先入観の表れです。日本社会について報じるたびに「ジェンダーの問題」が必ずといっていいくらい話題になるのです。1993年、小和田雅子さんの皇室入りを報じた米国メディアは、やはり、日本における女性の社会的地位に触れた報道をしています¹¹。ヨーロッパの王室の婚礼の報道では、ジェンダーはさほど話題になりません。2018年のメーガン・マークルの英国王室入り、そして2019年の男児誕生の際に話題となったのは、英国社会の人種事情でした¹²。

⁷ カリスマ性を備えた現代のプリンセスは、美智子妃だけではない。「人民のプリンセス」として知られるダイアナ妃の突然の死には、英国のみならず世界中の人々が悲しみにくれた。哀悼のグローバルな広がりを分析した研究者は、「人民のプリンセス」という呼称がもたらした文化的・政治的な影響について疑義を唱えた。Mandy Merck, ed., *After Diana: Irreverent Elegies* (London: Verso, 1998).

⁸ Table 3., “Marriage Configurations in Postwar Japan” and discussion in Barbara Hamill Sato, *The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Women in Interwar Japan* (Durham, N.C.: Duke University Press, 2003), p. 161. 参照。

⁹ “Japanese Women: New Freedoms Amid Old Customs.” *Time* (23 March 1959): 24-36.

¹⁰ “Crown & Commonwealth: Canada’s Queen on Tour.” *Time* (29 June 1959): 15-19.

¹¹ 1993年の徳仁皇太子ご成婚報道については、Jan Bardsley, “Japanese Feminism, Nationalism and The Royal Wedding of 1993.” *Journal of Popular Culture*, Vol. 31 (1998): 189-205 and Amanda C. Seaman, “Modeling Masako: Commodities and the Construction of a Modern Princess,” *Chicago Anthropology Exchange*, no. 21 (Spring 1995): 35-72. 参照。

¹² 2019年5月6日の、メーガン・マークルの男児出産後、メディアの関心は、男児の「バイ・レイシャル・ヘリテイジ」と肌の

もうひとりの民間のプリンセス:「殉国乙女」樺美智子

ここで少し視点を変えて、日本のメディア、特に雑誌『週刊朝日』が、この時期、どのように別の民主主義のプリンセス、もうひとりの美智子像を創り上げたかを見てみましょう。

社会学者ヒロコ・ヒラカワは、『週刊朝日』は、60 年安保闘争で死亡した東大生、樺美智子を「殉国乙女」に仕立て上げたと述べています¹³。樺は全学連の幹部であったにもかかわらず、『週刊朝日』は、彼女は国のために犠牲となった純真で政治には無関心の若い女性であると描き、だからこそ、日本国民は、政府による破壊を食い止め、民主主義への希望を再生しなければならないと結論付けています。平民プリンセス美智子も樺美智子も、異なる考えを持つ人々を協調的な「国民」としてひとつにまとめるシンボルとしての、性的および政治的純潔性を備えたカリスマ乙女になったのです。ヒラカワはまた、『週刊朝日』は、女性の使命は出産・育児であると位置付けたうえで、樺がそれに伴う母性の喜びを享受する機会を失ったと論じている、と指摘しています。

ヒラカワは、1990 年に、フェミニストの女性たちが 60 年安保をどのように回顧するかを調査し、1960 年に 15 歳以上であった女性たち 450 人に、最も強く記憶に残っていることは何かと質問しました。美智子という名前の二人の女性、という簡潔な回答が大多数でした。この調査は、回答した女性たちが、この二人の女性についてどう理解しているかや、どのように二人の違いをみているかは明らかにしていません。いずれの美智子の報道においても、乙女の純潔性や政治的な汚さとは無縁であること、皆の利益のために「国民」が団結することを促す存在であること、が強調されました。そして、二人のセクシュアリティについては、結婚や、母になるという最終目標が示唆していました。

プリンセス主婦・ファッションアイコン

プリンセス美智子は母になりました。母親という地位を得ることで物語は新たな展開をみせ、愛による結婚に続き、1960 年代高度経済成長期の戦後家族のモデルとしての立場が確立されました。

先ごろ天皇に即位した徳仁親王の誕生は 1960 年 2 月。皇室の伝統によらず、母乳育児をしたり、自らの手で息子を育てることを選んだというのは、よく知られた話です。公務で旅行に出る前に書いた、親王の世話係への申し送りのメモは、後日取りまとめられ、『ナルちゃん憲法』のタイトルで出版されました。ベン・ヒルズは、日本の人々は、「皇室が初めて自分たちと同じ育児の問題に悩んでいることに好奇心をそられた」のではないかと述べています¹⁴。

お茶の水女子大学の社会学者、坂本佳鶴恵は、近刊の女性雑誌の研究書で、1960 年代の美智子妃と皇太子一家についての大量の記事を分析しています¹⁵。その分析から、美智子妃が母親になって記事の焦点が推移したことが明らかになりました。1959 年には、美智子さんの知性や皇室に相応しいかどうかが話題でしたが、『主婦の友』などの雑誌は、母親としてのスキルの高さを称賛するようになります。写真に写されるのは、一家の中心にいる母としての姿です。ひとりだけで撮影されることはめったになくなりました。

皇太子一家についての記述では、責任のジェンダー分業が強調されます。明仁皇太子は公務に励

色に移行した。

¹³ Hiroko Hirakawa, "Maiden Martyr for 'New Japan': The 1960 Ampo and the Rhetoric of the Other Michiko." *U.S.-Japan Women's Journal*, 51 (2017): 12-27.

¹⁴ Ben Hills, *Princess Masako: Prisoner of the Chrysanthemum Throne* (New York: Jeremy P. Tarcher/Penguin, 2006).

¹⁵ 坂本佳鶴恵『女性雑誌とファッションの歴史社会学:ビジュアル・ファッション誌の成立』(新曜社、2019 年)。戦後雑誌における美智子妃表象については第 5 章参照。

み、子育ては安心して妻に任せています。美智子妃についての話題は、子育てや家事といった家庭内の仕事一辺倒です。仕事に集中する夫と子育てに専念する「専業主婦」の妻という皇太子夫妻の姿は、高度経済成長期の「マイホーム」イデオロギーの象徴です。美智子妃の家庭生活の様子を伺うと、プリンセスはまるで一般家庭の主婦のようです。一般家庭の主婦にとっては、それが自分の魅力を高め、主婦の立場は重要なのだと思わせてくれます。一般家庭の主婦もプリンセスも、家庭では同じ責任を担っているのです。

家族のために料理をすることを楽しみ、ほかの家庭と同じような普通の子育てをする美智子妃についての報道は、皇太子一家を、完璧な中流家庭であるかのようにみせています。坂本は、この時期、美智子妃と皇室の間の不和についての報道がまったくなかったことを指摘しています。実際には、いじめのような経験をしたことが明らかになっています。また、子育て以外の事柄についての報道は、まったくみられないのです。

坂本は、美智子妃のファッションセンスに注目が集まったことについても述べています。その様子は、以前の皇室女性の報道とは少し趣が異なります。写真に添えられた文章が、着用しているものについて詳細に説明し、ファッショナブルな服装をすることも、プリンセスになるということなのだと示しているのです。美智子妃に関する近刊書籍のいくつかは、美智子妃のワードローブについて、ノスタルジックに振り返っています¹⁶。ロールモデルとしての美智子妃は、「エレガントな主婦」のイメージも提供しました。

1964 年頃に撮影された写真のなかに、公的な場に出る装いの美智子妃が、幼い徳仁親王の手を引いている写真があります。この姿は誰かに似ているのですが、誰でしょうか？

この美智子妃と徳仁親王と一緒に写っている写真をアメリカで見せると、「ジャッキー・ケネディみたい」という反応が返ってきます¹⁷。もしかすると、そういうイメージを描き出すことが、撮影者の狙いだったのかもしれない。正確な日付はわかりませんが、1964 年頃の撮影だと思われます。ケネディ大統領暗殺から間もなくの時期ですね。ジャッキー・ケネディのスタイルに似た服装で幼い息子の手を取る美智子妃の姿は、世界中から称賛と好意が寄せられた、大統領暗殺後のジャッキーと息子の姿に重なります。ある意味、この写真の優雅な装いのプリンセスは、60 年代の高度経済成長により裕福になり、アメリカと肩を並べるまでになった日本を表象しているのです。

天皇と皇后としての公的役割

平成の時代には、天皇皇后がパートナーとして共に行動する様子を捕えた写真が数多く撮影されています。自然災害の被害者を気遣う様子を写した写真には、文字どおり、二人が国民に寄り添う姿があります。例えば、2011 年 3 月の東日本大震災の報道写真では、二人は、避難所の床に膝をついて、被災者と同じ目線の高さで言葉を交わしています。

私の「プリンセス」についての研究は 50 年代の事象に焦点を当てていますので、近年のことについてはあまり目を向けていませんでした。しかし、この春目にしたニュース映像で強く印象に残ったのは、二人

¹⁶ 美智子妃のファッションを称賛する書籍については、双葉社編『美智子さまご洋装の輝き』(2017 年)、別冊宝島『美智子さまの 60 年 皇室スタイル全史 素敵な装い完全版』(2018 年) 参照。

¹⁷ Stella Bruzzi はジャッキー・ケネディの装いの象徴性について分析し、特にジョン・F・ケネディ暗殺当日に着用していたスーツについて、「トラウマと喪失の記憶をノスタルジックに思い起こさせる」と解説している。“The Pink Suit,” Chapter 17 in Stella Bruzzi and Pamela Church Gibson, eds., *Fashion Cultures Revisited: Theories, Explorations and Analysis* (New York: Routledge, 2013). 参照。

が近く寄り添って歩く様子です。あたかも、絆を確かめ合っているかのようです。

美智子皇后はまた、戦時中に日本が行った侵略行為への償いをしようとする夫を無言で支えるパートナーでもあるようです。2018年の沖縄訪問の写真からは、その様子が見て取れます¹⁸。

退位と皇室の将来

退位への準備が進む中、二人の長きにわたる結婚を祝う動きもみられました。書店の店頭には、天皇皇后の、または、美智子皇后の写真を表紙に使用した書籍が並べられていました。週刊誌の皇室ゴシップ特集の中吊り広告も、電車内で目にしました。特に若い世代の皇室メンバーのゴシップが多かったようで、美智子皇后はどちらの側か、といった推測記事もありました。しかし、美智子皇后と明仁天皇には、何事にも動じることのない落ち着きと、どこまでも人に寄り添う雰囲気があります。

日本の皇室の将来はどうなるのでしょうか？

5月1日の新天皇即位は、再びジェンダー不平等の問題に注目が集まる機会になりました。皇居で行われる重要儀式には、成人男性皇族のみが参加を許されています¹⁹。そして、女性の皇位継承権についての検討は保留されたままです。こうした女性に対する制約については、国内外のメディアが報じています。皇室内のジェンダー不平等から連想されるのは、日本の2018年ジェンダー・ギャップ指数の順位の低さです。社会学者山口一男は、「149か国中110位というひどい結果」であったと評しています²⁰。先進諸国の中で最低順位であることは毎年のことですから、日本のプリンセスや皇室が話題になるとき、世界の目が日本の「ジェンダー不平等の問題」に向けられるのは必然的です。未だに、『Time』誌が記事にした1960年の様子と同じです。

皇室の将来像について、皇室内のジェンダー平等を実現させるというのは有効でしょうか。君主制というのは、突き詰めていうと、過去の遺物、別の時代の遺品です。不平等や人種の特権性、強制的異性愛の具現です。そして、ひとつのロマンチックな物語だけでそれを変えるというのは不可能です²¹。

とはいえ、プリンセスの物語は私たちを魅了し続けるでしょう。主人公はいつも女性であり、個人の力で変化を起こせると思わせてくれます。プリンセスの物語で最後に勝つのは、善良な女性です。ここに、明仁皇太子と美智子さんの物語への、ノスタルジアの盛り上がりの起因があるのではないかと思います。

¹⁸ “Emperor, empress visit Okinawa to commemorate war victims.” Kyodo News. 27 March 2018. Accessed 27 May 2019. <https://english.kyodonews.net/news/2018/03/77f2f79f748d-emperor-empress-visit-okinawa-to-commemorate-war-victims.html>

¹⁹ “Female Imperial family members to be barred from key succession rite in line with Japanese law.” *The Japan Times*. 17 January 2019. Accessed 30 May 2019. <https://www.japantimes.co.jp/news/2019/01/17/national/female-imperial-family-members-barred-key-succession-rite-line-japanese-law/#.XO8liogzYuU>

²⁰ 山口は、女性の大多数が「非正規雇用」で働く構造が巧妙に作られていることが、「男女間の大きな賃金格差」をもたらす根本原因であると指摘している。Kazuo Yamaguchi, “Japan’s Gender Gap.” *Finance & Development* Vol. 56, No. 1 (March 2019). Accessed 27 May 2019. <https://www.imf.org/external/pubs/ft/fandd/2019/03/gender-equality-in-japan-yamaguchi.htm>

世界経済フォーラム「ジェンダー・ギャップ・レポート2018」 Accessed 20 April 2019. <https://www.weforum.org/reports/the-global-gender-gap-report-2018>

²¹ Takashi Fujitani は、「ヴィクトリア女王の統治下で、帝国の拡大と女性の選挙権の否認の矛盾が問題視されなかった」と「家庭第一主義信奉」の興隆があったことを指摘し、女性の皇位継承権を認めることが必ずしも社会における女性の機会の向上を保証するわけではないと論じている。“Imperial Succession Panic: The Politics of Gender, Blood and Race in Contemporary Japan” in Amy McCreedy Thernstrom, ed., *Japanese Women: Lineage and Legacies* (Washington, D.C.: Woodrow Wilson International Center for Scholars, 2005), p. 32.

テニスコートの恋へのノスタルジア

プリンセス美智子のテニスコートの恋の物語へのノスタルジアが示すのは、1959 年の「愛による結婚」という夢です。二人は人々に、物事は「変えられる」、そして、ロマンスと結婚は両立する、という希望をあたえました。プリンセスは変化を起こすことができるのです。将来のシンボルとなるものは何で、どのような精神的絆が変化の原動力となるのでしょうか。

美智子さんはプリンセスに生まれた訳ではありません、でもプリンセスになりました。1960 年代に美智子妃がエレガントな「プリンセス主婦」に変容する姿を伝えたメディアは、美智子妃と、彼女をロールモデルと仰いだ主婦たちにそのような歩みをとらせたのは何か、ということは考えません。メディアは、美智子妃の、妻そして母としてのスキルの高さを、それが家庭や日本の民主主義を強化する上での女性の使命であるとして称賛したのです。これに対して、シモーヌ・ド・ボーヴォワールらフェミニストの哲学者は、ジェンダー規範の社会的構築に批判的な視線を向け、「女になること」について問いかけました。それでは、日本の女性たちがそのボーヴォワールの言葉をどのように受け止めたのかについての、ジュリア・ブロック先生の研究報告をお聴きください。

謝辞: シンポジウム運営を担当して下さった吉原公美 IGS 特任リサーチフェローに、知的刺激に満ちた発表をして下さった、ジュリア・ブロック先生、北村文先生、ゲイ・ローリー先生、そして円滑に議論を進めて下さった司会者の大橋史恵先生に、感謝申し上げます。



基調講演

日本におけるボーヴォワール 『第二の性』の反響をたどる

ジュリア・C・ブロック

エモリー大学

.....
エモリー大学准教授(日本学)、ロシア・東アジア言語文化学部長。代表的著作に、文学作品のフェミニスト表象に関する『The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973』(ハワイ大学出版、2010年)、戦後の男女共学化批判を分析する『Coeds Ruining the Nation: Women, Education, and Social Change in Postwar Japanese Media』(ミシガン大学出版、2019年)、領域横断的な日本のフェミニズムについての共編著『Rethinking Japanese Feminisms』(ハワイ大学出版、2017年、Ayako KanoとJames Welkerとの共編)がある。

【要旨】シモーヌ・ド・ボーヴォワールの不朽のフェミニスト哲学書『第二の性』が日本語に翻訳されたのは、フランスでの初版出版のわずか4年後である。この翻訳書刊行のタイミングは、日本が、連合軍による占領という影から抜け出そうとしながら、敗戦直後の改革の影響と格闘する時期に重なった。戦後の改革は、日本の女性たちに、これまで享受したことのないさまざまな権利と機会を提供した。しかしそうした権利を行使しようとする、女性たちの志が、妻そして母親としての「キャリア」に向くことを期待する保守的な規範と衝突することになった。慣例に従わない生き方を求めた女性たちの中には、ボーヴォワールが示した、経済的自立と職業的な投企による「自由」というビジョンを——実現が難しくとも、あるいは難しかったがゆえに——戦前の「良妻賢母」的な女らしさモデルに代わる魅力的な選択肢だと受け止めた者がいた。本報告では、1950～60年代の日本の女性たちが、ボーヴォワールの理論の価値を自分たちの生き方や仕事に照らしてどのように理解したか、オマージュやパロディを含む、さまざまな反響と批評について探る。

イントロダクション

今日は、フランスのフェミニスト哲学者、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの著作の、日本における翻訳と受容についてお話しします。ボーヴォワールをご存知の方もおいでと思いますが、最初に彼女の思想について簡単にご紹介させていただきます。

話は1966年の9月18日に遡ります。60人以上の報道写真家が、台風による悪天候のなか、二人のフランス人「セレブ」、哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールとジャン＝ポール・サルトルの到着という歴史的瞬間をとらえようと、羽田空港に集まりました。二人は、ビートルズのようなロックスターの来日時に匹敵する群衆に出迎えられました。

ボーヴォワールは、彼女の名前を呼びながら、握手をしようと手を伸ばしたり、腕に触れようとしたり、大スターの哲学者と彼女の名高いパートナーをとにかく一目見ようと集まった、若い女性の群れにもみくちゃにされます¹。サルトルのパートナーというだけの紹介をされることも少なくないボーヴォワールは、彼女自

¹ 朝吹登水子『サルトル、ボーヴォワールとの28日間：日本』(同朋舎出版、1995年)27-31頁。

身の日本での人気がこれほどであるとも、また、この来日時期が、「ウーマンリブ」として知られることになる「第二派」フェミニズムの爆発的興隆前夜であるとも、気づいてはいなかったでしょう。

ボーヴォワールの名前は既に世界中で知られていましたが、日本での人気については、少し説明を加える必要があります。1960年代の日本社会は、いくぶん保守化していました。女性たちは、両親や教師たちから、そしてもちろん日本政府からも、ある種の「良妻賢母」になるようにとの教えを受けていました。「良妻賢母」は20世紀初期の日本における女性らしさのモデルで、夫や父に従い、家族に尽くし、家庭という領域に留まることが強調されていました。ボーヴォワールも彼女の哲学も、この価値観とは対極にあります。ボーヴォワールは、結婚も母になることも拒み、女性たちには、男性から経済的に自立することを推奨していました。思えば、彼女の来日が許されたことすら不思議です。

しかし、このような明らかな世相との違いがあったにもかかわらず、ボーヴォワールは当時の女性から驚異的な人気を集めていました。この理由についてはまた後でお話することにして、先に、ボーヴォワール自身について簡単に紹介し、1966年にボーヴォワールを迎えた日本の歴史的背景を解説します。続いて、日本の女性たちはボーヴォワールの考えの何が役に立ち、何が役に立たないと思ったかを説明し、ボーヴォワールの書籍の翻訳について検討します。結びとして、ボーヴォワールの哲学が日本の女性たちと日本のフェミニズム運動にとって不朽の遺産であることについて、私の考えを述べさせていただきます。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールとは誰か？

ボーヴォワールは、1908年、パリに住むカトリックのフランス人家庭に生まれました。父親は法律事務所で働いていました。母親は、当時のフランスの中流階級のカトリック信者の女性たちがそうであったように、主婦でした。母親は敬虔な信者であり、シモーヌも妹のヘレンも母親のようになることが期待されていました。中流家庭の主婦として、家にいて、子どもを産んで育て、その子どもの父親である夫は外で働き家族を支えるというように。しかし、第一次世界大戦の時代に一家は財産を失い、当時の習慣であった花嫁の持参金の用意ができなくなったことからそれをあきらめ、娘たちを働きに出さざるを得なくなりました。つまり、信じられないような話ですが、歴史的に偉大なフェミニスト哲学者が教育を受けることができたのは、花嫁の持参金という家父長的制度があったゆえ、なのです。

ボーヴォワールは、当初は女子修道会で教育を受けていましたが、フランスの名門大学であるソルボンヌに進学しました。ソルボンヌでは、哲学を学び、教師になるために勉強しました。彼女は、男子学生と一緒に大学で学んだ女子学生の第一世代です。それ以前は、彼女のような女性たちは、独学で学ぶか、家庭教師から教えを受けていました。

フランスのフェミニズムを研究するトリル・モイはこう書いています。

ボーヴォワールは1920年代から1930年代にかけて成人した知識人女性の世代に属している。…彼女たちが受けた教育と彼女たちの知識人としての経歴との関わりのなかで、少なくともこうした女性たちは、男女平等を原則とする社会で、男性たちと同等に扱われていると信じていた。総じて、彼女たちは、みずからの女性性の社会的意味には、どちらかといえば無頓着であった。…けれども彼女たちも中年に達する頃になると、経験の重圧から、その多くが、男性中心社会において女性であることの意味について考えずにはいられなくなる。もし私たちがボーヴォワールの回想録を信ずるとすれば、彼女は1946年になってようやく、教育のある女性でいることは、教育のある男性でいることと、まったく同じではないと気づくのである。この洞察の帰結を、彼女は稀有の道徳的・政治的一貫

性をもって追求する。そして自分が知識人女性であると認識したまさにその瞬間、書き始めたのである。そう『第二の性』を²。

ボーヴォワールの著書の中で最も良く知られているのは、長編の哲学書である『第二の性』でしょう。歴史、文学、神話、生物学、哲学、人類学を含め、様々な分野からの豊富な論拠に基づき、人間社会は、古代から女性を男性の「他者」扱いしていると論証しています。つまり、女性たちは、歴史的に、男性を基準に特徴づけられ、その基準を満たさない点は欠如とみなされました。これにより、女性は男性より劣ると定型化され、社会制度的に虐げられてきました。例えば、結婚は、女性から自己決定という自然権を奪い、生殖の道具として使うしくみであるというように。

ボーヴォワールの有名な言葉「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」は、この本の一節です。ボーヴォワールが言わんとしているのは、女性は生まれたときから女らしさのステレオタイプに従うように教えられ、それに従わないときは非難され罰を受けるということです。つまり、「女らしさ」とは先天的な性質ではなく、生涯を通じた訓練によって獲得されるものなのです。女性たちが自由を手にするためには、このステレオタイプは虚偽であり、自然ではなく作られたものだとして理解して、これから解放されなければならない。つまり、ボーヴォワールの議論は、現代における生物学的性別と、社会的に構築されたジェンダー規範の区別の基礎を作ったのです。

ボーヴォワールはまた、女性が本当に自由になるには、結婚などの制度によって生計を男性に依存するのではなく、経済的自立をしなくてはならないと述べています。ボーヴォワール自身は、結婚をしたことはありません。男性と女性の両方と性的関係をもったことが知られていますが、同性愛の側面については1960年代には公にはされていませんでした。さらに重要な点は、ボーヴォワールは、作家や教師としてのキャリアを持ち、その後、現在それと認知されている、フェミニスト活動家、理論家となりました。

日本の女性にはボーヴォワールに何を見出したのか？

日本の女性たちは、ボーヴォワールに何を見出したのでしょうか？ この問いに答えるために、少し時間をさかのぼります。1945年、第二次世界大戦が終わり、日本は連合軍の占領下に入りました。アメリカ合衆国主導の占領体制は、文字通り、日本社会の法的枠組みを書き換えました。1946年の新憲法の制定と、それに基づく民法の改正により、日本の女性たちは、これまでにない様々な法的権利を手に入れました。選挙権や被選挙権、配偶者を選ぶ権利、男性と同じ教育を受ける権利などです。

とはいえ、女性たちがそうした権利を行使しようとすると、女性たちの「居場所」はここだと決めつける、あくまでも保守的な社会文化的規範と衝突することになりました。つまり、戦後の女性たちはまだ、女性は家父長に服従すべきという、戦前の家制度の古い考え方と闘わなければならなかったのです。家制度は戦後の占領期の憲法改正により法的強制力を失っていましたが、ジェンダー役割についての文化的な習慣や態度という形で継承されていました³。

このような姿勢は、戦後の経済状態の変化に伴い強化されていきました。戦争による荒廃から復興し、

² トリル・モイ著・大橋洋一ほか訳『ボーヴォワール：女性知識人の誕生』（平凡社、2003年）、13～14頁。

³ 戦後の女性の社会的地位に関する様々な法改正についての簡潔な説明と、根強く残る男女「平等」の法と事実の食い違いについては、Kiyoko Kinjo, “Legal Challenges to the Status Quo,” in Kumiko Fujimura-Fanselow and Atsuko Kameda, *Japanese Women: New Feminist Perspectives on the Past, Present, and Future* (New York: The Feminist Press, 1995), 353-363 頁参照。

1960年代には加速的な経済成長が進みましたが、その経済的繁栄は、性別に基づく労働分担にますます依存するようになりました。社会全体で女性を家庭の領域に縛り付けておけば、男性は経済成長の動力となることに専念できるという訳です。1950年代から60年代の日本の女性たちは、戦後の改革で約束されたはずの平等な権利と、現実社会の不平等をどう整合させるか格闘していました。その格闘のクライマックスが、1970年代の女性解放運動です⁴。

この闘いは、戦後導入された共学制の教育で育った第一世代の若い女性たちにとって、特に重要でした。1945年以前の制度では、小学校の1～2年生より上の教育は男女別学でした。男子は大学から就職へと進む教育を受けることができましたが、女子は「良妻賢母」になる「キャリア」のために女子校へ行ったのです。戦後の改革のおかげで、1940年代後半以降の学校教育を受けている女子生徒は、男子生徒と肩を並べて名門大学を目指すことができるようになりました。お気づきのように、ボーヴォワールも娘時代に同じような状況を経験しています。戦後保障された男女平等を存分に活用しようと格闘していた日本の女子学生たちは、ボーヴォワールの、女性解放と経済的自立の必要性の議論だけでなく、教育の平等を真っ先に体験した女性である点にも、結びつきを見出していたのです。

『第二の性』がフランスで発表されたのは1949年でした。そのわずか4年後に日本語翻訳が出版されています。このタイミングが、日本の読者、特に女性たちから熱狂的に受け入れられた要因でした。1953年は、連合軍による占領が終結した翌年です。日本は自治を取り戻しました。その2年後の1955年、保守政党の連合により自由民主党が誕生しました。保守系の政治家は、直ちに、占領期の改革を逆戻りさせようと動き始めます。その政策には、伝統的な女らしさの規範とされた女性の役割、「良妻賢母」の奨励が含まれていました。ボーヴォワールの女性解放の議論に刺激され、女性たちは、このような保守回帰に抵抗しました。

1961年には、ボーヴォワールの回想録の第1巻の日本語翻訳『娘時代』が出版されました。誕生から20代前半までの物語です。「男の知性を持つ」（と父親からもよく言われた）彼女にとって、社会から女の子らしくふるまうことを求められるのは辛かった、ということなどを詳しく語っています。若き日の友人関係や恋愛、終生の伴侶となったジャン＝ポール・サルトルとの運命的な出会い（終始恋愛関係であった訳ではありませんが）。哲学の勉強、神への信仰を失い無神論者になったこと、作家そして学者としての人生の目的の模索。宗教に関する話はさておき、古臭い「良妻賢母」思想とは関連のない人生を歩みたいと思いながらも、その志が歓迎されない社会で成人を迎えようとしている女性たちにとって、ボーヴォワールの物語は、深く共感できるものでした。ボーヴォワールの回想録、とりわけこの第1巻は、名高い『第二の性』以上の影響力があったと考えられます。この本で語られた課題は、日本の若い女性たちが大人になる道のりにおいても重要なものであったからです。

よく知られているボーヴォワールの人物像のうち、フェミニストの象徴としての人気獲得に大きく貢献したのは、サルトルとの関係のあり方でした。日本のメディアは、二人の関係を、完全な平等と自由、互いへの尊敬に基づく理想的な結合であると描写しました。当時の若い女性たちが特にあこがれた二人の関係を、上村くには「サルトル＝ボーヴォワールというカップル神話」と呼んで、以下のように要約しています。

⁴ 戦後の高度経済成長期の女らしさモデルを構築した歴史的、社会的、文化的動向の詳細については、Chapter 1 of Julia C. Bullock, *The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973* (Honolulu, HI: University of Hawai'i Press, 2010)参照。

サルトルとボーヴォワールの関係といえば、60年代の私たちには憧れの的であった。風説によると、この高名な二人の恋人は、同じホテルに住みながら別々の部屋に住み、カフェで仕事をし、レストランで食事をしながら、これから出版する原稿をサルトルと批評しあうという。ボーヴォワールは家事労働からいっさい解放されて、知的な仕事と恋愛を両立させているらしい。それは60年前半に娘時代をすごしていたすべての日本女性にとって理想の関係のように見えたのである⁵。

サルトルとボーヴォワールは、明らかに、そのような見方が助長されることに協力的でした。1966年の『朝日新聞』によるインタビューでは、いつも一緒に「私たち」というロマンチックな雰囲気を見せて、互いの話のすべてに同意しながら、机を並べて仕事をしたり、家事や雑用を分担していると語っています⁶。この、ふたりの「ユニオン」を結婚になぞらえた空想的な説明は、ほかで聞かれる、実際にはふたり一緒に暮らしたことはないとか、サルトルがボーヴォワールを訪ねるときにはいつもボーヴォワールが料理をするとか、もう互いを相手にしてのセックスはしなくなっている（ふたりはそれぞれに複数の人たちと関係を持っていました）、といった話とはだいぶ異なっています⁷。ボーヴォワールは回想録で、自身の異性関係について（サルトルの異性関係についても）率直に語っているため、ボーヴォワールとサルトルの関係がオープンであることは良く知られていて、それもまた、日本の女性たちを魅了していた点のひとつでした。両親、教師、1960年代のマスメディアから、ロマンチックラブを追い求めることは奨励されつつも、その向かう先にあるのは結婚と母親になることだと諭され、日本の女性たちは、制約の多い結婚の慣習の外で堂々と愛とセックスを追求するという考えを、解放と受け止めました⁸。

ボーヴォワールに影響されて制作された当時の文芸作品の例として、倉橋由美子の作品に目を向けてみましょう。倉橋は特に、ボーヴォワールによる結婚と母性の否定と、女性たちの経済的な自立についての議論に触発されました。多くの小説やエッセイ、短編小説にそれがはっきりと表れています。

初期のエッセイ「私の第三の性」は、明らかに、女性の「他者性」と自立の必要性についてのボーヴォワールの議論をもとにしています。倉橋は、ボーヴォワールの議論を活用して、女性の芸術的表現による女性解放を目指し、自らの表現形式を創り上げました。議論を巻き起こした初著『暗い旅』は、サルトルとボーヴォワールのオープンな関係へのオマージュ（またはパロディ）であると言えます。この物語では、主人公と彼女の恋人は、とがめられることなく不特定多数の相手と性的関係を結びます。条件は、そのすべてについて互いに打ち明けること。サルトルとボーヴォワールが互いに宛てた手紙でそうしたように。

加えて、倉橋の短編作品の多くは、結婚を性的関係も愛もない不合理な制度であると皮肉っています。女性主人公たちは、夫たちの性的な誘いには「なんのため？」と食ってかかったり、性的サービスは契約のうちではないと釘をさしたりします。実際、初期作品のほとんどでは、結婚は、妻は夫に「飼われる」けれども主婦としての典型的な「義務」からは免除されるという契約により成立しています。ある作品の主人公は、彼女が交わした契約では、料理も、掃除も、寝食をともにすることも、夫の子を産むことも義務付けられてはおらず、単に夫に「仕える」ことだけが求められているに過ぎないと主張します。作品中では、「仕える」に何が含まれているかは具体的には明らかにされていませんが、「大した仕事」であることは断言され

⁵ 上村くにこ「ボーヴォワールの恋愛人生：『行儀の悪い娘』から『理想の妻』へ」、『女性学研究』14号、2007年3月、27頁

⁶ 朝日新聞によるインタビューは、朝吹『サルトル、ボーヴォワールとの28日間』の88-92頁に再録されている。

⁷ 例として Hazel Rowley, *Tete-a-tete: Simone de Beauvoir and Jean-Paul Sartre* (NY: HarperCollins Publishers, 2005) 参照。

⁸ ロマンチックラブ・イデオロギーと「純潔教育」（婚前禁欲の奨励）については Sonia Ryang, *Love in Modern Japan: Its Estrangement from Self, Sex, and Society* (London/NY: Routledge, 2006) 参照。

ています⁹。

面白いパロディの場面もある一方で、ほとんどの物語は陰鬱な皮肉で結ばれます。例えば、『結婚』（1965 年）では、慣習的な結婚生活の苦役から主人公の L を守るはずの契約は、1960 年代の中流家庭で一般的になった性別による役割分業に則して書き換えられてしまいます。L は妊娠し、家庭に縛られ、凝った料理を作ることに専念していますが、外で働く夫はほとんど家におらず、その料理を口にすることはありません。結婚制度を内から破壊することで始められた物語は、「普通の状態」に戻るといふ筋書き上、最も不幸な結末で終わります。この新しい役割配置に伴うむなしさと退屈さにより、L は精神的に追い詰められます。L には内なる男性人格 K があり、それを家庭内での役割を果たすために抑え込んでいましたが、ついには K に自分を殺してくれと懇願するに至ります。L の物語のように、従来型の結婚構造を転覆させることに失敗して物語が終わるパターンは、倉橋の初期の作品に共通する、ふたつの基本的なテーマを浮き彫りにします。相当数の日本人女性による、極めて平凡な生活のなかのささやかな反抗と、中流階級的結婚イデオロギーによる圧力への抵抗の難しさという嘆きです。

朝吹登水子も、ボーヴォワールとの出会いにより私生活と職業生活が劇的に変化した作家のひとりです。

朝吹は 1917 年東京生まれ¹⁰。三井財閥に連なる裕福な家庭の 5 人兄妹の末っ子でひとり娘でした。父・常吉は、スタイリッシュで社交的で、世界を股にかけて活躍する人物でした。若い頃にイギリスで教育を受け、ヨーロッパ風の洗練された生活様式の家庭を築いていました。子どもたちが英語に堪能になるよう、幼いころから英国人女性家庭教師をつけていました。ですから、朝吹が（兄たちと共に）成人後の相当の年月を、海外で勉強したり旅行をしたりして過ごしたのも当然です。15 歳の時に体を壊して女子学習院を中退した後、ごく短期間、同じ社会階層の若者と結婚していました。18 歳で離婚し、パリ郊外の女学校に入学します。フランス語を習得してからソルボンヌ大学に進学し、1939 年にヨーロッパ大陸での戦争勃発を見越して兄と共に日本に呼び戻されるまで、そこで学びました。

朝吹がフランスにもどって、服飾の学校に入学したのは 1950 年のことでした。その間、東京は、戦争による荒廃と戦後の食料・物資の不足に見舞われ、朝吹家の資産も打撃を受けました。朝吹は、生活のために、様々な仕事を引き受けました。ファッションレポーター、翻訳、通訳、コンサルタント。そして、日本企業や政府機関の求めに応じ、パリにおける有能な「仲介人」の役も果たしました。その例として、日本政府の代理を務めて、カンヌ映画祭で日本の映画をプロモーションする姿が写真に残されています。日本とフランスの連絡役を務めるなかで築いた華やかな人的ネットワークをつてに、パリの高級ファッション、美術、文学の世界に足を踏み入れました。このような道のりを経て、ボーヴォワールとサルトルを中心とする知識人「ファミリー」と直接の交流をするようになり、すぐにこのカップルと親しくなって、ついには、1966 年の来日の際の通訳とツアーガイドを務めることになったのです。

朝吹は、ボーヴォワールの回想録の翻訳もしています。その第 1 巻は 1961 年に刊行され、日本の若い女性たちに大きな影響を与えました。朝吹も、ボーヴォワール同様、娘たちを家に留め置き外界からの悪影響から守ろうとする上流階級の家に生まれました。そしてまた、ボーヴォワール同様、数ある進歩的理念のなかでも特に、女性解放を支持する作家そして著名人としての自立したアイデンティティを確立することで、自らが所属する階級社会の慣習に逆らう道を進みました。10 年弱の年の差があれども、ふたりは同じ様に、第二次世界大戦という環境下の社会的・政治的混乱を生き抜き、家の財産が失われた後は、自ら

⁹ 倉橋由美子「共棲」、『倉橋由美子全作品集 6』（新潮社、1976 年）、93 頁

¹⁰ 朝吹の生い立ちについては、自伝『私の東京物語：蘇る日々 わが家のアルバムから』（文化出版局、1998 年）

の手で人生を切り開くことを余儀なくされたのでした¹¹。経済的自立と思考的独立が、所属する社会における「常識」に対する疑問を抱かせ、他の女性たちと、それも異なる階級、国籍、人種の女性たちと、共有できる目標を見出させました。ですから、朝吹がボーヴォワールの回想録を日本語に翻訳したいと切実に思ったのも納得できます。また、二人が出会ってすぐに親しくなったのも自然なことでした。朝吹は、ボーヴォワール(とサルトル)が後押ししてくれたからこそ、最初の自伝的小説『愛のむこう側』(1983 年)を書き始めることができた、とも述べています。この小説に続く作品は、脚色を控えた回想録のシリーズです。その他にも、旅行記や、文化批評も執筆しています。これらの執筆活動により、彼女は、日本におけるフランス文化の権威そしてトレンドリーダーの地位を確立させました。

ボーヴォワール批判

上村や倉橋、朝吹らの著述家たちが、ボーヴォワールが説く伝統的家族制度からの女性の解放の議論の真価を認めた一方で、相当数の人びとは、既存の女らしさ規範を完全に否認することに困難を感じていました。結婚は拘束だと感じてはいても、多くの女性にとって、母性は女性アイデンティティの中心にありました。そして、結婚せずに子どもを持つという考えは、社会的に容認されていませんでした。また、多くの女性にとって受け入れがたかったのは、ボーヴォワールの意見は「男性本位」な価値観によると感じられた点でした。つまり、ボーヴォワールは「男性のような」姿勢や生き方を好み、女らしくあることを中傷していると思ったのでした。1960 年代後半になると、日本の「ウーマンリブ」運動は、女性が子どもを持ちたいと思える社会を求める方向性になってきていました。これに合致する形で、日本のフェミニズムにとってのボーヴォワールの価値については、懐疑的になってきていました。

高井邦子の 1969 年の論文は、ボーヴォワールに背を向ける議論の典型的な例です¹²。『第二の性』についての論評で、高井はボーヴォワールの思想の特徴を次のように分析しています。

[ボーヴォワールにとって]肉体的条件は動かしえない宿命ではなく、単に一つの状況であり、人間は自由に選択しながら自己を作り上げてゆく存在なのである。実存的存在論によると、何ものも人間を凌駕することは、不可能なのである。自然さえも人間の脚下にある¹³。

このような解釈から導き出されるのは、母性や他の女性性の経験を拒絶したところで生物学的な限界を超越することはできないのだから、自由な選択があるという考え方は「自己欺瞞」だということです。高井はまた、ボーヴォワールは「生命を維持すること(出産)は価値があるどころか、それは屈辱であり、人間を動物性に服従させることなのである」といっていると述べています。これを根拠に、ボーヴォワールは母性を「拒絶」し、母親になることは内在や他者として閉じ込められることだと論じていると、結論付けています¹⁴。残念なことに、このような、ボーヴォワールを「男性本位的」とする見方は、それが誤った解釈であると示す研究結果が日本のフェミニスト研究者により数多く発表されていたにもかかわらず、1990 年代半ばまで続

¹¹ ボーヴォワールの家の財産の減衰は、数世代の男性親族による資産管理の失敗の結果である。朝吹の家の財産は戦中までは保持されていたが、占領期の固定資産税制度の厳格化と個人資産の凍結により、生活のために財産を少しずつ切り売りしなければならなくなった。

¹² 高井邦子「ボーヴォワールにおける他者性の問題」『明治学院論叢』146 号(1969 年 2 月)127～156 頁。

¹³ 同書 133 頁。

¹⁴ 同書 134 頁。

いていました¹⁵。

ロスト(&ファウンド)・イン・トランスレーション

1986年のボーヴォワールの死は、世界的に、彼女のフェミニズムへの貢献についての再評価を促しました。日本では、その結果として、『第二の性』の最初の翻訳の問題の数々が明らかにされました。1953年に刊行された訳書の翻訳者は、フランス文学者の生島遼一でした。生島が章の構成を入れ替えてボーヴォワールの論理の展開を不明瞭にしまったことは、1980年代までには研究者間で知るところとなっていました。また、重要な用語の訳出の問題が、ボーヴォワールは女性を敵視しているという誤解の原因になっていることも指摘されていました。例えば、女性の身体構造や生物学的プロセスにあてた言葉に、はっきりと否定的な含みがあったのです。

誤訳の結果が、場所によっては、女性ステレオタイプを批判するというボーヴォワールの意図とは逆に、ステレオタイプを強化する文章になってしまっていたのです。例えば、ボーヴォワールは、家事という仕事は「女性が持つ女らしさの一部だと認識されている」、つまり、社会的にそれは女性がすべき事とされているのは、家事は「女性の仕事」だとする文化的仮定があるからだと説明しています。しかし、生島はこの箇所を、「女性であることからくる責任」と訳すことで、この種の仕事は、女らしさに関係する文化規範ではなく、生物学的に女性であることに関連があるのだと示唆しているのです。

女性研究者により結成された研究会が、1997年に『第二の性』の日本語訳「決定版」を完成させました¹⁶。この訳本は、原書の章構成を守り、女性の身体の生物学的プロセスについては、よりニュートラルな専門用語を用いています。また、哲学用語については、より明確で一貫性のある訳語を使用し、ボーヴォワールによる女性性や母性についての主張を明快にしました¹⁷。このボーヴォワールの再翻訳プロジェクトの動機となったのは、1980年代に女性学が学問分野として確立したことや、1990年代にクイア理論が紹介されたことなど、日本のフェミニスト理論の言説の変化でした。この「決定版」の刊行により、新しい世代の日本のフェミニストたちは、ボーヴォワールの思想を再発見しました。21世紀を生きる読者たちも、ボーヴォワールの洞察と自分たちとの関連性を見出したのです。

日本の読者のために『第二の性』を再生させる努力は実を結んだようです。より最近のボーヴォワール研究には「決定版」の影響と、翻訳者たちによる同書を広めようという努力の成果が反映されています。1989年執筆の『ポストモダン・フェミニズム』でボーヴォワールの哲学の「男性主体的」な部分について非難した金井淑子は¹⁸、後日その主張を撤回し、2002年の編著書では、『第二の性』を50冊の「フェミニズムの名著」の1冊に選んでいます¹⁹。

¹⁵ 例として、小説家三枝和子による雑誌連載「いかにして女性の哲学は可能か」第4講～第6講(『ユリイカ』1995年8月号～10月号に連載[『女の哲学ことはじめ』(青土社、1996年)所収])および、ボーヴォワールは、妊娠、出産、育児と結婚は女性を男性の「他者」とならしめた特質であると「否定」したと解説しているフェミニズムの教本、島田燐子著『日本のフェミニズム：源流としての晶子、らいてう、菊栄、かの子』(北樹出版、1996年)参照。

¹⁶ ボーヴォワールの原書を読み直す目的で結成された研究会の名称は『『第二の性』を原文で読み直す会』。第1巻の翻訳に参加したのはメンバーの内10名で、第2巻は11名。最終的に、本文記載の通り、『決定版 第二の性』が出版された。

¹⁷ 井上たか子、木村信子「訳者あとがき」『決定版 第二の性(1) 事実と神話』(新潮社、1997)374頁。加藤康子、中嶋公子「訳者あとがき」『決定版 第二の性(2) 体験』(新潮社、1997)647頁。

¹⁸ 金井淑子『ポストモダン・フェミニズム』(勁草書房、1989年)

¹⁹ 金井淑子「S・de・ボーヴォワール 『第二の性』」、江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著50』(平凡社、2002年)、60～69頁。

同様に、佐藤浩子は、2005 年に大学紀要で発表した論文で、ボーヴォワールの母性に対する考え方に触れ、母親としての役割と家の外での仕事とのバランスを取ることの難しさを理解していたと述べています²⁰。

ボーヴォワールは母親にならなかった。しかし、母親が置かれている状況とその困難さを理解し、それを切り抜ける方法を考えた人である。ボーヴォワールは、母にならなくても『女は女である』といい切った。この時点から、母になることは女にとって宿命ではなくなり、多様な生き方を人生のさまざまな段階で選ぶことが始まったのである²¹。

佐藤の論文の参考文献のリストには、『第二の性』を原文で読み直す会』のメンバーの筆による、現代のフェミニズムにおけるボーヴォワールの重要性を再評価する論文が、目立って多く含まれています。ここに、日本の読者にボーヴォワールの議論を記憶してもらおうという、「決定版」翻訳者たちによる努力の成果が表れています。

そう思う一方で、新たな大きな疑問がわきました。日本のフェミニズムによるボーヴォワールの思想の「再評価」を目指した活動家的情熱は、結果として、ボーヴォワールが想像も意図もしなかった独特の解釈を生み出してしまったのではないかと。というものです。

例えば、1997 年の訳書のあとがきで、井上たか子と木村信子は、生島の翻訳はところどころで、ボーヴォワールは女性というカテゴリーをひとまとめにして批判しているような、誤った印象を作り出していると指摘しています。この原因は、ボーヴォワールが、「現実の女性」を示す箇所と「永遠の女性的なもの」というようなステレオタイプを示す箇所の両方に、「女性性」という単語を使用していた点を、生島が訳し分けていなかったことにあります。「決定版」では、この二つを識別するため、女性ステレオタイプには「女らしさ」を、現実の女性には「女であること」をあてています。

しかし、翻訳者たち自身も指摘する通り、ボーヴォワールの原著自体も、その二つの概念を区別しきれてはいませんでした²²。2000 年を迎える頃には、生物学的な性別(セックス)と文化的に構築された性別(ジェンダー)という言葉の区別は一般的になりましたが、ボーヴォワールが彼女のフェミニストとしての論説の基礎となるものを書き上げた当時は、その違いはほとんど理解されておらず、用語の使い分けもされていませんでした。さらに、『第二の性』第 1 巻の序文などの記述からは、ボーヴォワールは、「ステレオタイプ」と「女であることの現実」の社会的融合を要点にしたいと考えているように見受けられます。実際、彼女は、女性性についての長い論考を書き始めるにあたり、あたかも、「女」というカテゴリーの不安定性そのものを指摘するかのように、真剣に、「女とは何か？」という疑問を投げかけています。ということは、翻訳者たちによる「女性性」という言葉の二つの意味を区別しようという試みは、おそらく良かれと思ってした反面で、場合によっては、ボーヴォワールの問いかけの意図するところに、逆らってしまっているのかもしれない。

さらに、翻訳者たちがその区別を翻訳上で示したことで、セックスとジェンダーの概念的な区分をボーヴォワールがどの程度しようとしていたかを、明確にするのではなく、むしろわかりにくくしてしまった可能

²⁰ 佐藤浩子「ボーヴォワール:『第二の性』と＜母性＞」『川村学園女子大学女性学年報』3 号、2005 年、43～50 頁。

²¹ 同書 44 頁。

²² 井上たか子、木村信子「訳者あとがき『決定版 第二の性(1) 事実と神話』(新潮社、1997) 372 頁

性もあります。『第二の性』が、後に異なる単語を使って区別されるようになる二つの概念の、理論的な土台をつくることに貢献したことは間違いありません。翻訳者たちは、この功績を強調して、「(ボーヴォワールが論じる) 社会・文化的につくられた性は、生物学的な性(セックス)と区別して、現在はジェンダーという用語であらわされている。」と述べています²³。このコメントは、翻訳者たちが、生物学的性別と文化的に構築された性別の両方の意を含む、日本語の「性」という言葉を、生物学的な性別(セックス)を示していると理解した箇所に使用する傾向があることを裏付けています。

とはいえ、先に述べたように、この「明確化」は、ボーヴォワールが意図的に、「性」という言葉の有益な両義性(生物学的事実と文化的構築の両方を示す)を残した箇所を、わざわざ訳し分けしてしまった可能性もあります²⁴。このことはまた、セックスとジェンダーに関連する用語の訳出が一筋縄ではいかないものであるという、日本語の特徴を示してもいます。翻訳者たちが使用する、生物学的な性別を示す言葉としての「セックス」は、日本語では「ジェンダー」との組み合わせでのみ、その意で使用されます。「セックス」と「ジェンダー」のいずれも、最近使用されるようになった外来語です。ボーヴォワールが使用したフランス語からというよりは、英語からの借用です。フランス語か英語かを問うのは時代錯誤なばかりでなく、英語をフランス語(数ある言語のなかでも)より上位にあると決めてかかる、残念かつ全く意図せぬ結果を招きます。これは、第二次大戦後の占領軍政治の遺産が、日本における言語の政治を左右した歴史に起因することであり、フェミニズム一般や、ボーヴォワールによるフェミニスト理論への貢献とは別の話です。

結論

生島遼一による『第二の性』の最初の翻訳は、何はともあれ、50年代から60年代初期に、女らしさというものは生まれながらのものではなく文化的に構築されたものだと言することで、多くの若い女性たちに刺激を与えました。翻訳上の重大な問題が、ボーヴォワールの議論を部分的に不明瞭にしていたにもかかわらずのことです。しかしまた、その誤訳は、多くの読者に、ボーヴォワールは女性性や母性を侮辱しているという、誤った印象を与えてしまいました。1960年代の終盤になると、「男性本位的」とみなされたボーヴォワールの思想は、「ウーマンリブ」運動初期の運動家たちに時代遅れだと見限られるようになりました。1986年のボーヴォワールの死を受けて世界的に巻き起こった、彼女のフェミニスト理論への貢献の再評価が、日本の研究者によるボーヴォワールの思想の再検討を促しました。1997年の『第二の性』再翻訳のおかげもあり、現在の日本では、ボーヴォワールは現代のフェミニスト理論の礎となる概念の多くを築いた先駆者であると理解されています。しかし、1997年の再翻訳が、多くの点で生島版からの改善を成し遂げた一方で、翻訳者たちの活動家の情熱がボーヴォワールの思想の「明確化」にむけられたことが、意図せぬ結果をもたらしてもいます。それは、ボーヴォワールが曖昧なまましておくことを選んだ箇所をわざわざ訳し分けたため、原著テキストの哲学的複雑性が部分的に平板化されてしまったことです。とはいえ、ボーヴォワールの名前が、日本のフェミニズムについての重要な参考文献や歴史の中に登場しているということは、ボーヴォワールのフェミニスト理論の創始者としての地位は安泰であるということでしょう。

²³ 同書 371 頁。

²⁴ フランス語の原著では *sexe* と *féminité* の語が使用されているが、その用法はあいまいであり、生物学的な性別と文化的構築であるジェンダーのどちらを意味しているのかははっきりしない箇所は少なくない。これは、ボーヴォワール研究者たちが盛んに議論している点である。皮肉なことだが、もしも、『決定版』の翻訳者たちが日本語の「性」という言葉の多義性を利用してあいまいさを残していたら、原著の意図に近いものになっていたとも考えられる。翻訳者たちは、現代のフェミニスト研究者の常識に基づいて、訳語を区別してしまったが、ボーヴォワールが原著を執筆した当時には、その区別は存在していなかったのである。



コメント

皇太子妃と哲学者、同時代の「日本人女性」

北村 文

津田塾大学

.....
津田塾大学講師。専門分野は社会学、ジェンダー研究、日本学研究。東京、ホノルル、香港、シンガポールでエスノグラフィー調査を実施。代表的著作は、『日本女性はどこにいるのか：イメージとアイデンティティの政治』（勁草書房、2009年）、日本の日英バイリンガリズムとジェンダーを分析した「English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan」（『Gender and Language』10(1)、2016年）、香港在住日本人家庭の外国人家事労働者雇用を調査した「Hesitant Madams in a Global City: Japanese Expat Wives and their Global Householding in Hong Kong」（『International Journal of Japanese Sociology』25(1)、2016年）、「Gender, Representation and Identity: The Multifold Politics of Japanese Woman Imagery」（『Handbook of Gender in East Asia』所収、2020年）、共編書『現代エスノグラフィー』（新曜社、2013年）。

バーズレイ先生、ブロック先生、素晴らしいご報告をありがとうございました。フィールドワークとインタビューを主な調査手法としている社会学者として、お二人のインター・テクスチュアルな手法による研究について、とても興味深く伺いました。いずれの報告も、多様なテキストを注意深く読み込むことにより、いかに言説構築が私たちの生き方に影響を与えているか、特に、ジェンダーが論点となった時にそうであるかを明らかにしています。正直なところ、客席に座ってディスカッサントがどんなコメントをするかを楽しみに待つ立場でいたかった、という心持でいます。

少し異例なことかもしれませんが、まずは、私自身と私の研究について、過去の失敗経験を交えながらお話いたします。私は、津田塾大学で教えています。女子大学で女子学生だけを相手にジェンダーについて講義することを、とても楽しんでます。女性どうしですの話ですので、私の発言を男性がどう解釈するかとか誤解するかという心配をする必要はありません。

数週間前、10日間という長いゴールデンウィークの直前のことです¹。学生たちに、美智子皇后と明仁天皇にご拝謁した時のことを話していました。私はお二人が新婚旅行でハワイを訪問したことを記念して創設された「皇太子明仁親王奨学金」の奨学生でした。皇居のカーペットの厚みや、お茶がおいしかったとか、握手をした美智子皇太子妃の手が柔らかであったなど、昼食後の授業で眠そうにしている学生を刺激しようと考えての、他意のないおしゃべりでした。

話をしながらふと気が付いたのは、もしかしたらこのクラスにいわゆる「在日」の学生がいるかもしれない、ということでした。韓国・朝鮮、中国または台湾にルーツがあり、大日本帝国による植民地支配の時代に、曾祖父母が移住した、または強制連行されたという背景の学生が、いないともかぎりません。彼女がほかの学生と同じように私の話を面白がって聞けたはずがありません。急に緊張を感じ、私の顔からは笑みが消えました。どうしてこんな無神経なことができたのか？私は慌てて、ゴールデンウィークが延長したからと

¹ 2019年5月1日の新天皇即位を祝うため、日本政府は、例年は1週間であるゴールデンウィークを10日間（4月27日から5月6日）に延長することを承認した。

いって喜べない、その背景には日本の帝国主義の暗い歴史があるというのに、目をそむけてしまうようだから、と言い添えてその話を終わりにしました。その時の学生たちの当惑した表情が、いまでも目に焼き付いています。北村先生は、たった今まで楽しそうに自慢話をしていたのに、急に真剣になって、良くわからない難しい言葉をボソボソつぶやいている、と。女子大学で教えるのは、やりがいもあり楽しいことです。でも、学生の全員が同じ背景の出身ではないということを、忘れてはいけません。

このようなきまりの悪さを感じた経験は何度かあります。2000年代の初め、大学院生だった私は、ハワイ大学で学んでいました。私の研究は、ハワイに住む日本女性が、どのように日本女性のステレオタイプに遭遇し、それと折り合いをつけるかというものでした。可能な限り多くの日本女性にインタビューをしたいと考えて、インタビューに応じてくださった方から知人を紹介してもらう方法で、対象者の数を順調に増やしていきました。X さんを紹介してもらった時のことです。勧めに従い、親しげな文面のメールを送って、調査に参加していただけないかと依頼しました。返信には、自分はインタビュー対象として相応しくないと書かれていました。私からは、「相応しい」とか「相応しくない」ということはなく、どのようなお話も私にとっては貴重なのですと返信しました。次に X さんから来たのは再度の断りのメールでした。「人には話したくないこともあるんです。あなたのような東大生にはおわかりにならないかもしれませんが」。

当時私は東大のドクター院生でした。そのことは共通の知人から聞いていたのでしょう。この時もまた、大きく動揺しました。私は、私自身がハワイに住む日本女性なのだから、みんな私に気軽にいろいろ話してくれるだろうと、無邪気に思っていたのです。日本女性同士が経験や思いを共有すること、何の疑問も感じていなかったのです。X さんのメールが、この思い込みを打ち砕いてくれました。日本女性なら皆同じという訳ではないのです。日本女性というカテゴリーには、社会経済的な多様性や、人種や民族、そしてその他にも、様々な相違が内包されているのです。

以来、私の研究は、「日本女性」を語ることはできない、ということに焦点を当てるようになりました。私はこれを不可能なエスノグラフィーと呼んでいます。とはいえ、それでもまだ、お話しした通り、「日本女性」神話にどっぷりつかって、教室の席を埋めているのは皆一様に同じ「日本女性」であると思っている自分に気が付くことがあります。これは、研究上の、そして個人的な、挑戦なのです。

私の専門は歴史や文学ではありませんので、バーズレイ先生とブロック先生のご報告に対するコメントをお二人の専門領域に沿った形ですることはできませんが、私なりに二つの報告からインスピレーションを得て考えたことをお話ししたいと思います。特に、いわば、美智子皇太子妃とシモーヌ・ド・ボーヴォワールの名声の後ろに見え隠れする、日本女性たちに着目します。

バーズレイ先生とブロック先生の研究を並べてみると、当時の日本の女性たちが、正反対のタイプの二人の女性を称賛していたことに驚かされます。一方では、1950年代の日本の女性たちは、バーズレイ先生が「異性愛規範と多産性、人種的特権性」と表した近代家族にロマンチックな夢を見出し、ご成婚に狂喜しました。その一方で、ほぼ同時に、女性たちは平等と自由を追求して、最も前衛的な「非女らしさ」の象徴のひとり、シモーヌ・ド・ボーヴォワールを崇拝しました。ブロック先生はこう述べています。

両親、教師、1960年代のマスメディアから、ロマンチックラブを追い求めることは奨励されつつも、その向かう先にあるのは結婚と母性だと諭され、日本の女性たちは、制約の多い結婚の慣習の外で堂々と愛とセックスを追求するという考えを、解放と受け止めました。

二つのメディア・センセーションは、考えてみると、はっきりと対照をなしています。

こんな疑問が思い浮かびます。戦後第一世代の日本の女性たちは、美智子皇太子妃のような献身的な妻や母にあこがれていたのでしょうか、それともボーヴォワールの生き方が示す、家父長制度的期待から自由になりたいと思っていたのでしょうか？女性たちは、国家イデオロギーに従いたいと思っていたのでしょうか、それとも抵抗しようと思っていたのでしょうか？

この、どちらでしょうか、という問いの形は、便利な質問形式ではありますが、実はひっかけ問題です。日本女性の中には常に、多様性や差異が存在しているわけですから、女性たちそれぞれが異なる現実を生きていて、異なる崇拜対象がいて、異なる夢を持っているということに、何も不思議はないはずです。

話はもう少し複雑になります。『ハルコの世界』という本を紹介します。ゲイル・バーンスタインによる重要な、1970年代の日本の農村生活のエスノグラフィーです。主な調査対象は、「典型的な日本の農村女性」を自称するハルコです。1974年時点で42歳ですから、バーズレイ先生とブロック先生の報告に登場する女性たちと同世代にあたります。ハルコは家事を引き受けると同時に、家族が営む農業の中心となって、田んぼの管理をし、家族が食べる果物や野菜を育てています。地域内で雑多なパートタイムの仕事を受け、村の農家の戸主男性たちと共に村内の集会に参加します。それでも、彼女自身は自分は「主婦」だと考えています。

ハルコの打ち明け話から、さらに複雑な現実が明らかになります。

「できることなら、毎日子どもたちのセーターを編んだり部屋の片づけをして過ごしたい²。」

これについて、バーンスタインは、こう述べます。

日本の農村女性にとって、女性の解放とは(解放という言葉は使わないかもしれないが)経済的不安定と単調でつらい農作業から自由になり、料理や掃除、裁縫にかかる時間を増やし、子どもの宿題を手伝えるようになることなのだ³。

明らかに、ハルコにとって「良妻賢母」はかなわぬ夢なのです。ハルコは、ブルジョワのマイホーム主義を追求することができる境遇の、美智子妃崇拜者とは違っています。また、都会の中流階層で学識があり、マイホーム主義に疑問を持ちそれを否定するというぜいたくが許されている、ボーヴォワール支持者とも違っています。しかし、興味深いことに、ハルコは、男性たちと肩を並べて仕事をし、自立と自由を謳歌することで、ある種の「非女らしさ」的生活を、地方の農村で実現させているのです。そうと考えていなくとも、ボーヴォワール流なのです。

ここでわかってくるのは、戦後女性の、経済、地域、教育面での多様性です。経済的資本そして文化的資本を持つ女性たちは、美智子妃の良妻賢母像をモデルとしました。ボーヴォワールのフェミニズムの熱心な信奉者は、ブロック先生のお話に登場した女性作家たちを含め、恵まれた社会的立場を利用して

² Gail Lee Bernstein, *Haruko's World: A Japanese Farm Woman and Her Community*. (Redwood City, CA: Stanford University Press, 1983), 85～6 頁

³ 同書 168 頁

国家イデオロギーを超えることを目指しました。そして、ハルコのような、そして香川と滋賀の私の祖母たちのような、政府が宣伝し、ボーヴォワールが抵抗した、都会の中流階級的な女らしさとはかけ離れた現実を生きる女性たちがいました。社会経済的な差異、政治イデオロギーの差異、そして分断は、計り知れないほど大きかったのです。

その他にも、「良妻賢母」イメージの影で生きていた、他者化された女性たちをあげてみたいと思います。人種、民族、言語、セクシュアリティ面でマイノリティとなる女性たち、被差別部落の女性たち、障がい者の女性たち。ほかにもまだまだたくさんいます。こうした女性間の多様性や差異については、ウーマンリブ運動や世界的な第二波フェミニズム運動一般においても、見過ごされてしまったと指摘されています。重松セツはこの点について、「日本のフェミニストたちは、ジェンダーにだけ焦点を当て、限定して考えてきた。それこそがエスニシティと階級の特権に他ならない」と指摘しています⁴。「日本女性」というカテゴリー内には、多様性のみならず、権力や階級構造、そして暴力も存在しています。

このような日本女性間の多様性、一般化不可能性、分類不可能性は、フェミニズムにとって、いまだに争いの種になります。ごく最近のことですが、女子大学がトランスジェンダー学生を受け入れ始めること（お茶の水女子大学の決断がそのきっかけ）について、社会的な議論が巻き起こりました。多くのトランスジェンダーの団体がこれを好意的に受け止めたのに対し（もちろん、過度に一般化してはいけませんが）、自称「ツイッター・フェミニスト」たちのなかには、躊躇する気持ちを表す人もいました。特に、性暴力反対を強く主張している人たちです。身体的変化の程度がどうあれ、男性の身体（であったもの）が女性にとって安全な空間に侵入することは容認できない、というコメントまで飛び出す事態です。熱い議論は未だに続けられていて、互いへの敵意から暴言が飛び出すこともあります。これはまさに、女性間の暴力といえるでしょう。

女性とは誰のことでしょう？ 日本女性とは誰のことでしょう？ より重要なのは、私たちがごく気楽に女性や日本女性について語るとき、そのカテゴリーには誰が含まれていて、誰が除外されているのかという問いです。二つの研究報告は共に、歴史的視点から、フェミニズムの核心におけるこの問いの重要性に光を当てていると思います。この長く問い続けられている問題について、この機会に議論を交わしたいと思っています。

⁴ Setsu Shigematsu, “Rethinking Japanese Feminism and the Lessons of *Ūman Ribū*: Toward a Praxis of Critical Transnational Feminism,” in Julia C. Bullock, Ayako Kano and James Welker eds., *Rethinking Japanese Feminisms* (Honolulu, HI: University of Hawaii Press, 2018), 217 頁。



コメント

ゲイ・ローリー

早稲田大学

早稲田大学教授。専門分野は日本文学。日本人女性の伝記著作、翻訳を数多く手がけている。代表的著書は、与謝野晶子の『源氏物語』への傾倒を中心に綴った伝記『Yosano Akiko and The Tale of Genji』(ミシガン大学日本研究センター、2000年)、伝記翻訳『Autobiography of a Geisha』(コロンビア大学出版、2005年、原著：増田小夜『芸者：苦闘の半生涯』1957年)、江戸初頭の宮廷での密通スキャンダル猪熊事件に巻き込まれた中院局の生涯をたどる著作『An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan』(コロンビア大学出版、2013年)。柳沢吉保の側室、正親町町子による日記文学『松陰日記』の翻訳書を近刊予定。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、第2波フェミニズムの高揚する時代に成年に達した世代にとって刺激的な存在でした。1949年の『第二の性』の出版とその後の30以上の言語への翻訳は、第2波フェミニズムを誘発しました。多分、これが、私がいつボーヴォワールの人生と著作について知ったかをはっきり言えない理由でしょう。オーストラリアの都市近郊の女子校で学んでいた時ではないと思います。その学校では、フランス人女性教師からフランス語を学び、当時どこの女子校でもそうであったように、その先生のことば、ただ「マダム」と呼んでいました。授業で読んだ本は、フランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』でした。ボーヴォワールを最初に読んだのは、日本でだと思います。交換留学生として津田塾大学にいた1982年の夏休みに、『娘時代』を読みました。つい先日、ぼろぼろになったその本を何年振りかで取り出し、その本の英語訳をしたのが、日本で30年以上に渡って英語を教えていたイギリスの詩人、ジェイムズ・カーカップ(1918生～2009没)であったことを知りました¹。

日本の知識人たちにとって、ボーヴォワールがどれほど重要であったかを認識するようになったのは、その数年後、日本女子大学で、再びフランス語の勉強を始めたときでした。初級の文法を学んだ学期の後に与えられたのは、日本語による解説付きの『娘時代』のダイジェスト版でした。教師は、1968年代終わりの学生運動を経験している日本人男性でした。パリでのことか東京だったか、またはその両方か、もう思い出せません。教室でノンポリの女子学生を前に、眠たげなやる気のなさを振り払わせようと、ドラマチックな闘争の経験と、彼や彼の友達が目指していた自由な生き方について、時折語ってくれました。「僕たちはサルトルとボーヴォワールだ！」大きな声で鼓舞します。「愛のために生き、愛のために死ぬ、常識にとらわれるな！」

ジュリア・ブロック先生の今日のご報告とその他の論文から²、私のフランス語の先生の経験がどのようなものであったか、サルトルとボーヴォワールのパートナーシップのイメージが左派知識人にどう受け入

¹ カーカップ英訳版は初め、1959年 André Deutsch and Weidenfield & Nicholson 社刊。その後 1963年 Penguin Books 刊。カーカップの業績については、ガーディアン紙に掲載された、Glyn Pursglove and Alan Brownjohn による追悼記事参照。https://www.theguardian.com/books/2009/may/16/obituary (accessed 19 May 2019)。

² Julia C. Bullock, “Fantasy as Methodology: Simone de Beauvoir and Postwar Japanese Feminism,” *U.S.-Japan Women's Journal* no. 36 (2009): 73-91; “From ‘Dutiful Daughters’ to ‘Coeds Ruining the Nation’: Reception of Simone de Beauvoir’s *The Second Sex* in Early Postwar Japan,” *Gender and History* 30.1 (2018): 271-285.

れられていたのかを十分に理解することができます。それは、ジャン・バーズレイ先生の発表で示されたとおり、同じ時代に、明仁皇太子と美智子妃を手本とした家庭第一主義の結婚という理想のアンチテーゼなのです。

皇室制度と保守主義に切っても切れないつながりがあることを考えると(実際のところどの世襲君主制でもそうです)、現在の皇族が日本国憲法の革新的な平和主義に徹底して忠実なのは、注目に値することでしょう。政治的発言を禁じられている立場ではありますが、1978年に14人のA級戦犯が合祀されて以来、靖国神社への参拝を取りやめたという決定は、多くを語っています(1975年の昭和天皇の参拝が、皇族による最後の靖国神社参拝)。

さて、数年が経ち、早稲田大学国際教養学部で、日本の女性文学についての授業を担当するようになりました。学生の共通言語は英語です。すべての教材は英語で、クラス内での討論も英語です。授業の準備をしているとき、研究室の棚に、ボーヴォワールのエッセイ「女性と知的創造」があるのを見つけ、とても嬉しくなりました。ボーヴォワールが1966年にサルトルと一緒に来日した際の講演原稿の英語訳です³。トリル・モイが編纂した『French Feminist Thought』に収録されているものです。改めてそれを目にし、大学院で学んでいた頃のことが思い出されました。「フレンチ・フェミニズム」が大ブームだった時代です。

「女性と知的創造」は、1966年9月22日に日比谷公会堂で行われた講演です。この中でボーヴォワールは、いまだに私たちを悩ませている、女性芸術家や女性作家についての疑問への回答を提示しています。女性作家に焦点をあてたコース授業の最初の討論の口火を切るのに最適な題材です。ボーヴォワールが答えようとした一番の疑問は、なぜ「政治・芸術・哲学などのあらゆる部門において、その数量からいっても質からいっても、女性の業績は男性に比べてはるかに劣って」いるのかでした。(39頁：脚注3参照、以下同)

今日私たちが思うところはさておき、ボーヴォワールはこれを、彼女の論争の起点として有効だと考えたようです。彼女が並べた例は広範に及びます。ヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』(1929年)、オランダの画家ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(1853生～1890没)、スイスの彫刻家アルベルト・ジャコメッティ(1901生～1966没)、そして日本の紫式部。紫式部については「日本の偉大な作家」、そして『源氏物語』を「おそらく女性の筆による世界最高の文学作品」とであると述べました(58頁)⁴。

ボーヴォワールはまず、「この二十年間、男性と女性が同等なチャンスをもったと主張するのはまったくの嘘だということですよ」と論じます(42頁)。女性は職業を持つようになったかもしれない、しかしその数はわずかで収入も男性に比べてとても少なく、家庭内の重労働に縛り付けられているなど、私たちにもなじみ深い話です。それゆえ、「女性の職業上の凡庸さは多くの事情に原因するものであって、それは女性の本性からくるものではなく、女性の生活状況からきている」のです(46頁)。

³ “Women and Creativity”のRoisin Mallaghanによる英訳はToril Moi編『French Feminist Thought: A Reader』(Oxford: Blackwell, 1987), pp. 17-31に収録されている。このほかMarybeth Timmermanによる英訳はMargaret A. Simons and Marybeth Timmerman編Simone de Beauvoir著『Feminist Writings』(Champaign: University of Illinois Press, 2015), pp. 155-169に収録。Ursula Tiddによる“Introduction” pp. 149-154は後者の翻訳に関し細かい説明を提供している。本稿引用の日本語訳文は、シモーヌ・ド・ボーヴォワール(朝吹登水子・朝吹三吉訳)『女性と知的創造』(1967年、人文書院)から引用。添付の参照頁は同書のもの。

⁴ 『源氏物語』のRené Sieffert (1923生～2004没)による完訳版が刊行されたのは1977～1985年なので、ボーヴォワールは、1925～1933年に刊行されたArthur Waleyによる英訳版や、1928年に刊行された、山田菊(1897生～1975没)によるArthur Waley英訳の第1巻(「桐壺」から「葵」までを所収)からのフランス語訳を読んでいたと思われる。

次に、「創造における限界を説明するための女性の内面的な条件は、今まで私がお話しした外部状況よりもっとずっと重要なのです」と続けます(52 頁)。「すべてが男の子を野心へとかり立てますが、女の子を野心へとかり立てるものは何にもありません」とボーヴォワールは言います(54 頁)。ここで『紫式部日記』の有名な一節を例示します。「紫式部の兄が漢文を学んでいたとき、彼は漢字がなかなか覚えられなかったのですが、彼女はたやすく覚えたのです。そして・・・父が、残念なことだ、おまえが男の子ではなくて」と言ったのです(58 頁)⁵。

ボーヴォワールは実社会についてもこう述べます。「この社会は男性支配の社会ですから、重要な決断、大きな責任、重大な仕事はいやがうえにも男性を高め」ます。この言葉から半世紀が経ちますが、社会がどれだけ変わっていないかを私たちは知っています。そしてこう続けます。「女性はこの社会の埒外に生きています。…女性は容易に観察者となり、これは著述を望む人にとって特権的な位置です」。だからこそ、「女性による優れた重要な作品が多数あるのです」(59～60 頁)。その例として、紫式部の『源氏物語』、ラ・ファイエット夫人の『クレーヴの奥方』が挙げられました⁶。

しかし、ボーヴォワールはこうも述べます。「二人とも当時の社会と妥協してい」ます。「偉大な作品というものは世界を完全に討議に付す作品で」あるべきですが、「ところが女性はそれをしません。女性は批判し、細部において意義を申し立てます。しかし世界を完全に討議に付すには、この世界にたいして深い責任を感じなければなりません」(61～62 頁)。

少なくとも『源氏物語』については、ボーヴォワールが意味していることはこうでしょう。紫式部は宮廷における権力関係について巧妙に批判し、彼女自身が作り出した主人公の自負すらあざけっているにも関わらず、「世界を討議に付」してはいない。つまり、ヴァン・ゴッホやジャコメッティのように危険な生き方をしていないと言いたいのでしょう。もちろん私は、このことが紫式部の作品の価値を下げているというボーヴォワールの意見には賛成いたしません。

講演の最後に、ボーヴォワールは知的創造というものについて語ります。「多くの人びとは創造ということについてまったく誤った考えをもってい」ます。彼女は、「人びとはそれを自然の分泌だと空想して、芸術家や作家は牛が乳を出すように作品を産むと思うのです。」といいます。でも、知的創造というものは、もっと複雑なものなのだと論じます。「創造とは・・・社会全体から条件づけられているのです」。女性たちは伝統的規範に縛られていて、彼女たちの状況は男性たちとは全く異なるため、これまで、女性たちの業績が男性たちによるものよりも劣っているのは理解できると⁷(66～67 頁)。

ボーヴォワールは、女性たちを奮起させるメッセージで講演を締めくくります。

⁵ 英訳は Richard Bowring, trans., *The Diary of Lady Murasaki* (Harmondsworth: Penguin Classics, 1996), pp. 57-58 参照。原文は「この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞き習ひつつ、かの人は遅う読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞ聡くはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞつねに嘆かれはべりし。」

⁶ ラ・ファイエット伯爵夫人マリー＝マドレーヌ・ピオシュ・ド・ラ・ヴェルニュ(1634 生～1693 没)の『クレーヴの奥方』(1678 年)は、アンリ 2 世(1519 生～1559 没、在位 1547～1559)の宮廷を舞台にした歴史小説。女性主人公を除くほとんどの登場人物は実在の人物で、宮廷内での逸話も実際に起きた出来事。英訳書は 1950 年刊の Nancy Mitford 訳と、それを Leonard Tancock が改訂したもの(Harmondsworth: Penguin Classics, 1978)がある。

⁷ ジャーメイン・グリアは『*The Obstacle Race: The Fortunes of Women Painters and Their Work*』(London: Secker and Warburg, 1979. Rpt. London: Tauris Parke, 2001)で同様の指摘をしている。「女性のレオナルドや女性のティツィアーノ、女性のブッサンは確かに存在していない。しかしそれは、女性には子宮があるからとか、子どもが産めるからとか、脳が小さいからとか、活力に欠けているとか、官能的でないからなのではない。その理由は、単に、常軌を逸した決意と箍の外れた性的衝動と神経症回路へのエネルギー投入を伴う壊れた自我が、偉大な芸術家を生み出すわけではないということだ。」p. 327.

私は女性たちに・・・知っていただきたいのです。なぜなら彼女たちはなしとげるチャンスをもたなかったのであり、ですから、それ以上できなかったのです。もし彼女たちがチャンスを得るために戦うとすれば、それは同時に彼女たちの自己完遂への戦いでもあるのです(68 頁)。

この要約から、ボーヴォワールの 1966 年日本における講演が、大学の授業での討論の題材に相応しいことはご理解いただけたと思います。体験的な例を挙げると、どのクラスでも学生の誰かが指摘するのは、女性たちの成功を阻み抑える状況の存在は、恵まれない環境の男性たちやマイノリティグループに所属する人々にとっても問題であるということです。ジェンダーに限らず、社会階層や「インターセクショナルリティ」の問題があるということです。

ボーヴォワールの議論に同意できない点はあるとはいえ、特にひとりで世界に立ち向かった男性の天才的芸術家を理想化している点ですが、ボーヴォワールの言葉が、私たちの人生や、ブロック先生がお話くださったように、ボーヴォワールの話を直接聞いたり、会ったり、本を読んだり、それを翻訳した人たちの人生のなかに生き続けていると考えると、勇気が湧いてきます。

謝辞:本シンポジウムへの参加の機会をくださったジャン・バーズレイ先生に感謝申し上げます。ジャンが教室の内外で発している前向きなエネルギーは、皆がよく知るところです。何をするにも一緒に楽しく取り組んでくれるのです。ジュリア・ブロック先生の、日本におけるボーヴォワールの影響についての研究も興味深く読ませていただき、北村文先生、大橋史恵先生、お茶の水女子大学ジェンダー研究所の皆さんにお会いできたことをうれしく思っています。ありがとうございました。

質疑応答

ジャン・バーズレイ: ディスカッションのお二人から素晴らしいコメントをいただき、ありがとうございました。女性の多様性に目を向ける必要があるという、北村先生のご指摘はとても重要だと思います。明治時代においても、平塚らいてふなどの「新しい女」たちは良妻賢母主義に反発しましたが、中流階級の良妻賢母になることを強く望んだ女性たちもいたのです。どの時代であっても、人々の多様性というものは存在します。1959 年のご成婚については、女性雑誌の中で『婦人公論』だけは、ご成婚にまつわるロマンスへの興奮に一石を投じ、婚礼についてのさまざまな異なる意見を紹介しています。ロマンスに限らず多様な要素があることや、皇室制度に反対する意見があることを説明しようとしたのだと思います。

ジュリア・ブロック: 女性たちの中の相違という点はとても重要です。そしてさらに、ひとりの女性のうちにも、美智子妃のようにになりたい気持ちと、ボーヴォワールのようにになりたい気持ちが共存していることもあったと思います。先行きの異なるいろいろな選択肢が与えられていたということで、そこからどれかひとつを選ぶのはとても難しかったと思います。これは現代の若い女性たちについてもいえることです。しかし、占領期の終盤当時、占領軍が進めようとした社会変化の成り行きはいろいろな意味で全国一様ではありませんでした。そのため、女性たちに与えられた選択肢は、多様かつ相反するものでした。今日の基調講演では、その複雑性が良く説明されていたと思います。

質問 1: サルトルとボーヴォワールの日本での一連の講演会について詳しいことはわかりますか？

ブロック: この企画の主催は、サルトルの書籍を出版した人文書院で、協力者は慶応大学の学者たちでした。そのひとり、朝吹登水子の兄、朝吹三吉です。三吉の関わり方がどのようであったか具体的には知りませんが、登水子と三吉は共に、ボーヴォワールとサルトル、そして彼らと親しい知識人たちを良く知っていたと思われます。フランス文学、特にサルトルの研究で著名な白井浩司も中心人物のひとりです。加えて、特に東京地域の大学に協力を呼び掛けたようで、ボーヴォワールとサルトルは、複数の大学を訪問しています。また、『朝日新聞』や『婦人公論』などの活字メディアもふたりを招待しています。他にも多くのスポンサーたちが講演を依頼しており、たくさんの講演会が開催されました。

質問 2: ボーヴォワールと美智子妃が会うことはあったのでしょうか？

ブロック: 私の知る限りはありません。ボーヴォワールとサルトルは、日本滞在中に大勢の知識人や政治活動家に会っています。例えば、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の代表です。ボーヴォワールもサルトルも左翼活動家でしたので、日本の同胞に会うことを楽しみにしていました。ボーヴォワールは女性労働者たちの話を聞きたいと思ったようで、実際に女性の港湾労働者や建築労働者と会っています。女性と労働という問題への関心はとても深かったのですね。あらゆる職業の女性と会って話したいと思っていたようですが、皇太子妃と会う機会はなかったようです。正直なところ、どうやったらそれができたかの見当すらつきませんが、もしも実現していたら、興味深い会話が交わされただろうと思います。

バーズレイ: 興味をそそられる質問ですね。ボーヴォワールと美智子妃がどんな話をしたか？アメリカで日

本の女性作家について講義を担当していたとき、期末レポートとして、学生に、架空の会話を書くという課題を出していました。例えば、円地文子がボーヴォワールと話すとか、相手が紫式部だったらとか、蝶々夫人だったらという具合です。実際に話したり書いたりしたことを引用するという指示がありますので、すべてが空想という訳ではありませんが、学生たちはどんなことが起こり得るかを想像して書くことになります。このレポートを読むのはいつも楽しみでした。

質問 3: 最近、哲学よりもコンピュータへの関心が高いようですが、どうしたら、実存主義哲学が人間の存在についての考察の手法として再評価されるようになるのでしょうか？

ブロック: 実存主義哲学の最盛期は 1950～60 年代でした。皮肉なことに、ボーヴォワールが来日したころにはもう、ヨーロッパでの実存主義哲学の人気は下火になっていました。フランスでも、ポストモダニズムなど別の思想に、人々の関心は移行していました。実存主義全体となると話はだいぶ広がるので、ここでは、ボーヴォワールの思想についてお話したいと思います。ボーヴォワールの思想は、様々な哲学の学派を総合して編み出されていて、実存主義もそのひとつです。現象学に依拠しているところも多くありますし、社会主義からの影響も少なからずみられます。というように、ボーヴォワールの思想は様々な学派の哲学の要素を含んでいます。しかし、ボーヴォワールが最近になって読み直されている理由は、ボーヴォワールが力を入れて論じた課題が現代にも共通するものだということに、女性たちが気が付いたからだと思います。例えば、仕事と家庭の両立や、社会的な育児支援や母親支援の欠如といった問題です。日本でも、アメリカでも、その他の先進諸国でも、こうした課題解決にあたっては悪戦苦闘しています。ボーヴォワールの思想の主要な要素は、1949 年に『第二の性』を執筆したころに形作られたのではないかと考えています、そして、そこで考察された広範な社会課題はいまなお続く課題なのです。

質問 4: ボーヴォワールは日本のレズビアンにも影響を与えたと思いますか？

ブロック: とても重要な質問ですね、ありがとうございます。ボーヴォワールが、女性との性的関係についての経験や、性的指向の多様性一般について語っていないと批判されているのは事実です。ボーヴォワール研究者であるウルスラ・ティッドは、この点について、ボーヴォワールは女性との性的関係を持ったことにより起訴されそうな状態であったと述べています。フランス警察は彼女について捜査していました。思うに、個人的な経験について書かなかったのは自己保身のためでしょう。当時のフランス社会には同性愛嫌悪の傾向があり、同性間で性的関係を持つことは違法でした。実際、ボーヴォワールが教え子である女子学生と関係を持っていたことを警察が捜査し始めたことは大きなスキャンダルで、それが原因で教職を離れることになりました。そうした状況を考慮すると、回想録の中で自身のセクシュアリティについて率直に書こうと思わなかったことは理解できます。とはいえ、これはとても残念なことですね。最も偉大なフェミニスト哲学者のひとりであるボーヴォワールは、セクシュアリティについて深く議論できるような経験をしていたにもかかわらず、それについて話すことができなかったのですから。

でも、今の発言については、少し訂正させてください。『第二の性』には、実は、レズビアンについての章があります。つまり、ボーヴォワールは、個人的な経験について話すことは避けていましたが、学術的かつ理論的には、これを論じています。ですから、ボーヴォワールのセクシュアリティについてや、彼女が異性愛規範を超越するセクシュアリティの問題にどう取り組んでいたかに興味がある方は、その章を読んでみてください。数ある他言語への翻訳の中には、この章を削除しているものもありますが、日本語版はそう

していないはずです。また、ボーヴォワールは、数多くの書簡を残しています。サルトルへの手紙は特に多くありますが、他の近しい人々あてのものもたくさんあります。保管されていた手紙は、ボーヴォワールの死後に出版されました。ボーヴォワールがバイセクシュアルであることが明らかにされたのはその時です。ボーヴォワールは私的な書簡に自分のセクシュアリティについて書いていました。遺産を相続した女性の手でそれらの手紙はとりまとめられ、翻訳もされています。関心をお持ちの方は、そちらも読んでみてください。

質問 5: 翻訳の際に意味の複雑性が失われる可能性があるとのことですが、ある意味、多くの人に考えを伝えるためにはある程度の単純化も必要なのではないでしょうか。単純化と元の言葉の意味の複雑性とのバランスをうまくとるには、どうしたらよいでしょうか？

北村文: 日本人女性の複雑性や多様性についての話は、実際、あまり受けが良くありません。私は、「日本の女性ってどんな感じ？」という質問に、「ん〜、どの日本人女性について知りたいの？」と答えていますから、質問者が期待するわかりやすい返答にならないのです。単純化された、あまり複雑でない説明が求められがちであるというのは、その通りです。

ブロック: 最近、翻訳学に関心をもつようになっているのですが、その理由は、まさに今質問された点にあります。翻訳をしていてフラストレーションを感じたり、逆にワクワクしたりするポイントは、これは良い翻訳であるとか、これは悪い翻訳であるとかを、言うものではないことです。ただ単に、違う翻訳なのです。大切なのは、何を言わんとしているかが伝わる言葉を、丁寧に考えて選ぶことだと思います。曖昧な回答のように聞こえるかもしれませんが、本当にそうなのです。特に、ジェンダーにまつわる経験や、セクシュアリティ関連の経験といった、ジェンダーに関する文章を翻訳するときには、語られている問題そのものが既に複雑ですから、著者が言わんとしていることを正確に伝える言葉を見つけ出すのは至難の業です。こういう話をする、翻訳者に対して厳しすぎると思われそうですが、言いたいことはそれではありません。わたしがここで指摘したいのは、翻訳で失われる何かがある危険性と、翻訳過程の重要性です。そしてそれを念頭に仕事をすれば、複雑な意味合いの文章をきちんと訳出することが可能だということです。

バーズレイ: 私は翻訳の作業が好きで、『青鞥』に掲載された記事をいくつも英訳しています。これはとても難しい仕事でした。訳出したものを日本人の友人たちに見てもらい、何度も、何人もの人と、見直しの作業を重ねました。そこまでしたのは、元の日本語の文章の意味をきちんと理解できているかを確認したかったからと、英語で読む読者にとってわかりやすいものにしたいからです。仕上げる段階では、日本語と英語の突き合わせはもうやめて、英語の文章を声に出して読み、英語として自然な文章、流れの良い文章になるよう校正しました。私は、これが、日本語の作品に対する最も誠実な翻訳のやり方だと考えたのです。ブロック先生が指摘するとおり、一番難しいのは曖昧性や多義性です。単に曖昧なだけなのか、それとも何か見落としがあるのか、十分に検討します。曖昧なのだとした場合、同じ曖昧さを表現する言葉を懸命に探します。

そして、方言の翻訳も難問です。例えば、東京弁と関西弁の会話の翻訳ですね。そのふたつの違いを、英語で書き分けるにはどうしたらよいでしょうか？ 谷崎潤一郎の『鍵』も翻訳者にとっての難問の一例です。この小説では、夫の日記は漢字とカタカナで書かれ、妻の日記は漢字とひらがなで書かれています。この場合はどうしたらよいでしょう？ そうしたニュアンスのすべてを含めて翻訳するのは不可能かもしれません。

ゲイ・ローリー: 方言や、カタカナ・ひらがなのような問題に面したときは、正直、絶望的な思いになります。ジャンが『青鞥』の翻訳で用いた方法、最後は日本語のテキストから離れて英語の文章の流れに耳を傾けるというのは、素晴らしい方法だと思います。読み手が求めるのは、英語での響きなのですから。そして、それが日本語の作品に対する最も誠実な翻訳のやり方だということも、その通りだと思います。

北村: 翻訳に良し悪しはないというブロック先生の言葉からの連想で、中立的な翻訳というものは可能だろうかと考えているところです。中立的なエスノグラファーになることは可能か、つまり、フィールドワーク調査で見聞きしたことを中立的に書くことの可能性は、私が繰り返し考え続けていることです。中立的でいることをあきらめたわけではありません。私は、自分がだれで、どういう視点からこれについて書いているのかを、読者にわかるようにきちんと書いて示すことを心がけています。翻訳においても、翻訳者の「立ち位置」というのは重要な要素なのではないでしょうか？ 翻訳者は機械ではありませんから。

ブロック: その点については、1997 年の『決定版 第二の性』の翻訳チームのやり方が良い例だと思います。自分たちの「立ち位置」についてオープンに書いています。第 1 巻、第 2 巻とも、「訳者あとがき」には、決定版翻訳を、なぜ、そしてどう作成したかの詳細を綴っています。読者の中には、翻訳チームの考え方に同意できたりできなかったりがあると思いますが、少なくとも、翻訳者が何をしてなぜそれが良いと思ったかを知ることができます。最初の翻訳に欠けていたのはこの点で、日本語訳には元の書籍と大きく異なる部分があることを皆が知るようになったのは、かなり後になってのことでした。ですから、決定版の翻訳者たちが、原著をどう読んだかを明記したというのは、読者のためになるのです。

質問 6:『第二の性』の誤訳についての日本の研究者たちの議論はどのようなものだったのでしょうか？

ブロック: 私が知っている限りのことをお話しします。1953 年の生島遼一翻訳版は、長きにわたり日本の女性たちにとって唯一無二の『第二の性』でしたので、そこに書かれていることが、ボーヴォワールが言わんとしていることだと受け止められていたわけです。ですから、1953 年版に基づいて形成されていたボーヴォワールに対する先入観を改めてもらおうという、1997 年版の翻訳者たちの取り組みは、険しい道のりであったことと思います。翻訳チームが活動を開始したのは 1980 年代ですから、長い時間を要する作業でした。大著であるということもありますが、翻訳チームの研究者は、決定版の出版に先駆けて、これに関する論文を執筆しています。最初の翻訳に問題があることを明らかにし、なぜ再翻訳が必要で、なぜそれを決定版として出版したいと考えているかということを、複数の学術誌で発表しました。この発信が効果的であったことは、その時期以降にボーヴォワールに対する論調を変えた研究者がいることからわかります。例えば、佐藤浩子の論文には、翻訳チームのメンバーの論文からの引用が見られます。とはいえ、90 年代半ばにもまだ、1953 年版の翻訳に基づいてボーヴォワールを批判する論者はいました。例えば、1995 年、小説家であり女性文学批評家としても著名な三枝和子は、『第二の性』に対する批判を雑誌の連載で発表していますが、その批判の内容は、1953 年版の誤訳に起因する誤解であるように見受けられます。90 年代の半ばになっても、1953 年版の翻訳に問題があることを知ることなく、ボーヴォワールを批判する女性の論者が少なからず存在したというのは、私にとって興味深いことです。研究者の中には、1997 年版の翻訳に影響を受けた人や、すぐには反応を示さなかったか、そのメッセージをまったく受け取っていない人がいたということです。『第二の性』を 1997 年の翻訳版だけで知っているのは若い世代の方だと思いますので、世代間で受け止め方が大きく異なるということもあるでしょう。

「IGS 通信」掲載開催報告

2019 年 5 月 19 日(日)、お茶の水女子大学にて、国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃: 冷戦期日本における自由と愛と民主主義」が開催された。本シンポジウムは、ジャン・バーズレイ特別招聘教授の企画によるものである。バーズレイ教授とエモリー大学のジュリア・ブロック准教授が基調報告を担当し、津田塾大学の北村文講師、早稲田大学のゲイ・ローリー教授がコメンテーター、ジェンダー研究所の大橋史恵准教授が司会を務めた。

戦後の新しい民主主義と経済成長は、1950～60 年代の日本の若い女性たちに新たな希望をもたらした。当時の新しい女性の生き方のモデルとして注目を浴びた中には、フランス人哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃がいた。女性たちに経済的自立の必要性を説き、結婚という形式に縛られない恋愛を体現したボーヴォワールと、皇太子の妻となり、理想の主婦として家庭を守る美智子妃の姿は、一見正反対のようではあるが、女性たちに、自由と自己探求と愛という「夢」を提供したという点が共通していた。そのイメージの相似と相違について、バーズレイ氏は美智子妃について、ブロック氏はボーヴォワールについて、それぞれ報告した。

バーズレイ氏は、美智子妃が女性たちに与えた夢は、「プリンセスになること」であったと解説した。平民出身の女性が恋愛結婚により皇太子妃になるというのは、戦前ではあり得なかったシンデレラストoryである。1959 年のご成婚は、「プリンセス」が象徴する若さと美しさと華やかさ、そして戦後民主主義の成果の投影であったといえる。そして母となった後も、皇室の慣例から脱し、自ら進んで子育てや家事にいそしんだ。専業主婦として公務に励む皇太子を支える「プリンセス主婦」の姿は、1960 年代の戦後家族のモデルとなった。自由と自己探求と愛という「夢」を皇太子妃として実現させた「プリンセス像」を、メディアは熱心に取り上げ称賛し、世の若い女性たちはそれに憧れ、そのような生き方をめざしたのである。

それを良しとしなかった女性たちもいた。ブロック氏は、妻になり母になるという「キャリア」を拒絶する女性たちにとって、ボーヴォワールが『第二の性』で示した、経済的自立と職業的成功から得られる「自由」のビジョンは魅力的であったと説明した。戦後の急速な変化が一段落した 1960 年代、日本社会も政府も保守化の傾向をみせていた。プリンセス主婦の登場はこれに時期を同じくする。戦後の民主主義改革により男女平等が実現されると信じて育った世代は、目の前に立ちあがる、「良妻賢母」的「女らしさ」を押しつける慣習の壁にぶつかることになった。実はボーヴォワールも同じような経験をしていたということが、1961 年に日本語訳が出版された回想録『娘時代』に記されている。その壁を乗り越えて、経済的にも知性的にも自立した立場を確立したこと、そして、サルトルとの自由な恋愛関係が、ボーヴォワールへの憧れを喚起したのである。

しかしその一方で、その女性解放の議論は「母性」や「女らしさ」の否定であると解釈し、ボーヴォワールを批判するフェミニストも存在した。ボーヴォワールが『第二の性』で「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」と強調した点は、現在は、「ジェンダー」として論じられている概念である。しかし、1953 年に出版された日本語版の訳出には、この理解が不十分なための誤訳があり、結果として、ジェンダー規範を批判した文章が、女性の身体を否定するような表現に変えられてしまっていた。1986 年のボーヴォワールの死に続く再評価、日本における女性学・ジェンダー研究の進展、「決定版」と銘打たれた『第二の性』の新訳本の刊行といった一連の動きのなかで、誤訳に起因する誤解は解消され、日本のフェミニストたちはボーヴォワールの思想を再発見するに至った。21 世紀の今も、フェミニスト理論の重要文献としてボーヴォ

ワールの作品は読み継がれ、根強く社会に残る旧来のジェンダー規範に挑もうとする現代女性たちにも勇気を与えているといえる。

コメンテーターの北村氏は、無意識に行ってしまいがちな、「日本人女性」カテゴリーによる一般化の危険性について論じた。美智子妃に憧れた女性たちも、ボーヴォワールを崇拝した女性たちも、「日本人女性」ではあるが、その生き方や考え方は対照的である。さらには、同時代を生きた女性たちのうちには、その2つの「都会の中流階級」グループに含まれない女性たちもいた。農村に目を向ければ、男性と肩を並べて農業に携わりながら、家事や子どもの世話にもっと時間を使いたいと思っている女性たちがいた。いわば、ボーヴォワール流の自立と自由を獲得していながらも、美智子妃流の主婦になりたいと思う女性たちである。「日本人女性」として一括される中には、実は、多様性のみならず、階級構造や権力関係が存在するのだ。ボーヴォワールの哲学が先駆けとなった第2波フェミニズムと呼ばれる運動は、こうした女性の多様性を見過ごしていた。「女性」の定義については、近年のトランスジェンダーをめぐる社会課題への取り組みの中で活発に議論されている。ひとつのカテゴリーを提示する際には、必ず、そこには誰が含まれ、誰が排除されているかの疑問がつきまとう。北村氏自身、『『日本人女性』を語ることはできない』、という点に焦点を当てた研究を進めているとのことである。

これに続くローリー氏のコメントでは、ボーヴォワールが残した言葉の、現代における価値が論じられた。1966年の来日時、日比谷公会堂で行われた講演の題は「女性と知的創造」である。この中でボーヴォワールは、政治、哲学、芸術などのあらゆる分野で、女性が挙げた業績が少ないのは、能力の問題なのではないと説いた。読み書きが良くできた紫式部に対し、父親が、お前が男ならよかったのにと嘆いたことを例にあげ、男児ならば野心を持つように育てられ、女兒にはそうした期待がかけられない、といった社会的な原因こそが、女性の職業的な成功を阻んでいると指摘した。このように、知的創造とは、社会的に条件づけられているものであるからこそ、チャンスを得るために戦うことが大切だと、女性たちを鼓舞したのだ。ボーヴォワールが指摘したジェンダーの問題は、今なお挑戦が続けられている社会課題である。そして同時に、ジェンダー以外の要素によるマイノリティ、複数のマイノリティ要素により困難を抱える「インターセクショナリティ」の社会課題なのである。半世紀前になされた自由と自己探求についてのボーヴォワールの提言は、21世紀となった現在の社会課題を考えるうえでも価値の高いものであり、大学教育の場でこれが読み続けられることに大きな意義がある。

質疑応答では、基調講演およびコメントで提示された議論がさらに深められた。実存主義哲学やセクシュアリティ、ジェンダー平等指標などが話題にあげられたが、特に、「翻訳」については、研究者として翻訳に取り組む立場でもある登壇者たちから、様々な発言があった。原文にある含みや文化背景もあわせて他の言語に翻訳することは、実際、難しい作業である。翻訳とは、単なる機械的な言葉の置き換え作業ではなく、翻訳者という媒体を通じた伝達である。そこには必ず、翻訳者の視点というものがあるため、「中立性」についての疑問がつきまとう。こうした異文化の交差における課題は、国際的な調査研究や成果発信をする研究者が、常に心に留め置く必要のある点であろう。冷戦初期の日本のジェンダーの様相というテーマに限らず、参加者にとって学ぶところの多いシンポジウムであった。

吉原公美(お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任 RF)

<http://www2.igs.ocha.ac.jp/igs> 通信/2019/05/20190519/



Jan Bardsley
Keynote Speech



Aya Kitamura
Commentary



Gaye Rowley
Commentary



Julia C. Bullock
Keynote Speech





Question and Answer
Session



International Symposium “The Philosopher and the Princess” Outline



On May 19, 2019, the Institute for Gender Studies (IGS) hosted the international symposium, “The Philosopher and the Princess: Freedom, Love, and Democracy in Cold War Japan.” The symposium aimed to analyze Cold War dynamics from the perspectives of gender representations. This fresh approach was based on a pioneering research project that Professor Jan Bardsley was conducting at IGS.

Keynote speeches depicted the young women’s search for new ways of living at that time. Discussants responded to the speeches by emphasizing the importance of considering the diversity among women and the need for women’s empowerment. Subjects of the discussion included feminism and the dissemination of the concept of gender in Japan. A thought-provoking, multidimensional discussion took place in the symposium.

【Date】 Sunday, May 19, 2019 13:30～16:30

【Venue】 Multi-purpose Hall, Hisao & Hiroko TAKI Plaza, Ochanomizu University

【Coordinator】 Jan Bardsley (Specially Appointed Prof., IGS/Prof. North Carolina Univ. Chapel Hill)

【Keynote Speeches】

Jan Bardsley “Romance Revisited: The Royal Wedding of 1959 Viewed Sixty Years Later”

Julia C. Bullock (Emory University) “Beauvoir in Japan: Tracing the Impact of *The Second Sex* on Japanese Women”

【Discussants】 Aya Kitamura (Tsuda University), Gaye Rowley (Waseda University)

【Moderator】 Fumie Ohashi (IGS)

【Organizer】 Institute for Gender Studies (IGS), Ochanomizu University

【Language】 English (with English-Japanese simultaneous interpretation)

【Number of Participants】 72

【Symposium Summary】

Japan’s rising affluence in the 1950s and 1960s, the expansion of girls’ education, the increase in women’s magazines, and the rise of middle-class consciousness led women to imagine new possibilities. What new choices did women have? What would it take to realize dreams of freedom, self-discovery, and love? This symposium engages with these questions by discussing the influence of two legendary figures—French feminist philosopher Simone de Beauvoir and Crown Princess Michiko, women who posed radically different models of self-expression, sexuality, and social engagement. Viewing attention to these women through a Cold War lens, we can also ask how ensuing discussion of the philosopher and the princess positioned Japan itself amid the transnational dynamics of the 1950s and 1960s.

【Speakers】 (Extracts from handouts)



Jan Bardsley is Specially Appointed Professor at IGS and Professor at University of North Carolina at Chapel Hill. She is the author of *Women and Democracy in Cold War Japan* (Bloomsbury Academic, 2014) and *The Bluestockings of Japan: New Women Fiction and Essays from Seitō, 1911-1916* (University of Michigan, Center for Japanese Studies, 2007), which was awarded the 2011 Hiratsuka Raichō Prize by Japan Women's University. With Laura Miller, she has co-edited two books, *Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan* (University of California Press, 2011) and *Bad Girls of Japan* (Palgrave, 2005).



Julia Bullock is Associate Professor of Japanese Studies and Chair of the Department of Russian and East Asian Languages and Cultures (REALC) at Emory University in Atlanta, Georgia. She is the author of *The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973* (University of Hawai'i Press, 2010) and *Coeds Ruining the Nation: Women, Education, and Social Change in Postwar Japanese Media* (University of Michigan Press, summer 2019). With Ayako Kano and James Welker, she also edited the essay collection *Rethinking Japanese Feminisms* (University of Hawaii Press, 2017).



Aya Kitamura is Lecturer at Tsuda University. She specializes in sociology, gender studies and Japanese studies, and conducts ethnography in Tokyo, Honolulu, Hong Kong and Singapore. Her publications include: *Nihon josei wa doko ni irunoka* (Locating Japanese Women: The Politics of Image and Identities), Tokyo: Keisō Shobō, 2009, "English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan," *Gender and Language* 10 (1), pp.1-20, 2016, and "Gender, Representation and Identity: The Multifold Politics of Japanese Woman Imagery" in Jieyu Liu and Junko Yamashita eds., *Handbook of Gender in East Asia*, London: Routledge, pp.269-284, 2020. She is also a co-editor of *Gendai esunogurafi* (Contemporary Ethnography), Shin'yōsha, 2013.



Gaye Rowley teaches English and Japanese literature at Waseda University. She has written and/or translated several biographies of Japanese women, including *Yosano Akiko and The Tale of Genji* (2000), *Autobiography of a Geisha* (2003), and *An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan* (2013). Her translation of Ōgimachi Machiko's *Matsukage nikki* (In the Shelter of the Pine, 1710-12) is almost complete.



Fumie Ohashi is Associate Professor of the Institute for Gender Studies and the Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University. Her research interests focus on gender and migration in the reproductive sphere of Mainland China, Hong Kong and Chinese speaking communities in Japan. Her first book *Migrant Domestic Workers in Contemporary China: The Politics of Reproductive Labor in Rural-Urban Relations* (Ochanomizu Shobō, 2011. in Japanese) was based on her long-term fieldwork experiences in Beijing and was awarded the 31st Yamakawa Kikue Women's Studies Memorial Book Award in 2011. Currently she is working on the labor relations and labor movements of migrant and local domestic workers in Hong Kong. She is also interested in transnational and translocal women's activisms in East Asia.



Keynote Speech

Romance Revisited

The Royal Wedding of 1959 Viewed Sixty Years Later

Jan Bardsley

University of North Carolina, Chapel Hill

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University

.....

Jan Bardsley is Specially Appointed Professor at IGS and Professor at University of North Carolina at Chapel Hill. She is the author of *Women and Democracy in Cold War Japan* (Bloomsbury Academic, 2014) and *The Bluestockings of Japan: New Women Fiction and Essays from Seitō, 1911-1916* (University of Michigan, Center for Japanese Studies, 2007), which was awarded the 2011 Hiratsuka Raichō Prize by Japan Women's University. With Laura Miller, she has co-edited two books, *Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan* (University of California Press, 2011) and *Bad Girls of Japan* (Palgrave, 2005).

Abstract: April 10, 2019 marked the sixtieth anniversary of the former Shōda Michiko's marriage to Crown Prince Akihito. April also ushered in the end of the Heisei era and the retirement of the royal couple. A retrospective on Showa romance, this presentation examines media attention to the royal marriage in 1959 and the hopes pinned on commoner Michiko as the "People's Princess." Coverage of the wedding in Japanese women's magazines applauded the royal marriage as proof of the success of the new constitution, a more open monarchy, and the power of romantic love in postwar Japan. Committed to each other and their children, and responsible in their public duties, Michiko and Akihito embodied the new ideology of the nuclear family known as *mai-hōmushugi* (my home-ism) that became the model, if not the reality, for families across postwar Japan. Turning to the press coverage sixty years later in 2019, we see how the media looks back in nostalgia at the royal wedding, praising the enduring marriage of the couple. But nostalgia always tells us more about the present than the past. What is it about Michiko's princess life of the 1950s and 1960s that we seek to recapture?

Introduction: Looking Back at "The Wedding of the Century"

The inspiration for today's symposium is Julia Bullock's new work on the French philosopher Simone de Beauvoir. I was excited when Julia agreed to come to Tokyo this spring to share her research with us. As a well-published expert in Japanese women's literature, feminisms, and, most recently, the inception of co-education in postwar Japan, Julia views Beauvoir's legacy in Japan from diverse perspectives.

To set the stage for Julia's talk, and her major question—*what did Japanese see in Beauvoir*—I would like to offer a counterpoint by taking us back to the royal wedding of 1959.

Sixty years ago, on April 10, 1959, amid great fanfare and media frenzy, commoner Shōda Michiko married Crown Prince Akihito. It was called the "wedding of the century." Over the next decade, the couple and their three children came to represent an ideal family life. The

Crown Princess became a model homemaker.

Understanding the emotional power of Michiko as princess homemaker helps us see *why* Simone de Beauvoir struck such a chord in postwar Japan and how her views offered welcome alternatives.

Following Michiko's story from Beauvoir's perspective, we might say that, "One is not born a princess, but rather, becomes one." But what did it mean to become Japan's commoner princess? How did the Crown Princess come to model the homemaker's role for the middle-class housewife? How did her marriage come to represent the power of romantic love, democracy, and economic prosperity in early Cold War Japan? What did Japanese see in Princess Michiko?

This past April, as you know, when the Heisei era came to an end, the Emperor abdicated, and he and the Empress retired from public life, media attention once again turned to their marriage and their work as symbolic leaders of Japan. Several books and magazine issues celebrated Michiko's character and accomplishments.¹ Many of these publications record individuals' personal accounts of what the Emperor and Empress had meant to them. Lots of beautiful photos captured happy moments, inspiring admiration and nostalgia.

To revisit the royal romance today and think about how one becomes a princess, we follow these publications to go back to the story of the couple's meeting, the excitement over their "love marriage," and then look at Michiko's transformation as the ideal homemaker. We conclude with more recent scenes of the imperial couple, and finally consider where the royal family itself may be headed.

The Early Cold War as the Era of the Princess

Let's consider the broader context of Cold War global royalty. The 1950s might be called the "Era of the Princess." After the devastation of world war, tales of princesses—real and imagined—captivated audiences around the world. Apparently, people everywhere were fascinated with how "one becomes a princess."

There were England's famous royal sisters, Queen Elizabeth and Princess Margaret; Hollywood star Grace Kelly's 1956 elevation to Princess of Monaco, Disney's 1950 animated *Cinderella*, and Audrey Hepburn's role as Princess Ann in the 1953 movie *Roman Holiday*. Beauty queens like Miss Japan 1953 Itō Kinuko also took their turn as swimsuit royals.² In Japan, ever more popular women's magazines made all these star princesses—their fabulous

¹ Many of the books published recently offer quotes from Michiko that readers can use as life lessons. Photo books capture elegant moments in her life, serving to inspire fashion nostalgia. A small sampling: Asahi Shimbun Shuppan, ed., *Michiko-sama no jidai* [The Era of Michiko-Sama] (2018); Shufutoseikatsu-sha, ed., *Michiko-Sama 60 nen no utsukushii kiseki* [Beautiful Traces of Michiko-Sama's 60 Years] (2019); and Yamashita Shinji, *Michiko-Sama: Suteki na okotoba 61 nen no kiseki* [Michiko-Sama: Lovely words, Traces of 61 Years] (Takarajima-sha, 2019).

² Jan Bardsley, "Miss Japan on the Global Stage: The Journey of Itō Kinuko," in *Modern Girls on the Go: Gender, Mobility, and Labor in Japan*, eds., Alisa Freedman, Laura Miller, and Christine R. Yano (Palo Alto: Stanford University Press, 2013), pp. 169-192.

lives, romances, and fashion choices—familiar to readers, inviting readers to identify and sympathize with them.³

Looking at this array of princess, we can see their similarities—their youth, beauty, and fashion—and think about the political role that they played in the cultural landscape of the early Cold War. The princess was certainly not a communist. In her ball gowns and tiara, she defied communist rejections of gender difference, private property, and monarchy. But the princess stood somewhat apart from democracy as well by evoking class hierarchy and tradition, and this, too, many found comforting. Today, we see more clearly how she naturalized heteronormativity, fertility, and race privilege. But in the 1950s, above all, the princess symbolized the power of romantic love—she was the beauty waiting in the wings for Prince Charming to sweep her away and take her to a luxurious castle where they would live “happily ever after.” As many feminist critics have pointed out, what it meant to live “happily ever after” remained the big unknown in these princess fairy tales.⁴

Returning to 1950s Japan, we find the nation’s most eligible bachelor, Crown Prince Akihito prepared to find his own princess bride. He represents the future of the postwar symbolic monarchy. The press followed Akihito’s bride quest closely, fanning curiosity about possible candidates. But all were surprised when he chose Shōda Michiko, for even though she was one of the wealthiest girls in Japan, she was a commoner all the same.⁵

The Tennis Court Romance

As the story goes, Akihito and Michiko happened to meet on a Karuizawa tennis court. And while now we realize how many formal negotiations behind the scene preceded this meeting, it was the “love at first sight” encounter that captivated many women in Japan.

Indeed, in the spring of 1959, no story absorbed more attention in Japanese women’s magazines than did this engagement. It was *the* cover story. Article after article concentrated on Michiko’s Cinderella-like transformation. Readers learned all about Michiko’s life from her privileged girlhood and Catholic education to the magical tennis court moment and Akihito’s determined pursuit of her. Magazine stories let readers peek at behind-the-scenes negotiations over the engagement, anxieties and excitement over preparations for the royal wedding, and designs for the couple’s new home. Readers learned where they could buy

³ I discuss Cold War formations of the princess, the beauty queen, and the homemaker, and media attention to the 1959 wedding of Shōda Michiko in *Women and Democracy in Cold War Japan* (London: Bloomsbury, 2014). This presentation draws from that research.

⁴ Taking a creatively subversive approach, feminists have produced children’s books with a new twist on princess tales. Sociologist Ueno Chizuko, for example, translated into Japanese Babette Cole’s picture books *Prince Cinders* (Sandcastle, 1987) and *Princess Smarty Pants* (Putnam Juvenile, 1987) respectively as *Shindere-ōji no monogatari* (Kyoto: Shoukadoh, 1995) and *Tondera-hime monogatari* (Kyoto: Shoukadoh 1995). Feminist Japanese Studies scholar Setsu Shigematsu, with illustrator A. Das, published *Princess Ten Ten and the Dark Skies* (Guardian Princess Alliance, 2014), which teaches young readers to care for the planet and to overcome bullying.

⁵ Michiko’s father, Shōda Hidesaburō was president of the Nisshin Flour Milling Co., the largest flour-milling corporation in Asia in 1959.

tennis sweaters, too.⁶

Visual images played a crucial role in the magazines' telling of this fairy tale. The most frequently used photographs captured Michiko and Akihito on the tennis court. Here, we may pause to ask, "What kind of sport is tennis?" For one point, it is a sport played by equals on either side of a net. Tennis is also a sport associated with modernity, aristocracy, and global glamour.

Consider this photograph of the couple. [1958 color photograph shown at the presentation displays the couple in tennis clothes seated together].

Their smiles easy and their posture relaxed in these photographs, the couple project the vitality of youth, an effortless self-assurance, and true companionship. They lean in, close, comfortable with each other. They have *chosen* to be with each other. Everything about this scene looks so whole, so natural, and yet the snapshot's glamour enfolds a fundamental contradiction: the promise of postwar democracy and gender equality conjoined with the enduring patriarchal privilege of the imperial throne. The photograph captures another contradiction as well: the private moment made public. Fans adore monarchy for its regal distance, but yearn to see the private lives behind the formality.

Much attention has turned recently to Akihito's proposal to Michiko. Reportedly, he told her that duty came first, his private life second, and that he may not be able to protect her. By agreeing to marry him, she, too, pledged commitment to duty. In 1959, Japanese women's magazines saw Michiko as *rescuing* this lonely prince charming for she would bring the warmth of a commoner's love and give him a chance to create an "ordinary" family. Created by the media as the "People's Princess" (*minkan kara no okisaki*) Michiko would also bring the monarchy closer to the people. This rhetoric romanticized the Japanese nation as one "people" united in their support for romantic love.⁷

For all the excitement over the royal "love marriage" in 1959, it took about twenty years after the war for love marriages to become as common as arranged ones in Japan. As Barbara Sato explains, young people still needed to work out how to meet potential partners. Dating was not a custom, and many parents did not approve of their adult children seeking mates on their own.⁸ Still, the marriage of the Prince and Princess gave young people romantic hope, and as we shall see, many continued to look to them to create a new kind of family.

⁶ For discussion of specific magazine titles and articles on the royal wedding, see Chapter 5, "Fashioning the People's Princess" in Bardsley, *Women and Democracy*, 2014.

⁷ Shōda Michiko was not the only modern princess with charismatic powers. The unexpected death of Princess Diana, also famously known as the "People's Princess," inspired grief in the UK and around the world in 1997. Scholars analyzing this expression of global mourning questioned the cultural and political ramifications of the title, "People's Princess." Mandy Merck, ed., *After Diana: Irreverent Elegies* (London: Verso, 1998).

⁸ Here, I refer to Table 3 "Marriage Configurations in Postwar Japan" and discussion in Barbara Hamill Sato, *The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Women in Interwar Japan* (Durham, N.C.: Duke University Press, 2003), p. 161.

Royal Women in the U.S. Media: The View in *Time*

In a special issue on the royal wedding, *Time* magazine also took interest in how “one becomes a princess” in 1950s Japan.⁹ The magazine gave the United States all the credit for creating this commoner princess. According to *Time*, young Japanese women in 1959 were eagerly embracing the freedoms afforded by the new Constitution, which Julia Bullock will explain in her presentation. *Time* ran photos of women in different occupations, celebrating their active public lives. They were seen as proving the success of the American-led occupation. The only drawback, according to *Time* magazine, were Japanese men who refused to catch up with the times. The magazine also points to right-wing disapproval of the commoner and the royal love marriage as the unfortunate residue of feudalistic Japan.

Later that year, *Time* magazine features Queen Elizabeth on its cover.¹⁰ Here, the focus is the status of the Commonwealth and there is no reference to gender politics in the U.K. Rather *Time* compliments the British royals on modeling an ideal family life.

This difference in reporting on Japan and the U.K. reflects a common assumption one still finds in American media—when the focus is on Japanese society, the “problem of gender” inevitably arises. In 1993, when the American press reported on Owada Masako’s royal wedding, the focus again extended to the status of women in Japan.¹¹ American reportage on royal weddings in Europe tends to focus much less on the issue of gender. Megan Markle’s entry into the British royal family last year and the birth of her son recently did spur conversations about race in the UK.¹²

Another People’s Princess: The “Maiden Martyr” Kamba Michiko

We should pause here to consider how the Japanese media, particularly the popular weekly magazine *Shūkan Asahi*, created another kind of democratic princess around this time, too, and recall the story of another Michiko.

As sociologist Hiroko Hirakawa has discussed, *Shūkan Asahi* wrote about Tokyo University student Kamba Michiko as the “maiden martyr for a new Japan” after she was killed in the Apmo protests of 1960 over renewal of the U.S.-Japan Security Treaty.¹³ Although Kamba had been Vice-President of Zengakuren, the student activist association, *Shūkan Asahi* characterized her as an innocent, apolitical girl who sacrificed her life so that Japanese, nearly crushed by the corrupt government of the times, would revive their hopes for

⁹ “Japanese Women: New Freedoms Amid Old Customs.” *Time* (23 March 1959): 24-36.

¹⁰ “Crown & Commonwealth: Canada’s Queen on Tour.” *Time* (29 June 1959): 15-19.

¹¹ For analysis of media attention to the 1993 wedding, see Jan Bardsley, “Japanese Feminism, Nationalism and The Royal Wedding of 1993.” *Journal of Popular Culture*, Vol. 31 (1998): 189-205 and Amanda C. Seaman, “Modeling Masako: Commodities and the Construction of a Modern Princess,” *Chicago Anthropology Exchange*, no. 21 (Spring 1995): 35-72.

¹² After Megan Markle gave birth to a son on May 6, 2019, media attention turned to his “bi-racial heritage” and curiosity over the color of his skin.

¹³ Hiroko Hirakawa, “Maiden Martyr for ‘New Japan’: The 1960 Apmo and the Rhetoric of the Other Michiko.” *U.S.-Japan Women’s Journal*, 51 (2017): 12-27.

democracy. Like commoner princess Michiko, Kamba Michiko, too, by virtue of her sexual and political purity had the maidenly charisma necessary to unify opposing groups into the harmonious whole of “The People.” As Hirakawa argues, *Shūkan Asahi* depicted Kamba’s loss of life as her missed opportunity to enjoy motherhood, framing child-bearing and child-rearing as women’s mission.

Hirakawa explains how a group of feminists reflecting on Ampo thirty years later in 1990 surveyed 450 women who were 15 years or older in 1960, asking them what they most remembered about the time. By far the most common response was a simple notation of the two famous women named Michiko. The surveys did not reveal how the women interpreted the two women or the differences between them. We do know that reporting in both cases emphasized the maiden’s purity, her freedom from the dirtiness of politics, and her ability to inspire the “people” to unify for the common good. We see her sexuality contained in marriage and leading to her ultimate goal, motherhood.

Michiko as Princess Homemaker and Fashion Icon

In Princess Michiko’s case, of course, she did become a mother. Her maternal status shifted her narrative in important ways, making her more firmly the model of love-marriage and the postwar family in the 1960s, the era of high-speed growth.

She gave birth to her first son, Naruhito, the current emperor of Japan, in February 1960. She famously departed from royal tradition by choosing to raise her son herself, including breast feeding him. Her notes to the nurses taking care of him when she was on royal trips with her husband were later collected, published, and known as “The Naruhito Constitution.” Author Ben Hills surmises that Japanese were intrigued with “the idea of a royal for the first time actually grappling with the same child-raising issues that they had to cope with...”¹⁴

In her fascinating new study of Japanese women’s magazines, Ochanomizu University sociologist Sakamoto Kazue analyzes the extensive coverage of Michiko and the royal family in women’s magazines in the 1960s.¹⁵ She observes how the focus shifts when Michiko becomes a mother. Rather than describing her intelligence or suitability for royal life, as was the case in 1959, magazines like *Shufu no Tomo* turned to praising her skill as a mother. Pictures of the royal family frame Michiko, as the mother, at the center of her family. She is rarely photographed alone.

Descriptions of the royal family emphasize a gendered-division of responsibilities. Akihito works at his public duties, happy that he can entrust parenting to his wife; Michiko is discussed completely in terms of her domestic duties—childrearing and even housekeeping. The royal couple—the husband who concentrates on work and his “professional housewife”

¹⁴ Ben Hills, *Princess Masako: Prisoner of the Chrysanthemum Throne* (New York: Jeremy P. Tarcher/Penguin, 2006).

¹⁵ Sakamoto Kazue, *Josei zasshi to fasshon no rekishi shakaigaku: bijuaru fasshon-shi no seiritsu* [A Historical Sociological Approach to Women’s Magazines and Fashion: The Formation of Visual Fashion History] (Tokyo: Shin’yōsha, 2019). See chapter five on representations of Michiko in postwar magazines.

who devotes herself to their children—epitomize the “My Home” ideology of the affluent sixties. Details of Michiko’s homelife made the princess seem like an ordinary housewife, and at the same time, could make the ordinary housewife feel more glamorous and important herself. After all, she was engaged in much the same domestic duties as the princess.

Reports of Michiko enjoying cooking for her family and devoted to raising her children make the royal family look like the perfect middle-class family. Sakamoto finds that there is almost no reporting of Michiko’s troubles in the royal family during this period, though we have since learned about her experience of bullying. Nor are there reports of her work outside of childrearing.

Sakamoto does notice attention to Prince Michiko’s fashion sense, which departs somewhat from reporting on royal beauty in the past. Photo captions describe what she wears in detail. Michiko shows that one also becomes a princess by wearing fashionable clothing. Several current books look back nostalgically at Michiko’s wardrobe.¹⁶ As a role model, Princess Michiko makes the professional housewife an elegant figure.

Who does Michiko, as pictured here, remind you of? [Here, I show a color photograph of Crown Princess Michiko in formal daywear holding the hand of her young son, Prince Naruhito; it is taken around 1964. Next, I show a 1961 photograph of First Lady Jacqueline Kennedy in similar attire on her June trip to Paris. The slide also shows the famous photo of John Kennedy, Jr. as a boy saluting his slain father at the state funeral, 1963.]

When I show this photo of Michiko and her son in the U.S., people often respond that, “She looks like Jackie.”¹⁷ Perhaps here the photographer intends to frame Michiko and her son in ways that recall Jackie Kennedy and her boy. I don’t have an exact date for this Michiko photo, but I assume it is taken around 1964, which means after the assassination of President Kennedy. Wearing a similar style to Jackie’s and being photographed holding hands with her own little boy connects Michiko to a global story imbued with admiration and affection. In a sense, the elegant princess here stands for an affluent Japan thriving in the economic-growth era of the “Golden Sixties” and on par with the U.S.

The Heisei Emperor and Empress in Public Roles

Moving up to the recent years of the Heisei era, we find numerous photos of the emperor and empress as partners. Akihito and Michiko are depicted as literally getting close to their people, especially in photos that document their sensitive response to survivors of natural

¹⁶ For two examples of publications that celebrate Michiko’s style, see Futaba-sha, ed., *Michiko-sama go-yōsō no kagayaki* [The Radiance of Michiko-sama’s Western-Style Attire] (2017) and Bessatsu Takarajima, ed., *Michiko-sama no 60 nen kōshitsu sutairu zenshi: Suteki na yosooi kenzenban* [The Complete History of Michiko-sama’s 60 Years of Imperial Family Style: Lovely Attire, the Full Version] (2018).

¹⁷ Stella Bruzzi analyzes the former First Lady’s iconic clothing, in particular the suit that she wore on the day of the assassination, as a “nostalgic trigger to memories of trauma and collective loss.” See “The Pink Suit,” Chapter 17 in Stella Bruzzi and Pamela Church Gibson, eds., *Fashion Cultures Revisited: Theories, Explorations and Analysis* (New York: Routledge, 2013).

disasters. News reports in the wake of the March 2011 tragedies, for example, depicted the elderly couple kneeling on the floor in a disaster shelter to talk on an equal level with survivors.

Since my princess research concentrated on the 1950s, I am not very familiar with Michiko's life in recent decades. But I have been struck when watching news footage of the couple this spring by how closely Akihito and Michiko walk together, as though holding fast to their private bond.

Michiko also appears to be a silent partner in her husband's attempts to atone for Japan's wartime aggression. We see this in photos of the couple taken, for example, on their visit to Okinawa in 2018.¹⁸

Abdication and the Future of the Imperial Institution

As the couple prepared to retire from public life, many celebrated their long marriage. I saw tables set up in bookstores with lots of books featuring the couple or Michiko alone on their covers. I also saw ads on the trains for weekly magazines featuring gossip about the royal family, especially its younger members. Some guess where Michiko may stand on one intrigue or another. But Michiko and Akihito present an air of calm determination and enduring companionship.

What lies ahead for Japan's royal institution?

The succession ceremony on May 1 turned attention once again to the issue of gender inequity. Only adult men in the royal family were allowed to attend a key succession rite at the imperial palace.¹⁹ And of course, there remains the question about female succession to the throne. Such restrictions are widely reported in the foreign and domestic press. These gender inequities in the royal institution recall Japan's poor ranking in the 2018 Global Gender Gap Report—"a miserable 110 out of 149," as sociologist Kazuo Yamaguchi describes the ranking.²⁰ Year after year, Japan ranks at the bottom of the most developed nations. So, when we talk about princesses and the royal family in Japan, we inevitably come back to Japan's strong association in the global imagination with "the problem of gender inequity." It is like we are still back in the *Time* magazine world of 1960.

¹⁸ "Emperor, empress visit Okinawa to commemorate war victims." Kyodo News. 27 March 2018. Accessed 27 May 2019. <https://english.kyodonews.net/news/2018/03/77f2f79f748d-emperor-empress-visit-okinawa-to-commemorate-war-victims.html>

¹⁹ "Female Imperial family members to be barred from key succession rite in line with Japanese law." *The Japan Times*. 17 January 2019. Accessed 30 May 2019. <https://www.japantimes.co.jp/news/2019/01/17/national/female-imperial-family-members-barred-key-succession-rite-line-japanese-law/#.XO8liogzYuU>

²⁰ Yamaguchi points to the "large gender wage gap" wrought by the large number of women laboring as "non-regular workers" as one of the primary reasons for this problem. Kazuo Yamaguchi, "Japan's Gender Gap." *Finance & Development* Vol. 56, No. 1 (March 2019). Accessed 27 May 2019. <https://www.imf.org/external/pubs/ft/fandd/2019/03/gender-equality-in-japan-yamaguchi.htm>

The 2018 Global Gender Gap Report is published on the World Economic Forum website. Accessed 20 April 2019. <https://www.weforum.org/reports/the-global-gender-gap-report-2018>

Thinking of the long-term future of the royal family, we might ask how useful gender equity in the imperial institution might be. Monarchies are, after all, anachronisms—a relic of another era. They embody inequality, race privilege, and compulsory heterosexuality, and it's hard to imagine a romantic story that could really change that.²¹

Nevertheless, princess tales continue to enthrall because they always put women at the center, and they make it seem as if change is within an individual's power—a woman of good character can always win the day in a princess tale. This may explain the wave of nostalgia for the Heisei couple.

Nostalgia for the Tennis Court Romance

The nostalgia for their princess story—their tennis court romance—points to the hope their love-marriage embodied in 1959. They made people believe in the future, hope that things *could* change for the better, and that romantic love and marriage could go together. A princess could make a difference. What symbolizes the future now and what kind of emotional bond will make change happen?

Michiko was not born a princess, but she became one. Reportage in the 1960s on her transformation into the elegant “professional housewife princess” deflected attention away from the forces shaping her, and the countless housewives who took her as their role model. Rather, reportage praised her skill as a wife and mother as the embrace of a feminine mission that would strengthen the home and Japan's democracy. Feminist philosophers like Simone de Beauvoir, however, brought critical attention back to the social construction of gender norms, making us ask how one becomes a woman. We turn to Julia Bullock to learn how Japanese have interpreted this famous French philosopher.

Acknowledgements: I thank Kumi Yoshihara, Project Research Fellow, IGS, for expertly coordinating the logistics and publicity for this symposium. I thank Professors Julia Bullock, Aya Kitamura, and Gaye Rowley for their stimulating papers and thank, too, Professor Fumie Ohashi for facilitating the discussion.

²¹ Arguing that a woman on the throne does not guarantee greater opportunities for women, Takashi Fujitani notes how “Queen Victoria reigned without apparent contradiction over an expansive empire that denied women the vote” and saw the rise of the “cult of domesticity.” “Imperial Succession Panic: The Politics of Gender, Blood and Race in Contemporary Japan” in Amy McCreedy Thernstrom, ed., *Japanese Women: Lineage and Legacies* (Washington, D.C.: Woodrow Wilson International Center for Scholars, 2005), p. 32.



Keynote Speech

Beauvoir in Japan

Tracing the Impact of *The Second Sex* on Japanese Women

Julia C. Bullock

Emory University

.....
Julia Bullock is Associate Professor of Japanese Studies and Chair of the Department of Russian and East Asian Languages and Cultures (REALC) at Emory University in Atlanta, Georgia. She is the author of *The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973* (University of Hawai'i Press, 2010) and *Coeds Ruining the Nation: Women, Education, and Social Change in Postwar Japanese Media* (University of Michigan Press, 2019). With Ayako Kano and James Welker, she also edited the essay collection *Rethinking Japanese Feminisms* (University of Hawai'i Press, 2017).

Abstract: Simone de Beauvoir's monumental work of feminist philosophy, *The Second Sex*, was translated into Japanese in 1953, just four short years after its first appearance in French. The timing of this translation, *Daini no sei*, was fortuitous—Japan had just emerged from the shadow of the Allied Occupation and was struggling with the legacy of its postwar reforms. These reforms offered Japanese women an unprecedented array of rights and opportunities, but those who sought to exercise such rights still had to confront conservative norms that expected them to channel their ambitions into “careers” as wives and mothers. To many who sought an unconventional life-course, Beauvoir's vision of “freedom” through financial independence and professional projects offered an enticing alternative to the prewar “good wife, wise mother” model of femininity—even if, or perhaps because, this vision was difficult to attain in actuality. In this presentation, I explore the way Japanese women in the 1950s and 1960s understood the value of Beauvoir's theories for their own life and work, responses that ranged from homage and appropriation to parody and critique.

Introduction

I'll be talking to you today about Japanese translation and reception of the work of a French feminist philosopher named Simone de Beauvoir. I imagine some of you may have heard of her, but if not, I'll give a brief introduction to her thought in a moment.

I'd like to start my story by taking you back to the evening of September 18, 1966. Over sixty photojournalists are gathered on the tarmac at Haneda Airport in the midst of a typhoon to capture the historic arrival of two French “celebrities”—the philosophers Simone de Beauvoir and Jean-Paul Sartre. They are confronted with crowds normally reserved for rock stars like the Beatles.

Beauvoir is mobbed by throngs of young women calling her name, reaching out to shake her hand, touch her arm, or at the very least get a glimpse of their philosopher heroine and her

famous companion.¹ So often cast as the significant Other of Sartre, Beauvoir likely did not realize the extent of her own popularity in Japan, or that she had arrived on the eve of an explosion of “second-wave” feminist discourse that came to be known as *ūman ribu* (“women’s lib”).

Beauvoir *was* internationally famous at this time, but her popularity in Japan requires a bit of explanation. The 1960s was a relatively conservative time, socially speaking. Women were exhorted by their parents and teachers—and of course the Japanese government—to grow up to become a version of “good wives and wise mothers.” This was an early twentieth century model of Japanese femininity that stressed dependence on husbands and fathers and service to the family and state in the domestic sphere. Beauvoir, and her philosophy, were completely antithetical to these values. She refused marriage and motherhood, and advocated for women’s financial independence from men. In retrospect, it’s a wonder they even let her in the country.

But despite this apparent disconnect, Beauvoir *was* phenomenally popular among Japanese women at this time. We’ll discuss the reasons why in a moment, but first I’ll start by telling you a little bit about Beauvoir herself. Then give you a bit of historical context about the Japan that welcomed her in 1966. Next, I’ll talk about what Japanese women did and did not find useful about Beauvoir’s ideas. We’ll discuss how her texts were translated into Japanese. I’ll conclude with some thoughts about the enduring legacy of her philosophy for Japanese women and the feminist movement in Japan.

Who was Simone de Beauvoir?

Beauvoir was born in 1908 in Paris, into a middle-class French Catholic family. Her father worked for a law office. Her mother, like most middle-class French Catholic ladies at the time, was a housewife. Her mother was also very religious, and the family hoped that Simone and her sister Helene would grow up to be much like her mother—a middle-class housewife who stayed home to bear and raise children while their father worked outside the home to support them. However, the family’s fortunes declined in World War I, and her parents bitterly resigned themselves to the fact that their daughters would have to work to support themselves, as their parents could not afford the dowry that was expected of young brides at the time. So—if you can believe this—we owe the education of one of the greatest feminist philosophers of all time to the patriarchal institution of the dowry.

Simone was initially educated at a convent school, but went on to higher education at the Sorbonne, a prestigious French university. There she studied philosophy and trained to be a schoolteacher. She was among the first generation of young French women to receive a university education alongside men. Prior to this, girls like her were self-taught or received private tutoring at home.

¹ Asabuki Tomiko, *Sarutoru, Bovowaru to no 28-nichikan—Nihon* (Tokyo: Dōhōsha Shuppan, 1995), pp.27-31.

As scholar of French feminist theory, Toril Moi notes:

Beauvoir belongs to the generation of intellectual women who came of age in the 1920s and 1930s....At least in relation to their education and intellectual careers, these women believed that they were being treated as equals in an egalitarian system. On the whole, they tended not to be conscious of the social significance of their own femaleness....By the time they reached middle age, however, the weight of their experience spurred many of them to wonder about the significance of being female in a male-dominated society. It was only in 1946, if we are to believe her memoirs, that Beauvoir realized that to be an educated woman is not, after all, quite the same thing as to be an educated man. With a rare sense of moral and political integrity she faced the consequences of that insight: the very moment she realized that she was an intellectual *woman*, she started to write *The Second Sex*.²

Beauvoir is probably best known for this lengthy philosophical treatise, *The Second Sex*. It draws on a wealth of evidence from history, literature, mythology, biology, philosophy, anthropology, and many other fields to demonstrate that human societies from antiquity have treated woman as man's Other. This means that historically they have been defined according to masculine standards, and found lacking when they do not meet these standards. Because of this they are stereotyped as inferior to men, and are therefore oppressed by societal institutions such as marriage that seek to use women for their reproductive potential while depriving them of their natural right to self-determination.

It was in this text that Beauvoir famously argued that "One is not born, but becomes, a woman." By this, she meant that from birth women are taught to conform to feminine stereotypes and are punished with disapproval when they do not conform. Thus, "femininity" is not an innate quality, but one that is acquired through a process of training over one's lifetime. To gain their freedom, women must liberate themselves by understanding these stereotypes as false and constructed rather than natural. In other words, Beauvoir's arguments created the foundation for the contemporary distinction between biological sex and socially constructed gender norms.

Beauvoir also argued that to be truly free, women should be able to support themselves financially, rather than depending on men for their livelihoods through institutions such as marriage. Beauvoir herself never married. She was famous for her affairs with both men and women—though this latter detail wasn't publicly known in the 1960s. More importantly, she was known for her productive career as a writer and teacher, and eventually as what today we would consider to be a feminist activist and theorist.

² Toril Moi, Simone de Beauvoir, *The Making of an Intellectual Woman*, 2nd ed. (Oxford UP, 2008), pp.23-24.

What did Japanese women see in her?

What did Japanese women see in her? To answer this question, we need to step back a bit, historically speaking. Let's go back to 1945.

World War II is over, and Japan is occupied by Allied forces. Led by the United States, this Occupation regime literally rewrites the legal framework of Japanese society. It produced a new Constitution in 1946, and a Civil Code based on it, that granted Japanese women an unprecedented array of new legal rights, including the right to vote and hold office, to choose their own spouse, and to equal opportunity in education.

And yet women found that attempting to exercise these rights brought them into conflict with persistently conservative societal and cultural norms regarding their proper "place" in society. In other words, postwar Japanese women were still struggling against the vestigial logic of the prewar household (*ie*) system that demanded feminine subordination to the family patriarch. This system was no longer legally enforceable in the postwar period due to Occupation-era constitutional revision, but it continued to exert itself in modified form on the level of cultural custom and attitudes regarding gender roles.³

These attitudes were increasingly reinforced by the economic realities of the postwar period. As Japan recovered from World War II and entered a period of economic expansion that accelerated throughout the 1960s, prosperity was increasingly based on a gendered division of labor. This meant that society sought to confine women to the domestic sphere, so as to enable men to devote themselves entirely to powering the engine of economic growth. Japanese women in the 1950s and 1960s thus struggled to reconcile the promise of postwar reform with the reality of postwar society—a struggle that would culminate in the women's liberation movement of the 1970s.⁴

This struggle was particularly acute for the first generation of young women who were educated in the new postwar system of coeducation. Prior to 1945, the Japanese educational system was sex-segregated, meaning that girls and boys were educated separately beyond the first year or two of elementary school. Boys were eligible for training leading up through university to professional careers, and girls attended girls' schools designed to train them for "careers" as "good wives and wise mothers." Thanks to the postwar reforms, girls who attended school from the late 1940s on were allowed to compete for entrance to prestigious universities on par with men. As you may recall, Beauvoir was in something of the same situation when she was a young woman. So Japanese girls who were struggling to capitalize on postwar promises of equality could relate—not only to Beauvoir's arguments about

³ For a concise description of the various postwar legal changes in women's status, and the persistent gap between *de jure* and *de facto* "equality" for women, see Kiyoko Kinjo, "Legal Challenges to the Status Quo," in Kumiko Fujimura-Fanselow and Atsuko Kameda, *Japanese Women: New Feminist Perspectives on the Past, Present, and Future* (New York: The Feminist Press, 1995), pp.353-363.

⁴ For a thorough account of the historical, social, and cultural trends that shaped postwar models of femininity in the age of high economic growth, see Chapter 1 of Julia C. Bullock, *The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973* (Honolulu, HI: University of Hawai'i Press, 2010).

women's need for liberty and financial independence, but also to her lived experience as a pioneer in equal education for women.

The Second Sex was published in French in 1949. Just four years later, it was translated into Japanese as *Daini no sei*, a literal rendering of the original French title. The timing ensured it an enthusiastic reception among Japanese readers, and particularly women. 1953 was just one year after the end of the Occupation. Japan had just regained its sovereignty. Two years after that, in 1955, the conservative parties merged to form the Liberal Democratic Party (LDP). Soon its conservative politicians began trying to roll back the Occupation-era reforms. This included promoting so-called traditional roles such as the “good wife, wise mother” norm of femininity. Women pushed back against this conservative trend, finding inspiration in Beauvoir's arguments for women's liberation.

By 1961, the first volume of Beauvoir's memoirs was published in Japanese as *Musume jidai* (“Girlhood”). This part covers her life from birth to her early twenties. It details events such as her struggles to cope with societal demands that she act like a girl when (as her father used to say) she had the mind of a man. It covers her early friendships and romantic attachments, including her fateful meeting with Jean-Paul Sartre, who would be a lifelong companion if not always her lover. She also describes her philosophical education; her loss of faith in God and decision that she was an atheist; and her search for her life's purpose as a writer and scholar. With the possible exception of the religious struggle, the rest of this story was highly relatable to young Japanese women who were coming of age in a society that was increasingly inhospitable to their aspirations—particularly those goals that did not involve becoming old-school “good wives and wise mothers.” I would argue that Beauvoir's memoirs, and especially this first volume, were probably more influential on this generation of young Japanese women than her famous essay *The Second Sex*, because the text spoke to them about problems they could understand as critical to their own journeys to adulthood.

One aspect of Beauvoir's public persona that contributed immeasurably to her popularity as a feminist icon was her relationship with Sartre. This was depicted in the Japanese media and elsewhere as an ideal union based on total equality, freedom, and mutual respect. Uemura Kuniko neatly summarizes what she calls the “myth of Sartre and Beauvoir” that was cherished particularly by young women of the time as follows:

The relationship between Sartre and Beauvoir was an object of longing to us in the 1960s. According to the rumors, those two famous lovers lived in separate rooms in the same hotel, worked in cafes, ate in restaurants, and critiqued each others' unpublished manuscripts. We heard that Beauvoir was totally liberated from housework, and

balanced work with love. To every Japanese woman who spent her youth during the early 1960s, it seemed like the ideal relationship.⁵

Sartre and Beauvoir evidently collaborated in cultivating such perceptions. During a 1966 interview with the Japanese newspaper *Asahi*, the two present themselves in a rather romantic light as an indivisible “we,” constantly in agreement on everything, working side-by-side at adjoining desks, sharing responsibility for all housework and other chores.⁶ This somewhat fanciful account of their “union,” which the two explicitly liken to a marriage, contrasts markedly with most other accounts of their relationship, which hold that the two never actually lived together, that she did all the cooking when he came over, and that by this time they had long since stopped having sex—at least with each other, since they had numerous affairs with other people.⁷ In fact, the open nature of Beauvoir’s relationship with Sartre was well known because of her frank portrayal of her own heterosexual affairs (and his) in her memoirs, and this seems to have been part of the appeal for Japanese women. Encouraged by parents, teachers, and the mass media of the 1960s to desire romantic love, but to channel those impulses into marriage and motherhood, the notion of openly pursuing love and sex outside of restrictive marriage conventions seems to have appealed to Japanese women as liberating.⁸

As an example of Beauvoir’s influence on women’s cultural production at this time, consider the case of novelist Kurahashi Yumiko. Kurahashi was particularly inspired by Beauvoir’s rejection of marriage and motherhood and her arguments for women’s financial independence. We can see the imprint of these ideas on a number of Kurahashi’s novels, essays and short stories.

An early essay, titled “My Third Sex,” explicitly draws on Beauvoir’s arguments about women’s “otherness” and need for independence. Kurahashi uses these arguments to craft her own formula for liberation based on women’s artistic production. Her controversial first novel *Kurai Tabi* (*Blue Journey*) can also be read as an homage to (or parody of) the open relationship between Sartre and Beauvoir. In this story, the protagonist and her lover pursue sexual liaisons with any number of other partners with impunity, on the condition that they tell each other all about it, as Sartre and Beauvoir evidently did in their letters to one another.

Furthermore, many of Kurahashi’s short stories lampoon the institution of marriage, portraying it as a rather ridiculous construct that bears no relationship to sex or love.

⁵ Uemura Kuniko, “Bovowaru no ren’ ai jinsei: ‘Gyōgi no warui musume’ kara ‘risō no tsuma’ e,” *Joseigaku kenkyū* 14 (March 2007): p.27.

⁶ Reprinted in Asabuki, pp.88-92.

⁷ See for example Hazel Rowley, *Tête-à-tête: Simone de Beauvoir and Jean-Paul Sartre* (NY: HarperCollins Publishers, 2005).

⁸ For more on the connection between romantic love ideology and “purity education” (i.e. exhortations to remain abstinent until marriage), see Sonia Ryang, *Love in Modern Japan: Its Estrangement from Self, Sex, and Society* (London/NY: Routledge, 2006).

Kurahashi heroines typically meet their husbands' sexual advances with the challenge "What would be the point?", or else with a firm reminder that sexual service was not part of the contract they signed. In fact, marriage in such early Kurahashi stories is more often than not governed by the existence of an actual contract that provides for the wife to be "kept" by her husband while absolving her of most of the typical "duties" of a housewife. One such heroine claims that the terms of her contract with her husband in no way obligate her to cook, clean house, eat or sleep with her husband, or have his children; she is merely required to "support" him. Although what this support entails remains unspecified in the text, we are assured that it involves "a lot of work."⁹

While such texts contain moments of playful parody, they most often end on a dark note of cynicism. For example, at the conclusion of Kurahashi's story "Kekkon" (Marriage, 1965), the contract that should have protected the protagonist, "L," from the drudgery of conventional matrimony has now apparently been rewritten in conformity with the gendered division of labor commonly associated with middle-class households of the 1960s. L is now pregnant and confined to the home, and devotes herself to the daily production of elaborate meals that her working husband will never be home long enough to eat. While the story begins with a subversion of the structure of marriage from within, it concludes with a return to "normalcy" that is explicitly coded within the text as a most unhappy ending. The emptiness and futility of her new arrangement seem to have driven L mad, and she even begs K, the masculine half of herself that she has had to abandon in order to fulfill her domestic destiny, to kill her. The tendency of such stories to end with L's failure to subvert the structure of conventional marriage underscores two primary themes that link the author's early works—a subtle message of protest at the deadly mediocrity of so many Japanese women's lives, and a lament that the pressures of bourgeois marriage ideology are so difficult to resist.

Another writer whose personal and professional life changed dramatically as a result of her encounter with Beauvoir was Asabuki Tomiko.

Asabuki was born in Tokyo in 1917,¹⁰ as the youngest of five children and only daughter of a wealthy family connected to the Mitsui industrial empire. Her father Tsunekichi, a stylish and socially adept man of the world, had studied in England as a youth and continued to observe European-style social graces at home. He even hired an English governess for the children to ensure they would be fluent in this language from an early age. It is perhaps no surprise, then, that Asabuki (along with her brothers) would spend a significant portion of her adult life studying and traveling abroad. After withdrawing from the Gakushūin at the age of fifteen due to ill health, she was briefly married to a young man of similar background. She

⁹ Kurahashi Yumiko, "Symbiosis" (Kyōsei), in *Kurahashi Yumiko zensakuhin* v.6 (Tokyo: Shinchōsha, 1976), p.93.

¹⁰ Biographical information in this section is taken from the volume of her memoirs entitled *Watashi no Tokyo monogatari: Yomigaeru hibi—waga ie no arubamu kara* (Tokyo: Bunka Shuppankyoku, 1998).

divorced her husband at eighteen and enrolled in an all-girls' prep academy outside of Paris. After mastering the French language, she enrolled at the Sorbonne, where she remained until she and her brothers were recalled to Japan in 1939 in anticipation of the outbreak of war on the continent.

After suffering through years of wartime devastation and postwar privation in the Tokyo area, which sapped her family's considerable wealth, Asabuki returned to France in 1950 and enrolled in a dressmaking academy. She supported herself through various odd jobs as a fashion correspondent, translator, interpreter, consultant and all-around "fixer" for Japanese business and government interests in Paris. For example, here in this photo we see her promoting Japanese films at the Cannes film festival, on behalf of the Japanese government. In the course of this work as liaison between Japan and France, she developed an impressive array of personal contacts that ultimately gained her entrance to the worlds of Parisian high fashion, arts and literature. This personal journey brought her into direct contact with the "family" of intellectuals that surrounded Beauvoir and Sartre, and she soon became close to the philosopher-couple, eventually acting as their interpreter and tour guide when they visited Japan in 1966.

Asabuki was also the translator of Beauvoir's memoirs, including the first volume that had such a profound impact on young Japanese women when published in 1961. Like Beauvoir, Asabuki was born into an upper-class society known for protecting its daughters from the corrupting influences of the world outside the confines of the family. Like Beauvoir, she also went on to flout the conventions of her class by establishing an independent identity for herself as a writer and public figure who espoused liberation for women, among other progressive causes. Born less than a decade apart, both women survived years of social and political upheaval surrounding World War II, and both were forced to make their own way in the world after their family fortunes were ruined.¹¹ This financial and intellectual independence led them to question the "common sense" of their own societies and find common cause not just with other women, but with members of different classes, nationalities, and races. Thus, it is hardly surprising that Asabuki found Beauvoir's memoirs compelling enough to want to translate them into her native language. It is also not surprising that, once these two women met, they became fast friends. Asabuki even credits Beauvoir (and Sartre) for inspiring her to embark upon her own first attempt at life-writing, the autobiographical novel *Ai no mukōgawa* [The Other Side of Love] (1983). She would follow this novel with a sequel, and with multiple, less fictionalized volumes of her own memoirs, in addition to travel writing and cultural criticism that established her as an authority on French culture and a taste-maker in her native country.

¹¹ Beauvoir experienced the decline of her family's wealth due to generations of financial mismanagement by male relatives; Asabuki's family fortune was intact until the Occupation period, when increasingly stringent estate taxes and the freezing of personal savings forced the family to gradually sell off their possessions to pay their bills.

Criticism of Beauvoir

While writers like Uemura, Kurahashi and Asabuki certainly appreciated Beauvoir's arguments for liberation from the traditional family structure, many others found it difficult to entirely renounce conventional feminine norms. As confining as the institution of marriage felt to many women, motherhood was still central to their sense of feminine identity. And the notion of bearing children outside the structure of marriage was still not socially acceptable. Also troubling to many women was what they felt to be Beauvoir's "male-identified" system of value. In other words, they understood her to denigrate femininity in favor of adopting "masculine" attitudes and ways of life. Beginning in the late 1960s, the Japanese "women's lib" movement increasingly based itself on a call to create a society in which women want to bear children. Correspondingly, many had become increasingly skeptical of Beauvoir's value for Japanese feminism.

A 1969 essay by Takai Kuniko¹² provides a quintessential example of this turn away from Beauvoir. In the section of her essay devoted to *The Second Sex*, Takai characterizes Beauvoir's thought as follows:

[For Beauvoir] corporeal conditions are not [a matter of] immovable fate, but simply one [kind of] situation [*jōkyō*], and humans exist by continually creating themselves through choosing freely. According to existentialist philosophy, it is impossible for anything to surpass human beings. Even nature is beneath them.¹³

According to this understanding of Beauvoir, then, failure to transcend one's biological limitations through denial of motherhood or other feminine experiences meant one's choices were in "bad faith." Takai also claims that Beauvoir "not only does not value the maintenance of human life (childbirth) but says that this is a humiliation [*kutsujoku*] and reduces people to animals." This seems to form the basis for her conclusion that Beauvoir "denies" motherhood and argues that women resign themselves to immanence and Otherness when they become mothers.¹⁴ Unfortunately, this perception of Beauvoir as "male-identified" persisted into the mid-1990s,¹⁵ even after much scholarly work by Japanese feminists had been devoted to debunking this interpretation of Beauvoir.

¹² Takai Kuniko, "Beauvoir ni okeru tashasei no mondai" *Meiji Gakuin Ronsō* no. 146 (Feb 1969): 127-156. The author is listed as an "assistant" at this school, presumably a graduate student assisting one of the professors at the university.

¹³ *Ibid.*, 133.

¹⁴ *Ibid.*, 134.

¹⁵ See for example a three-part series of articles by fiction writer Saegusa Kazuko published in the journal *Yuriika* ("Ika ni shite josei no tetsugaku wa kanō ka," parts 4-6, published in the August through October 1995 issues), as well as Shimada Akiko's textbook on feminism for characterizations of Beauvoir as "denying" pregnancy, childbirth, childrearing and marriage as hallmarks of femininity that render woman as man's Other: *Nihon no feminizumu: Genryū to shite no Akiko, Raichō, Kikue, Kanoko* [Japanese Feminism: Its Orifgines in Akiko, Raichō, Kikue, Kanoko] (Tokyo: Hokuju shuppan, 1996).

Lost (and Found) in Translation

Beauvoir's death in 1986 prompted a re-examination of her legacy for feminism worldwide. In Japan, this also resulted in the discovery of serious problems with the first Japanese translation of *The Second Sex*. The text was initially translated by a Japanese male expert in French literature named Ikushima Ryōichi in 1953. By the 1980s, scholars found that Ikushima had rearranged large portions of the essay, thus obscuring the logical relationships between her ideas. They also noted problematic translations of key terms that gave the erroneous impression that Beauvoir was anti-female—for example, by using language for female anatomy and biological processes that had decidedly negative connotations.

Sometimes these mistranslations actually reinforced stereotypes of femininity that Beauvoir was trying to critique. For example, here Beauvoir describes housework as a task that is “implied in women's femininity”—meaning that society assumes women should do it because of cultural presumptions that housework is “women's work.” But Ikushima translates this as “responsibilities that come from the fact that she is a woman” (*josei de aru koto*), suggesting that this type of work is connected to the biological fact of being a woman, not the cultural norms associated with femininity (*onnarashisa*).

By 1997, a committee of scholars¹⁶ had collectively produced a second, “definitive” Japanese translation. This version preserved the sequencing of material in the source text, and adopted more neutral terminology for female biological processes. It also employed clearer and more consistent translations for philosophical terms, thus clarifying Beauvoir's claims about femininity and motherhood.¹⁷ This retranslation of Beauvoir was motivated by shifts in Japanese feminist theoretical discourse such as the rise of women's studies as an academic discipline in the 1980s and the introduction of queer theory in the 1990s. With the publication of this second translation, a new generation of Japanese feminists (re-)discovered Beauvoir's thought, finding renewed relevance in her insights even for twenty-first-century readers.

These efforts to reclaim *The Second Sex* for Japanese readers seem to have borne fruit, given that more recent scholarship on Beauvoir reflects the influence of both the “definitive” translation and the success of its translators' efforts to promote the text. Kanai Yoshiko, who wrote disparagingly of Beauvoir's “male-identified” strand of philosophy in her 1989 book

¹⁶ This group formed exclusively for the purpose of re-reading Beauvoir in the original French, as suggested by their adoption of the name *Daini no Sei Genbun de Yominaosu Kai* [Committee to Re-read *The Second Sex* in the Original]. Ten members of this committee collaborated to translate volume one of the original text; eleven of its members produced volume two. This resulted in publication of *Daini no sei: Ketteiban* (The Second Sex: Definitive Edition), referenced above.

¹⁷ Inoue Takako and Kimura Nobuko, “Yakusha atogaki,” *Ketteiban: Daini no sei v. 1: Jijitsu to shinwa* (Tokyo: Shinchōsha, 1997), 374; Katō Yasuko and Nakajima Kimiko, “Yakusha atogaki,” *Ketteiban: Daini no sei v. 2: Taiken* (Tokyo: Shinchōsha, 1997), p.647.

Postmodern Feminism,¹⁸ later retracted these claims in a 2002 article that profiled *The Second Sex* as one of fifty “feminist classics.”¹⁹

Likewise, in a 2005 essay²⁰ on Beauvoir’s stance toward motherhood published in the proceedings of a women’s university journal, Satō Hiroko notes Beauvoir’s understanding of the difficulties of balancing motherhood with projects outside the home:

Beauvoir did not become a mother. However, she understood the situation [*jōkyō*] in which mothers are placed and the difficulties [they experience], and thought about ways they could extract themselves [from these difficulties]....From that point, becoming a mother was no longer women’s destiny, and it became possible for the first time for them to choose a number of lifestyles at various stages of their lives.²¹

Significantly, Satō’s Works Cited section lists many articles penned by members of the retranslation committee in order to reclaim Beauvoir’s significance for contemporary feminism. This indicates the impact of the translators’ efforts in shaping Japanese readers’ impression of her work.

On the other hand, the translators’ activist zeal in “reclaiming” Beauvoir’s thought for Japanese feminism raises important questions for me about how this goal may have shaped their own interpretation of *The Second Sex* in ways that Beauvoir might not have envisioned or intended.

For example, in their Afterword to the 1997 translation, Inoue Takako and Kimura Nobuko note that the Ikushima translation frequently creates the false impression that Beauvoir is criticizing women in a categorical sense. This is because he fails to distinguish between Beauvoir’s use of the term “femininity” to describe actual women and her use of this term to reference the stereotype of the “eternal feminine.” They argue that her intention is to criticize such stereotypes, not actual women. Thus, they chose to differentiate between these two cases in their translation of *The Second Sex*, referring to the feminine stereotype with the term *onnarashisa* (being *like* a woman) and to actual feminine experience as *onna de aru koto* (the state of being a woman).

However, as the translators themselves note, Beauvoir’s text itself fails to distinguish between these two concepts.²² While linguistic distinctions between biological sex and cultural constructions of gender had become commonplace by the turn of the millennium, they were not widely understood or denoted linguistically at the time Beauvoir wrote her

¹⁸ Kanai Yoshiko, *Posutomodan Feminizumu* (Tokyo: Keisō shobō, 1989).

¹⁹ Kanai Yoshiko, “Simone de Beauvoir: *Daini no sei*,” pp.60-69 in *Feminizumu no meicho* 50, eds. Ehara Yumiko, Kanai Yoshiko (Tokyo: Heibonsha, 2002).

²⁰ Satō Hiroko, “Bōvowārū Daini no sei to <bosei>,” *Kawamura Gakuen Joshi Daigaku joseigaku nenpō*, 3 (2005):43-50.

²¹ *Ibid.*, 44.

²² Inoue and Kimura, “Yakusha atogaki,” *Ketteiban: Dai ni no sei v. I: Jijitsu to shinwa*, p.372.

foundational feminist treatise. Furthermore, in some cases—such as the first few pages of her Introduction to Volume I of *The Second Sex*—Beauvoir seems to want to highlight the societal conflation between the stereotype and the reality of “femininity.” In fact, she begins her lengthy dissertation on femininity by asking seriously “What is a woman?” so as to underscore the very instability of the category itself. So while perhaps well-intended, the translators’ attempts to make distinctions between these two meanings of “femininity” in some cases may actually cut against the intention of Beauvoir’s inquiry.

Furthermore, the way they denote these distinctions in their translation may further obfuscate, rather than clarify, the degree to which Beauvoir articulated conceptual distinctions between sex and gender in her own writing. It is certainly true that *The Second Sex* helped to lay the theoretical groundwork for later linguistic distinctions between these two notions. The translators highlight this legacy as follows: “[Beauvoir’s notion of] sex [*sei*] as societally and culturally constructed is to be distinguished from biological sex [*sekkusu*], and today is expressed with the term ‘gender’ [*jendaa*].”²³ This remark seems to explain the translators’ tendency to gloss the character 性 (*sei*)—which in Japanese may connote either “sex” as a biological fact or “gender” as a cultural construction—with the term *sekkusu* (セックス, or “sex”) when they understand it as signifying biological sex.

But as noted above, this “clarification” may actually have created artificial distinctions where Beauvoir might have intended to preserve a kind of productive ambiguity—between “sex” as a biological fact and a cultural construct.²⁴ This also highlights inherent aspects of the Japanese language that pose challenges for the translator in rendering terms related to sex and gender. The term *sekkusu*, which the translators have chosen as a gloss meaning biological sex, exists in Japanese only as a counterpart to *jendaa* [ジェンダー, or “gender”]. Both of these terms are very recent loanwords derived from English, rather than the French language in which Beauvoir wrote her original text. Not only is this distinction anachronistic, but it also has the unfortunate and no doubt unintended consequence of reasserting the linguistic supremacy of English over French (among other languages). This is a historical legacy of the post-World War II Allied Occupation that has more to do with the politics of language in Japan than it does with feminism generally speaking, or with Beauvoir’s specific contributions to feminist theory.

²³ Ibid., p.371.

²⁴ In the original French, when Beauvoir uses words like *sexe* and *féminité*, there is often some ambiguity in the usage that makes it difficult to say clearly that in one case she means biological sex and in another culturally constructed gender. Beauvoir scholars argue quite a bit about this point. Ironically, I think if the translators had just kept it vague in the Japanese by exploiting the multiple meanings of 性 the translation would have been closer to the intention of the original text. However, I think they are translating in keeping with the current convention in feminist scholarship to make such distinctions, which was not the case at the time Beauvoir was writing.

Conclusion

The first Japanese translation of *The Second Sex* by Ikushima Ryōichi somehow managed to inspire many young women in the 1950s and early 1960s with its suggestion of femininity as a social construct rather than a biological given. This was in spite of significant problems with the translation that rendered some of her arguments opaque. However, these mistranslations also gave many readers the erroneous impression that Beauvoir denigrated femininity and motherhood. By the late 1960s, this notion of her work as “male-identified” struck activists in the incipient “women’s lib” movement as increasingly behind the times, and many began to turn away from her philosophy. It was only after Beauvoir’s death in 1986 that the worldwide reconsideration of her legacy for feminist theory prompted Japanese scholars to re-assess her work. Thanks in part to their 1997 retranslation of *The Second Sex*, Beauvoir is understood today in Japan as a pioneer whose thought laid the groundwork for many of the cornerstone concepts of contemporary feminist theory. But while the 1997 retranslation improved on the Ikushima version in many respects, the translators’ activist impulse to “clarify” Beauvoir’s thought may also have had unintended consequences—for example, by creating artificial distinctions where Beauvoir may have preferred to remain ambiguous and thus flattening out some of the philosophical complexity of the original text. Nevertheless, her inclusion in major reference works and histories of feminism in Japanese indicates that her position as a founding mother of feminist philosophy remains secure.



Commentary

“The Japanese Woman” behind the Princess and the Philosopher

Aya Kitamura

Tsuda University

.....
Aya Kitamura is Lecturer at Tsuda University. She specializes in sociology, gender studies and Japanese studies, and conducts ethnography in Tokyo, Honolulu, Hong Kong and Singapore. Her publications include: *Nihon josei wa doko ni irunoka* (Locating Japanese Women: The Politics of Image and Identities), Tokyo: Keiso Shobō, 2009, “English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan,” *Gender and Language* 10 (1), pp.1-20, 2016, “Hesitant Madams in a Global City: Japanese Expat Wives and their Global Householding in Hong Kong,” *International Journal of Japanese Sociology* 25 (1), pp. 58-69, 2016, and “Gender, Representation and Identity: The Multifold Politics of Japanese Woman Imagery” in Jieyu Liu and Junko Yamashita eds., *Handbook of Gender in East Asia*, London: Routledge, pp.269-284, 2020. She is also a co-editor of *Gendai esunogurafi* (Contemporary Ethnography), Shin’yōsha, 2013.

Thank you, Jan and Julia, for the two fascinating presentations. For me, a sociologist who mainly does fieldwork and interviews, the intertextual methodologies you use are tremendously intriguing. The two papers, through very careful readings of a variety of texts, show how discursive construction affects the realities we live, especially when gender is the focal matter. Now I cannot help but wish that I were sitting in the audience, appreciating this inspiring research and curious to hear what the discussants have to say.

I know this is rather unconventional but let me introduce myself and my research by reflecting on some of my past misconduct as a researcher. I teach at Tsuda University, a women’s university, and I find lecturing on gender issues in all-woman classrooms to be a joy; I can always talk to my students woman-to-woman, not bothering to care how men would interpret or misinterpret what I say.

A few weeks ago, just before the 10-day Golden Week¹, I was speaking about the time when I met the Empress Michiko and Emperor Akihito—I was a recipient of a Japan-Hawaii scholarship that commemorates their honeymoon in Hawaii. I was talking about how thick the palace’s carpet was, how good the tea tasted, and how soft the Empress’s hand felt when I shook it; it was just an easy way to shake up the sleepy students right after their lunch.

Then I realized, while speaking, there could have been a *zainichi* student, someone of Korean, Chinese or Taiwanese background whose great grandparents, perhaps, migrated—or were forced to migrate—to imperial Japan during the colonial era. She couldn’t be enjoying

¹ To celebrate the ascension of the new emperor on May 1, 2019, the Japanese government approved a one-time change to the spring holiday known as Golden Week, extending it from one week to ten days (April 27 through May 6).

my silly story like the other students. My smile disappeared as I suddenly tensed up. How could I have been so insensitive? I hurriedly added how ambivalent I felt actually about the extended Golden Week as the underlying reason seemed to neglect the dark history of Japanese imperialism. I cannot forget my students' puzzled facial expressions. One moment Kitamura-sensei was so happily bragging, and the next, she turned serious and started to mumble with all those big words that obscured their understanding. Yes, teaching at a women's university is great and fun, but I should bear in my mind that those women students are not all from the same background.

I have embarrassed myself like this many times. Back in the early 2000s, I was studying in Hawaii as a graduate student. My research was on Japanese women living in Hawaii, and how they encountered and negotiated stereotypes regarding Japanese women. I wanted to interview as many Japanese women as possible, and my snowball sampling was going pretty well. One day, someone I had interviewed suggested that I contact Ms. X, to whom I sent a friendly email requesting her participation in my research. She wrote back, saying that she didn't think she was the right person for me to talk to. I wrote back to assure her there was no "right" or "wrong" person, any stories would be of great interest to me. Then Ms. X replied, rejecting me once again, "There are things people don't want to talk about in their lives, although it may be hard to imagine for a Todai student like you."

I was a doctoral student at the University of Tokyo at that time, a fact that she had learned from our mutual acquaintance. Again, I got all flustered. I had naively assumed that people would open up to me because I too was a Japanese woman living in Hawaii. I had had little doubt that we would share our experiences and feelings, Japanese woman to Japanese woman. Ms. X's email shattered this false assumption. We Japanese women are not the same. The category of the Japanese woman includes socioeconomic diversity along with racial, ethnic, and many other differences.

My research has since focused on how we *cannot* speak of "the Japanese woman"—I call it an impossible ethnography. Still, as I said, I sometimes catch myself deeply buried in this "Japanese woman" mystique—imagining that my classroom is filled with the same "Japanese women." This is a personal, as well as academic, struggle.

Obviously, I specialize in neither history nor literature, and thus am in no position to comment on Jan's and Julia's work from the perspective of an expert in their fields. Instead, please indulge me and allow me to share my thoughts drawing inspiration from Jan's and Julia's papers. Specifically, I would like to focus on those Japanese women hovering in the backgrounds of Princess Michiko and Simone de Beauvoir's celebrity, so to speak.

Juxtaposing Jan's and Julia's studies, it is striking to me how Japanese women at the time seem to have celebrated two women of opposite types. On the one hand, Japanese women in the 1950s went crazy over the imperial wedding, casting a romantic hope for the modern

family that, to borrow Jan's words, "naturalized heteronormativity, fertility and race privilege." On the other hand, almost concurrently, Japanese women idolized one of the most avantgarde icons of un-femininity, Simone de Beauvoir, in their own personal pursuit of equality and liberation. In Julia's words:

Encouraged by parents, teachers, and the mass media of the 1960s to desire romantic love, but to channel those impulses into marriage and motherhood, the notion of openly pursuing love and sex outside of restrictive marriage conventions seems to have appealed to Japanese women as liberating.

The two media sensations were, come to think of it, in stark contrast to each other.

One might be led to ask: Did the first-generation of post-war Japanese women yearn to be a Princess-Michiko-like devoted wife/mother, or did they dream to be free from all those patriarchal expectations, like Beauvoir's stories embodied? Did Japanese women want to comply with the state ideology, or did they want to resist it?

In fact, this either-or style question is, while tempting, a trick question. Considering that there have always been diversity and disparity among Japanese women, it is only natural that different women lived different realities, looking up to different icons and dreaming different dreams.

Let me complicate the picture a little more with reference to *Haruko's World*, Gail Bernstein's canonical ethnography of life in a Japanese rural village in the 1970s. The main research subject was Haruko, a self-proclaimed "typical Japanese farm woman." She was 42 years old in 1974, which makes her a contemporary of the Japanese women that appear in Jan's and Julia's papers. Even as Haruko was in charge of housework, she also was the family's chief farm worker: she managed her own rice paddies and grew fruits and vegetables that the family consumed daily. She took up miscellaneous part-time jobs that were available in her community and participated in social functions with farming husbands in the village. Still, she considered herself a "housewife."

A further twist surfaces when Haruko confides to Bernstein:

"If I had my choice," Haruko said, "I would rather spend every day knitting sweaters for the children and straightening up the house."²

In response, Bernstein writes:

² Gail Lee Bernstein, *Haruko's World: A Japanese Farm Woman and Her Community* (Redwood City, CA: Stanford University Press, 1983), pp.85-6

For the Japanese farm woman, the idea of women's liberation, if it means anything at all, means freedom from the economic uncertainties and physical drudgery of farming, more time to spend cooking, cleaning, and sewing, and the opportunity to help the children with their homework.³

Apparently, for Haruko the “good wife, wise mother” image was an unattainable dream. She was different from the Princess-Michiko admirer who could actually afford to pursue the bourgeois ideology of My Home-ism, and from the Beauvoir fans, those urban, middle-class, educated women who had the luxury to question and abandon such an idea. Curiously, however, it can be said that Haruko embodied a sort of “unfeminine” life in her rural village, working side by side with men and enjoying independence and freedom of her own—à la Beauvoir—without thinking about it in such terms herself.

What we can begin to see developing here is a wide range of economic, regional and educational backgrounds among postwar Japanese women. Some, with economic and cultural capital, would have molded themselves into the Princess-Michiko-like good wife, wise mother. Others, who fervently followed Beauvoir's feminism, including the female writers that Julia discussed today, would have used their privileged social positions to dream beyond the state ideology. Yet others, like Haruko—and my own grandmothers in Kagawa and Shiga—, lived a reality that could not be further apart from the urban, middle-class femininity that was promoted by the government or resisted by Beauvoir. The socioeconomic and ideopolitical differences—and divisions—were immense.

I would venture to point to many other—or Other-ed—women living under the shadow of the “good wife, wise mother” image: Japan's racial, ethnic, linguistic, and sexual minorities as well as *Buraku* women, women with disabilities, the list goes on. Let us be reminded that *ūman ribu*—and generally second-wave feminism around the world—is said to have failed to address this diversity and disparity among women. In Setsu Shigematsu's words, “the ways in which Japanese feminists can focus on and often limit their concerns to gender issues is a result of a structure of ethnic and class privilege.”⁴ Not only is the category of the “Japanese woman” diverse, within it exist power, hierarchies, and even violence.

Such diversity—un-generalizability, un-categorizability—among Japanese women has been a source of conflict for feminism that continues to this day. Just recently, a public debate erupted over the trend (initiated by Ochadai) among some women's universities that are moving toward opening their doors to transgendered women. While many transgender

³ *Ibid.*, p.168

⁴ Setsu Shigematsu, “Rethinking Japanese Feminism and the Lessons of *Ūman Ribu*: Toward a Praxis of Critical Transnational Feminism,” in Julia C. Bullock, Ayako Kano and James Welker, eds., *Rethinking Japanese Feminisms* (Honolulu, HI: University of Hawaii Press, 2018), p.217.

groups viewed this move positively—although, let us be cautious not to overgeneralize—, some self-proclaimed “twitter feminists,” especially some who have protested strongly against sexual violence, expressed their reservations. Some went so far as to say that they could not tolerate a (former) male body—regardless of the degree of transition—invading safe spaces for women. These heated debates are continuing today, even to the extent that mutual hostilities have culminated in verbal abuse—violence, indeed—among women.

Who are women/Japanese women? And more importantly, who are included in and excluded from the category when we speak so casually of women/Japanese women? To me, the two presentations together seem to highlight, from a historical perspective, the importance of this question at the core of feminism, and it would be great if we could take this occasion to exchange some thoughts on this long-standing question.



Commentary

Gaye Rowley

Waseda University

.....
Gaye Rowley teaches English and Japanese literature at Waseda University. She has written and/or translated several biographies of Japanese women, including *Yosano Akiko and The Tale of Genji* (2000), *Autobiography of a Geisha* (2003), and *An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan* (2013). Her translation of Ōgimachi Machiko's *Matsukage nikki* (In the Shelter of the Pine, 1710-12) is almost complete.

Simone de Beauvoir has been an inspiration to many of us who came of age during the heady days of second-wave feminism—a movement that was touched off by the publication of *Le Deuxième Sexe* in 1949 and its subsequent translation into more than three dozen languages. Perhaps that is why I cannot say just when I became aware of Beauvoir, both her life and her work. It cannot have been at the all-girls' school I attended in suburban Australia, where we learned French from a Frenchwoman—known to us, in the way of girls' schools of that era, simply as “Madame”—and who set Françoise Sagan's *Bonjour Tristesse* (1954) for us to read. But I do recall it was in Japan that I first read Beauvoir—her *Memoirs of a Dutiful Daughter*, during the summer holidays of 1982, the year I was an exchange student at Tsuda College. The other day I opened my battered copy for the first time in many years and was interested to see that it was translated from the French by the British poet James Kirkup (1918-2009), who taught English in Japan for more than thirty years.¹

A sense of how important Beauvoir was to Japanese intellectuals began to dawn a few years later, when I briefly studied French again, this time at Japan Women's University. After an introductory semester of grammar, we were set an abridged version of *Mémoires d'une jeune fille rangée*, complete with explanatory notes in Japanese, to read. Our teacher was a Japanese man, who had participated in the student protests of the late 1960s—in Paris or Tokyo or perhaps both, I no longer recall—and, now faced with classrooms of apolitical young women, would occasionally attempt to shake us out of our somnolent apathy by reminiscing about the dramatic struggles he had experienced and the liberated way in which he and his friends had sought to live. “We were Sartre and Beauvoir!” he would exclaim. “We would live and die for love and never let convention tie us down!”

¹ Kirkup's translation of *Mémoires d'une jeune fille rangée* (1958) was first published by André Deutsch and Weidenfield & Nicholson in 1959. Rpt. Penguin Books, 1963. For details of Kirkup's career, see the obituary by Glyn Pursglove and Alan Brownjohn in *The Guardian*: <https://www.theguardian.com/books/2009/may/16/obituary> (accessed 19 May 2019).

Thanks to Julia Bullock's paper today, as well as her several published essays,² we know a great deal more about where my French teacher was coming from, and just how widespread that view of the Sartre-Beauvoir partnership was among left-leaning intellectuals—the antithesis of the ideal of married domesticity that, as Jan Bardsley showed in her paper today, was modeled by Crown Prince Akihito and Princess Michiko during the same period.

Given the inherent conservatism of the imperial institution—indeed, of any hereditary monarchy—it's worth noting that present members of the imperial family continue to demonstrate a profound commitment to the radical pacifism of Japan's postwar constitution. Forbidden to comment on politics though they are, their decision no longer to visit Yasukuni Shrine since the controversial enshrinement in 1978 of fourteen Class-A war criminals nonetheless speaks volumes. (The last visit to Yasukuni Shrine made by a member of the imperial family was that of the Showa Emperor in 1975.)

So—the years passed, and one day I found myself preparing a course about Japanese women's writing for undergraduates in the School of International Liberal Studies at Waseda. Students' common language would be English: all readings would be in English and our discussions would also take place in English. Searching the shelves of my office, I was delighted to come across a copy of Beauvoir's essay "Women and Creativity," a translation of the lecture "La femme et la création" that Beauvoir gave in Japan when she and Sartre visited in 1966.³ The translation appears in a collection edited by Toril Moi (b. 1953) entitled *French Feminist Thought*; looking at it again took me straight back to my graduate student days, when so-called "French feminism" was a big thing.

In "Women and Creativity," delivered to an audience at Hibiya Public Hall on September 22, 1966, Beauvoir suggests answers to questions about women as artists and writers that continue to plague us today. It's the perfect catalyst to spark discussion at the beginning of a course focusing on women writers. The main question Beauvoir seeks to answer is why—and I quote from Mallaghan's English translation here—why "the achievements of women in every sphere—politics, the arts, philosophy, etc.,—have been, in terms both of their quantity and of their quality, inferior to the achievements of men." (p. 17)

Whatever we might think of this view today, Beauvoir finds it a useful position from which to launch her polemic. She ranges widely, drawing upon Virginia Woolf's essay *A Room of One's Own* (1929), the examples of Dutch painter Vincent Van Gogh (1853-1890) and Swiss sculptor Alberto Giacometti (1901-1966), and Japan's own Murasaki Shikibu, who

² Julia C. Bullock, "Fantasy as Methodology: Simone de Beauvoir and Postwar Japanese Feminism," *U.S.-Japan Women's Journal* no. 36 (2009): 73-91; "From 'Dutiful Daughters' to 'Coeds Ruining the Nation': Reception of Simone de Beauvoir's *The Second Sex* in Early Postwar Japan," *Gender and History* 30.1 (2018): 271-285.

³ "Women and Creativity," translated by Roisin Mallaghan, in *French Feminist Thought: A Reader*, ed. Toril Moi (Oxford: Blackwell, 1987), pp.17-31. Another translation, by Marybeth Timmerman, appears in Simone de Beauvoir, *Feminist Writings*, ed. Margaret A. Simons and Marybeth Timmerman (Champaign: University of Illinois Press, 2015), pp.155-169. Ursula Tidd's "Introduction" to this translation, pp.149-154, provides much useful context.

she describes as “your great writer” (p. 26) and *The Tale of Genji* as “the greatest work in the world, I believe, written by a woman.” (p. 27)⁴

First, Beauvoir argues, “it is absolutely fallacious to claim that the opportunities of men and women have been equal over the last twenty years.” (p. 18) Women may have entered the professions, but there are few of them, they earn far less than men, they are tied down by domestic drudgery, etc.—it all sounds horribly familiar, doesn’t it—and therefore “the professional mediocrity of women can be explained by a wide range of circumstances which are a product not of their nature but of their situation.” (p. 21)

Second, Beauvoir goes on to argue that “the internal conditioning of women is much more important in explaining the limitations of their achievements than the external circumstances.” “Everything,” she states, “conspires to encourage the young boy to be ambitious, while nothing encourages the young girl to be likewise.” Beauvoir uses as an example here the famous passage in Murasaki Shikibu’s diary, where “she tells how when her brother was studying Chinese he had difficulty learning the Chinese characters, while she was able to master them very quickly indeed; and her father said...what [a] shame that she is not a boy!” (pp. 26-27)⁵

As for the adult world, Beauvoir observes, “this world is a man’s world, the important decisions, the important responsibilities, the important actions fall to men.” (p. 27). More than half a century later, *how little has changed!* we might ourselves observe. Beauvoir continues: “Women live on the side-lines of this world...they are used to being spectators, and this is a privileged position for anyone who wants to write.” (p. 27) This is why, Beauvoir argues, “there are a large number of important and successful works by women.” (p. 28) The examples she gives are Murasaki’s *Tale of Genji*, and *La Princesse de Clèves* by Madame de La Fayette.⁶

And yet, Beauvoir goes on to argue, “both these women...remain fundamentally in agreement with the society of their time.” Whereas “truly great works are those which contest the world in its entirety” and “this is something which women just do not do. They will criticize, they will challenge certain details; but as for contesting the world in its entirety—to do that it is necessary to feel deeply responsible for the world.” (p. 28)

At least as far as *Genji* is concerned, one sees what Beauvoir means: Murasaki Shikibu subtly criticizes the workings of power at court, she undercuts even her hero’s pretensions,

⁴ The complete French translation of *Genji* by René Sieffert (1923-2004), *Le Dit du Genji*, was not published until 1977-1985. Presumably, then, Beauvoir’s knowledge of *Genji* was derived either from a reading of Arthur Waley’s English version, published 1925-1933, and/or the partial French translation by Yamata Kikou 山田菊 (1897-1975), published in 1928, and based on the first volume of Waley’s translation that comprised the chapters “Kiritsubo” through “Aoi.”

⁵ In English, see Richard Bowring, trans., *The Diary of Lady Murasaki* (Harmondsworth: Penguin Classics, 1996), pp.57-58.

⁶ Marie-Madeleine Pioche de la Vergne (1634-1693), countess of La Fayette. *La Princesse de Clèves* (1678) is an historical novel set at the court of Henri II (1519-1559; r. 1547-1559), in which most of the characters, except for the Princess herself, are real people, and all the anecdotes relating to court life are true. In English, see the translation by Nancy Mitford (1950), revised by Leonard Tancock (Harmondsworth: Penguin Classics, 1978).

but she does not “contest the world in its entirety”—by which Beauvoir seems to mean live dangerously like Van Gogh or Giacometti. Of course, I cannot agree with Beauvoir that this makes Murasaki Shikibu’s tale less than “truly great.”

At the end of her lecture, Beauvoir talks about creativity. “People have a totally erroneous view of the nature of creativity,” she argues. “They conceive of it as some sort of natural secretion; the artist, the writer, will produce works of art just as the cow produces milk.” (p. 31) But creativity is much more complex than that, she goes on to explain. “Creativity is...conditioned by all aspects of society.” (p. 31) And because women have always been conditioned by traditional models, their circumstances entirely different from men, it’s understandable that their achievements so far have been inferior to that of men.⁷

Beauvoir concludes her lecture with a rousing call to action:

I want women to realize...that it is because they have not had a real chance that they have not done more; that if they fight for greater opportunities, they are at the same time fighting for their own achievements. (p. 31)

I hope that my short summary of one of Beauvoir’s 1966 lectures in Japan has at least suggested how productive it is to discuss with students. To give an example from my own experience, one of the points that someone in the class will always make is that the conditions that deter and prevent women from achieving more are also problems for underprivileged men and members of minorities—that the problems are of class and “intersectionality” and are not limited to gender.

Still, disagree though we may with aspects of Beauvoir’s argument, and especially with her idealization of the male creative genius who does battle with the world, seemingly alone, it is heartening to think that her work lives on, both in our own lives, and, as Julia noted in her paper, in the lives of those who heard her speak, or met her, or later read and translated her work.

Acknowledgments: I am grateful to Professor Jan Bardsley for inviting me to participate in this symposium. Jan’s positive energy, both inside and outside the classroom, is legendary: she makes anything you do together a pleasure. It’s also been a pleasure to read Professor Julia Bullock’s work on the impact of Simone de Beauvoir in Japan, and to meet Professors Aya Kitamura and Fumie Ōhashi as well as the other members of the Institute for Gender Studies at Ochanomizu University. Thank you all for having me.

⁷ Germaine Greer made a similar point in *The Obstacle Race: The Fortunes of Women Painters and Their Work* (London: Secker and Warburg, 1979. Rpt. London: Tauris Parke, 2001), p.327: “There is then no female Leonardo, no female Titian, no female Poussin, but the reason does not lie in the fact that women have wombs, that they can have babies, that their brains are smaller, that they lack vigour, that they are not sensual. The reason is simply that you cannot make great artists out of egos that have been damaged, with wills that are defective, with libidos that have been driven out of reach and energy diverted into neurotic channels.”

Question and Answer Session

Jan Bardsley: I'd like to thank our two discussants for very interesting comments. One of the things that Aya brings up is the importance of shedding light on the differences among women. This reminds me of the Meiji period when there were New Women like Hiratsuka Raichō who opposed the ideology of *Ryōsai-kembo* but there were working class women who yearned to become middle-class "good wives, wise mothers." In every era, there are always differences among people. I would say with the royal wedding in 1959, the magazine *Fujin Kōron* was the only women's magazine at the time that tried to damp down the romantic quality of the event and actually showed different attitudes among Japanese people towards the royal wedding. They tried to illustrate the idea of diversity beyond the romance and opposition to the emperor system.

Julia Bullock: I also want to echo my thanks to Aya for her very important point here about the differences among women. I would like to add that it's very possible that an individual woman may have wanted to be simultaneously a princess and a philosopher. Women were presented with many options and each of them had consequences. They had a very difficult set of choices to make. That's probably still true of many young women in that situation. But particularly at that time, given the timing so close to the end of the occupation and the fact that the changes that the occupation attempted to render in Japan were very uneven in many ways in terms of their effects. So that women had a very broad variety of conflicting options to choose from. I think that the presentations today get that complexity.

Q1: Do we have any further detail about Sartre and Beauvoir's lecture tour of Japan?

Julia Bullock: This was evidently organized by Sartre's publisher Jimbun Shoin in cooperation with academics at Keio University. One of those academics was a fellow named Asabuki Sankichi who was one of the older brothers of Asabuki Tomiko. Actually I am not entirely sure what level of involvement he had here but I would like to think that it's not a coincidence that he and his sister were very well acquainted with Beauvoir and Sartre and their intellectual community. Shirai Koji, a very famous scholar of French literature and also of Sartre in particular, was another organizer. There was a kind of a collaborative effort that also then expanded to many other universities, particularly in the Tokyo area. Beauvoir and Sartre did visit many different campuses. They were also invited by publishers such as Asahi Shimbun and maybe *Fujin Kōron*. There were a number of other sponsors that invited them to give talks. They gave lots of talks.

Q2: Was there any actual interaction between Beauvoir and Princess Michiko?

Julia Bullock: Not to my knowledge. I do know that while Beauvoir and Sartre were in Japan they met with many intellectuals and political activists, for example, representatives of Beheiren, the anti-Vietnam War organization. They were both very much sort of leftist activists and they were very interested in meeting people like them. Beauvoir also was really interested in meeting women workers and she actually met with women dock workers and construction workers. She was really interested in women and labor. She wanted to meet people from all walks of life, but I don't think she managed to meet the princess. And I am actually not sure how that interaction would have happened, but it would have been a fascinating conversation I think.

Jan Bardsley: One thing occurs to me, because it's such an interesting question, what would Beauvoir and the princess discuss? When I was teaching class in the United States on women writers in Japan, for the final essay students had to write imaginary conversations. For example, Enchi Fumiko might talk to Beauvoir or Murasaki Shikibu or Madame Butterfly. Students were instructed to pull quotes from what they said or had written. So it wasn't totally imaginary, but students had to create what were the possibilities of these people meeting. Their essays were always interesting.

Q3: Nowadays people seem to be more interested in computers than philosophy. How can we make people reconsider existentialism as means to think about human existence?

Julia Bullock: Obviously existentialism had a moment in the 1950s and 1960s. Ironically, by the time Beauvoir made it to Japan, the existentialist philosophy had kind of fallen out of favor in Europe. It was a bit passé already in France and attention had moved on to other things like post-modernism. Having said that, I will limit my response to Beauvoir rather than existentialism as a whole because it's a very broad question. Actually her thought was shaped by many strands of philosophy, and existentialism was one. She also was very much interested in phenomenology and drew very much from that brand of philosophy as well as many others. She was very much shaped by socialism as well. So she was eclectic and chose widely from different philosophical strands. But I do think one of the reasons why there has been a rethinking of Beauvoir in recent years is that women are discovering that many of the problems she highlighted are ones which we are still dealing with. The issues, for example, of the incompatibility between career and family, the lack of support in society for childcare or for the specific needs of mothers in particular. These are questions that I know Japan is struggling with, the US is struggling with, and many other advanced nations are also struggling with. I think that the specific aspects of Beauvoir's thought may have been grounded in the time that she

wrote *The Second Sex* in 1949, and some of the broader problems that she grapples with are still very much relevant.

Q4: Do you think that Beauvoir impacted lesbianism in Japan as well?

Julia Bullock: This is such an important question. I really appreciate the opportunity to talk about this. Beauvoir has certainly been criticized for her reluctance to speak out about her own experiences with other women and also more generally about queer issues. Ursula Tidd, a scholar of Beauvoir, has written about this issue and one thing that she highlights is that Beauvoir actually was in danger of prosecution for her relationships with other women. The police investigated her in France. Her choice not to write about her own experiences, I think, was a self-protective one, because French society at the time was very homophobic and it was illegal to have a relationship with members of the same sex. It was actually quite a scandal when the police began investigating her because she had relationships with her own students. She actually quit teaching for this reason. Considering those circumstances, we can understand why she might not have wanted to be explicit about her sexuality in her memoirs. Having said that, it really is a missed opportunity, isn't it? Here is one of the greatest feminist philosophers of all times who has this personal experience that enables her to speak on a very deep level about these issues of sexuality and she couldn't.

I should maybe retract that last thing a little bit by saying that in *The Second Sex* she actually does have a chapter on lesbianism. So she wrote about it in an academic and theoretical way, avoiding talking about personal experience. For the scholar who is interested in this question and in Beauvoir's relationship to issues of sexuality beyond the heterosexual frame, one can certainly look to that chapter of *The Second Sex*. I do know that it was omitted in some language translations. I don't think Japanese was one of them. There is also a treasure trove of letters that she wrote to Sartre in particular but also to other members of a close knit circle. Those letters were preserved and published after her death and this was really when people became aware of her bisexuality. So she wrote about this in private correspondence that was then collected by the woman who inherited her estate, and it has been translated. That's available if those of you who are interested in this question want to probe more deeply into that.

Q5: The complexity of meaning can be lost in translation but to a certain extent you have to make a story simple in writing, otherwise that idea will not come across well or be widely understood. How do we strike a proper balance between simplification and the complexity of the original?

Aya Kitamura: My talk about the complexity and diversity of Japanese women is never well received. When people ask, "What are Japanese women like?" I start saying, "Well, which

Japanese women are you talking about?" People don't like to hear my talk because I don't answer the question in a simple way. It is true that the demand for simplified, less complex stories is very strong.

Julia Bullock: I am becoming more and more interested in the field of translation studies for this reason actually. One of the things that is both frustrating but also perhaps exciting is that there is no good translation, and very often there is no bad translation. There are different translations. I think the key here is to be mindful when one chooses words for translation as to what they imply. I know this sounds like an indecisive answer, but I think it's really true particularly when we get to the question of gender, that is, how to translate gendered experiences, how to translate experiences related to sexuality. These problems are already fraught, so finding words to accurately convey what an author wants to say about them is extremely difficult. I always worry when I give a talk like this that I am going to sound too critical about the translators. That's not my intention. Mostly what I want to point out is just what is at stake when we try to translate something and how we can think about the process in a rich way, so that we keep open the possibility for texts to mean multiple things at the same time.

Jan Bardsley: I really love translating and I translated a lot of women writing in *Seitō* magazine, the Blue Stockings. It was so difficult. I would take my drafts to various Japanese friends, going over them with different people. Because I wanted to see if I really understood the original and then I wanted to make it very accessible to English readers. For the final drafts of the translation, I put away the Japanese and just looked at the English and I would read the English aloud and then change it to sound natural and to flow well. I thought that was the best service to a Japanese document. As Julia was mentioning, the most difficult part was the ambiguity. You wonder whether it's actually ambiguous or you're just missing something, and when it is ambiguous, you struggle to capture that same ambiguity in the translation.

And then a really interesting problem is what you do with dialects. For example, let's say you are translating a conversation between speakers in Tokyo dialect and Kansai dialect. How can you differentiate these two dialects in English? Tanizaki Junichiro's *Kagi* (The Key) is another example of a similarly interesting problem. In this novel, the husband writes in katakana and the wife writes in hiragana. What do you do with it? There is always a little bit lost in translation.

Gaye Rowley: When you come across a problem like dialect or katakana - hiragana, I think the only thing you can do is despair, really. But I think your approach to what you did with the *Seito* translation is wonderful, figuring that in the end you have to put the Japanese away, you have to look and listen, and hear the English in your head. How this sounds as English is what the audience wants. As you said, that's the best service you can do with the Japanese that you are translating from. I completely agree with you there, I think that's wonderful.

Aya Kitamura: I have been wondering whether there can be a neutral translation, as you, Julia,

said there is no good or bad translation. Similarly, I have been wondering if I can be a neutral ethnographer — going into a place and describing things neutrally. I haven't given up on that and what I try to do is to write [to let the reader know] who I am, who is writing what, and from what perspective. I wonder if the positionality of a translator might be an important aspect to translation. Translators cannot be machines.

Julia Bullock: I think that may be perfect as a response to Aya; the members of the 1997 translation team were very open about this. In the *Afterwards* of two volumes of the translation they describe in detail what they did and why they did it. We can disagree or agree with translators but at least we know what they did and why they thought that was a good idea. This is something the first translation was missing, and we only discovered much later that there were many parts of the text that had been changed dramatically. So yes, it was helpful that they laid out very clearly the interventions they made into the text.

Q6: How did academics in Japan discuss the mistranslation about *The Second Sex*?

Julia Bullock: I am not sure I can answer your question completely but I will give it a try. As for the first translation by Ikushima Ryoichi, the one from 1953, for many generations of women that was the only Japanese translation of *The Second Sex*. And it became definitive for many people in their understanding of what Beauvoir had to say. You can imagine that by 1997 when the second translation was released, the translators had quite a difficult road in terms of changing opinions of what people perceived to be Beauvoir's message. This translation team started their work in 1980s. It took a really long time. This is a very long text, and they were writing and publishing about it before they published the translation itself. They wrote a lot of essays in various academic journals, in particular trying to expose the problems with the first translation, to explain why it needed to be retranslated, and to promote the second translation as what they called definitive. Obviously there were many people who heard this message because you can see some change in academic scholarly writing about Beauvoir after that point. People like Sato Hiroko quoted the translators' published works in their own analysis. Interestingly enough though, there were also plenty of people continuing to write in the mid '90s criticizing Beauvoir's work on the basis of the first translation. For example, in 1995 a very famous woman writer of literature Saegusa Kazuko wrote a series of critiques of *The Second Sex* and much of her criticism seemed to be based on that first translation and all the problems that were associated with its mistranslation. It's interesting to me that even in the mid '90s there were many women writing negatively about Beauvoir having maybe not received the message of what was wrong with the first translation. Some scholars were influenced by the second translation, some didn't pick up on it right away or didn't fully get the message. In terms of readers learning about Beauvoir with that 1997 translation, there is a generational difference, and the reception has been very different because of that.

Symposium Report

On the 19th of May 2019, the Institute for Gender Studies (IGS) hosted the international symposium, 'The Philosopher and the Princess: Freedom, Love, and Democracy in Cold War Japan', which was coordinated by Jan Bardsley (Specially Appointed Professor, IGS/Professor, The University of North Carolina at Chapel Hill). Professor Bardsley and Julia C. Bullock (Associate Professor, Emory University) made keynote speeches. Aya Kitamura (Lecturer, Tsuda University) and Gaye Rowley (Professor, Waseda University) were invited as discussants, and Fumie Ohashi (Associate Professor, IGS) served as the moderator.

Post-war democracy and economic development in Japan gave rise to new insights among young women in Japan in the 1950s and 1960s. The French feminist philosopher Simone de Beauvoir and the Japanese Crown Princess Michiko became role models who introduced these women to new ways of living their lives. Beauvoir, for example, encouraged women to obtain financial independence, and her romantic relationship with Jean-Paul Sartre represented a new form of love. Michiko Shoda, on the other hand, married the crown prince and became what others regarded as a perfect housewife. At first glance, these two women's paths in life might seem very different, but they were both women who dreamt of freedom, opportunities for self-discovery and love. Bardsley's presentation on Princess Michiko ('Romance Revisited: The Royal Wedding of 1959 Viewed Sixty Years Later') and Bullock's presentation on Beauvoir ('Beauvoir in Japan: Japanese Women and *The Second Sex*') shed light on the differences and similarities between these two formidable women in history.

In her presentation, Bardsley explained how Princess Michiko's life empowered women to dream about becoming a princess. In Japan, a commoner marrying a crown prince for love was an improbable fairy tale prior to the Second World War. Their royal wedding in 1959 can be seen as a projection of youth and beauty (as presented by the princess) and the success of the post-war democratic reform. When she became a mother, the progressive princess did not follow the royal family tradition; instead, she willingly took responsibility for childcare and housework. This iconic 'Princess Homemaker' who supported her husband as a housewife, became a model for the post-war family in the 1960s. The media praised her image, and young women aspired to become a homemaker like the princess. She was perceived as a woman who realised her dreams of freedom, self-discovery and love.

However, some women did not approve of such a lifestyle. Bullock discussed the women who were against the idea of pursuing a 'career' of becoming a wife and mother. These women were attracted to their vision of freedom, which Beauvoir presented in her book *The Second Sex*. This freedom was to be secured through financial independence and professional success. In the 1960s, Japanese society and politics moved towards a conservative viewpoint, and the post-war reforms in Japan were set aside. This development coincided with Princess

Michiko's appearance as the perfect homemaker. While the younger generation supported gender equality which the post-war reform envisioned, the princess revived an old fashioned idea of femininity (i.e. 'Good Wife, Wise Mother'). At the same time, Japanese women who read Beauvoir's first memoir published in 1961 discovered that she had managed to establish financial and intellectual independence. Japanese women admired her for her independence and her open relationship with Sartre.

Japanese feminists, however, criticised her discussions about the liberation of women, interpreting them as a denial of motherhood and femininity. Beauvoir's well-known statement in *The Second Sex*, 'One is not born, but rather becomes, a woman', presently describes the concept of gender. However, in the 1953 translation, some of her arguments were mistranslated. This turned Beauvoir's criticism of gender into negative expressions about women's bodies. Thanks to a series of movements in the following decades—which included a re-evaluation of Beauvoir's work after her death in 1986, the development of women's and gender studies in Japan and the publication of a new, 'decisive' Japanese translation of the book—the misunderstanding was cleared, and Japanese feminists rediscovered Beauvoir's philosophy. Today, her writings are read as important literature in gender studies, and they inspire the women fighting against persistent traditional gender norms in contemporary society.

In response to the presentations by Bardsley and Bullock, Kitamura discussed the risk of generalisation of people by category. For example, she argues that people tend to talk about 'Japanese women' as a group of identical people without giving much consideration to the variation within the group. Among Japanese women, there were those who admired Princess Michiko and those who worshipped Beauvoir. Although their lifestyles and attitudes seem different, they were all 'Japanese women'. Moreover, Kitamura pointed out, there must have been other types of Japanese women who were excluded from these two urban, middle-class groups. For example, in the farming villages, some women were working like men while seeking ways to spend more time on homemaking and childcare. In other words, although these women had acquired independence and freedom, which Beauvoir preached, they dreamt of becoming a housewife like Princess Michiko. Furthermore, aside from diversity, class structures and power relationships also exist among Japanese women. The second wave of feminism, which was inspired by Beauvoir's philosophy, is often criticised for overlooking the diversity among Japanese women. In recent years, however, a movement to establish inclusive societies for transgender people activated the debate on who and what a woman is. There are always questions about who should be included or excluded when a social category is presented. These matters of categorisation interest Kitamura, and she is researching how we *cannot* speak of 'the Japanese Woman'.

Rowley discussed the enduring value of Beauvoir's arguments by focusing on the speech she gave at the Tokyo Metropolitan Hibiya Public Hall in 1966, 'Women and Creativity'. In

the speech, Beauvoir argued that women's underachievement in various fields (such as politics, philosophy and the arts) was not because they were less capable than men. To support her argument, she referred to the Japanese historical figure Murasaki Shikibu, who was the author of *The Tale of Genji*. In her girlhood, Murasaki Shikibu read classical Chinese literature very well. When her father discovered this, he lamented over his misfortune. If only she were a boy, he said. The story suggests that boys are raised to be ambitious and girls are excluded from that kind of expectation. Beauvoir argued that such exclusion prevented women from being successful in their professional careers. She stressed that, in this way, women's opportunities to express their creativity were limited, and they had to fight for a chance to prove themselves. These issues surrounding gender inequality, which Beauvoir pointed out in the 1960s, still permeate society and are continuously challenged. Also, the women affected by gender inequality are now aware that they share these challenges with other minority groups and people who experience multiple or intersectional forms of discrimination. Half a century ago, Beauvoir preached the importance of freedom and self-discovery, and that advocacy has the same significance in the 21st century. Rowley stressed that the teaching of Beauvoir's text in university classrooms is still meaningful and relevant.

The discussions presented in the keynote speeches and comments were deepened in the Q&A sessions. In these sessions, participants raised topics such as existentialism, sexuality and gender equality indexes. The discussions on translation—an essential part of all the speakers' works—were lively. The discussions emphasised that translation is a complicated process that involves reading between the lines and taking cultural background into account. Translation is not a simple and systematic process of replacing words; it is an act of transmitting information and meaning through a translator as the medium. Because translation inevitably involves the perspective of the translator, questions about neutrality are always raised. Researchers who take on global research projects and present the outcomes must keep such a cross-cultural aspect in mind. The presentations and discussions were thought-provoking.

Kumi Yoshihara (Project Research Fellow, IGS)

<http://www2.igs.ocha.ac.jp/en/report/2019/05/0519-2/>

国際シンポジウム
哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義

【コーディネーター】

ジャン・バーズレイ

(お茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)

【運営スタッフ】

吉原公美 (お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任リサーチフェロー)

ほか IGS スタッフ

【主 催】

お茶の水女子大学 グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所

《報告書英日翻訳》

吉原公美

Working language of the symposium: English

IGS Project Series 14

国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」

International Symposium " The Philosopher and the Princess "

《編集担当》

吉原公美

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel: 03-5978-5846

igsoffice@cc.ocha.ac.jp

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

2021年 3月刊行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846 FAX: 03-5978-5845
igsoffice@cc.ocha.ac.jp
<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

